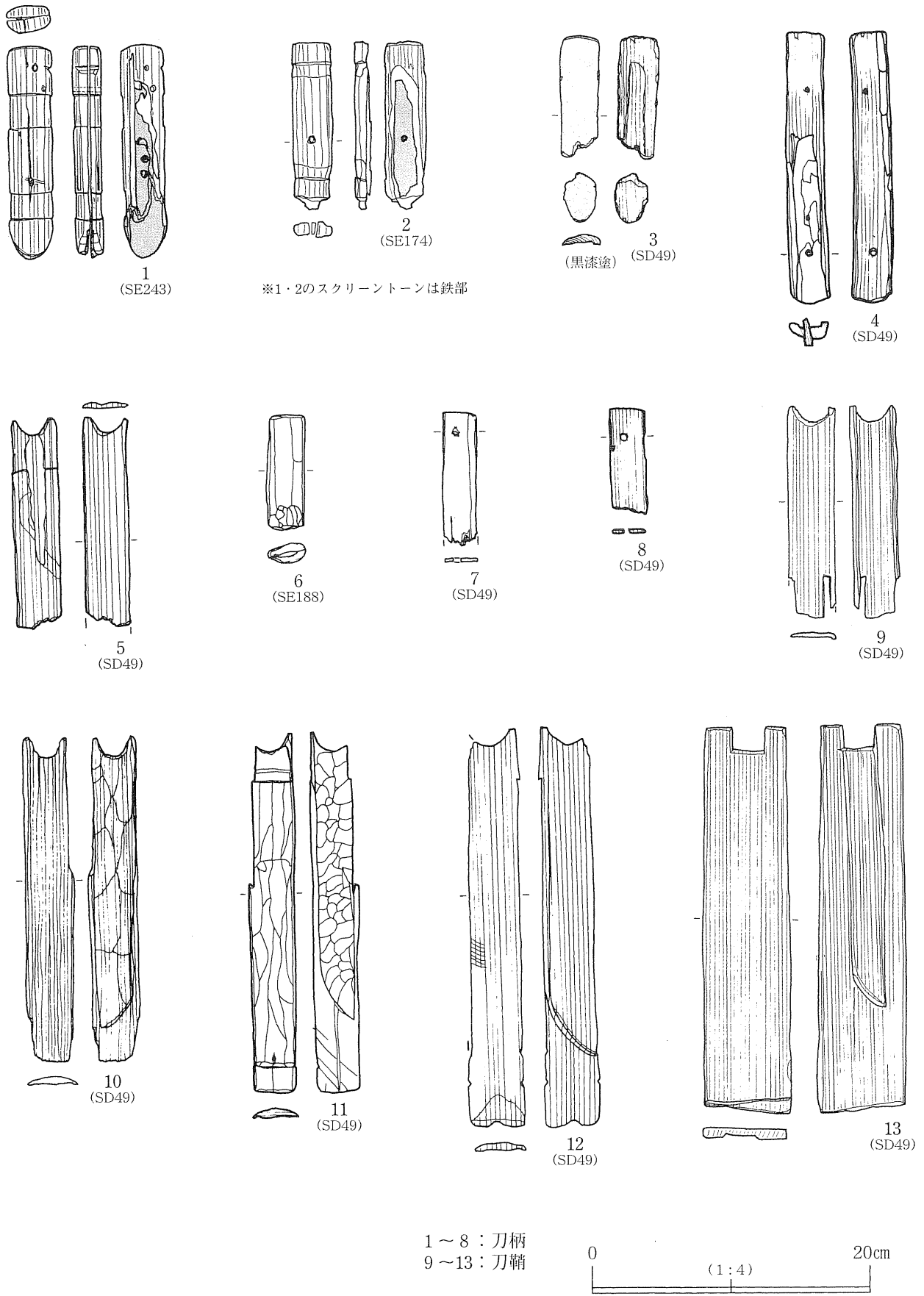
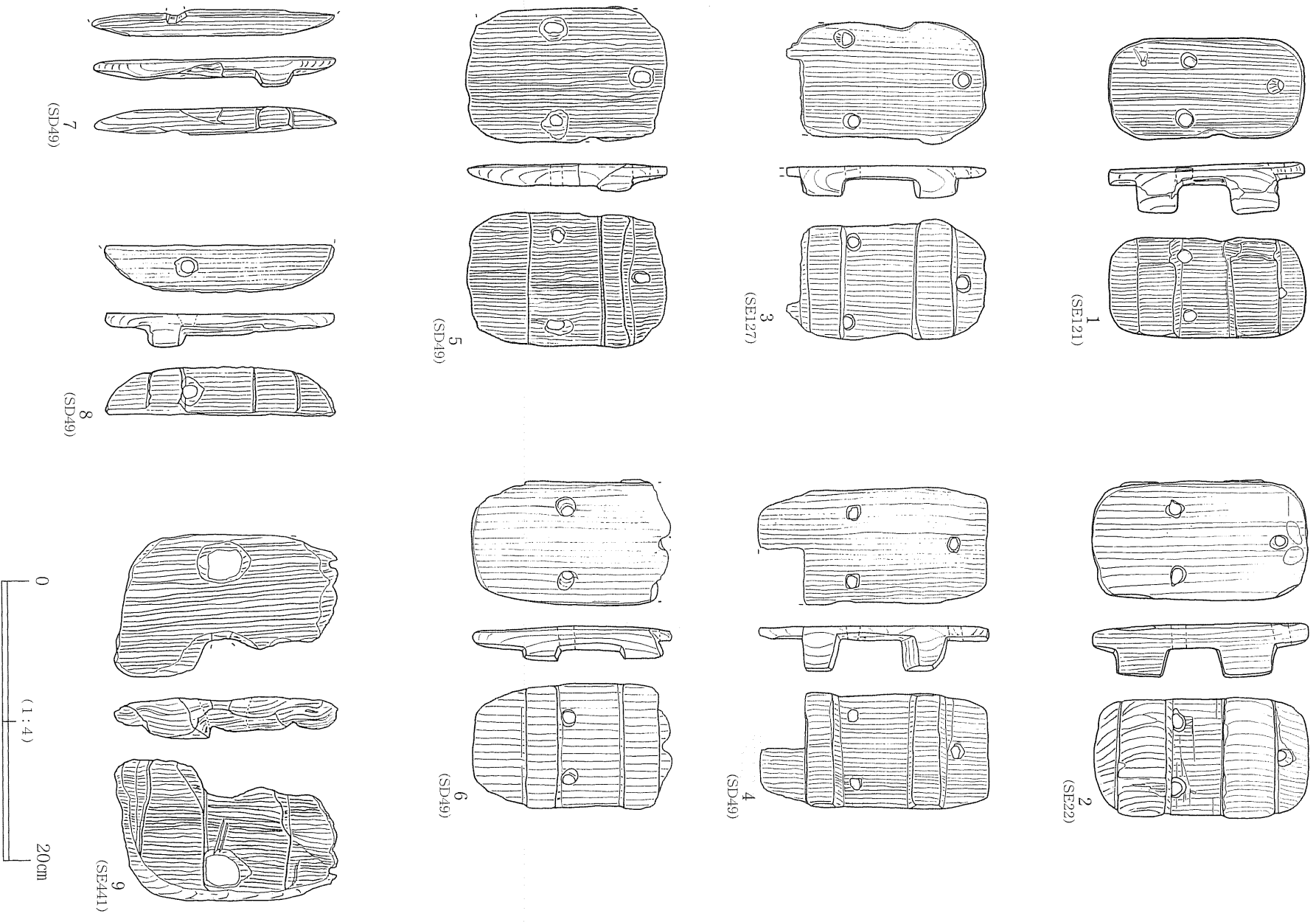


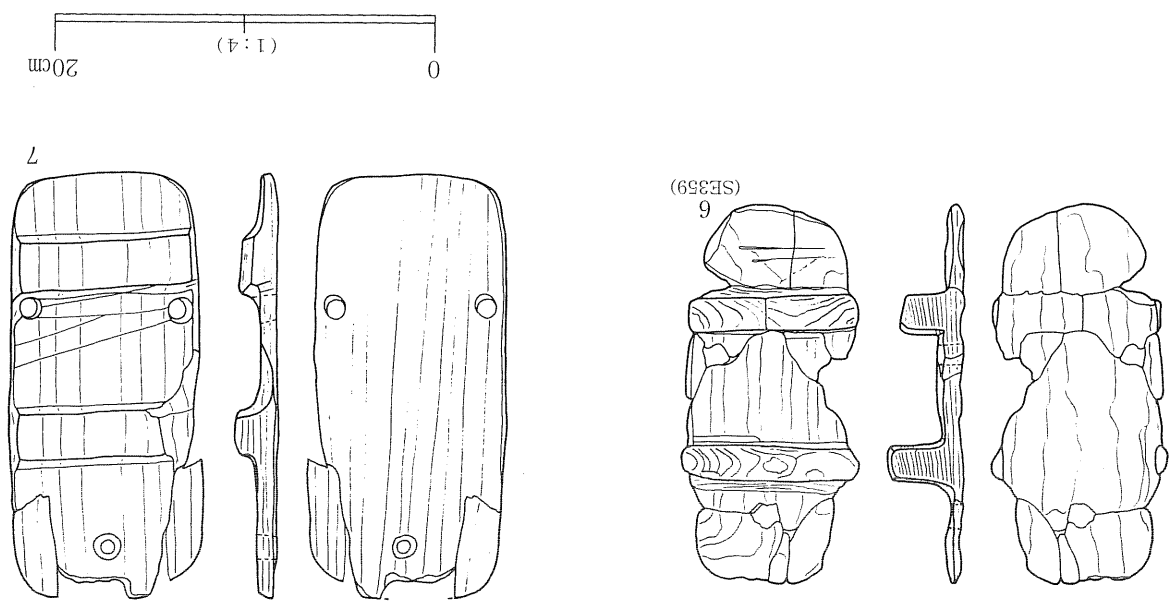
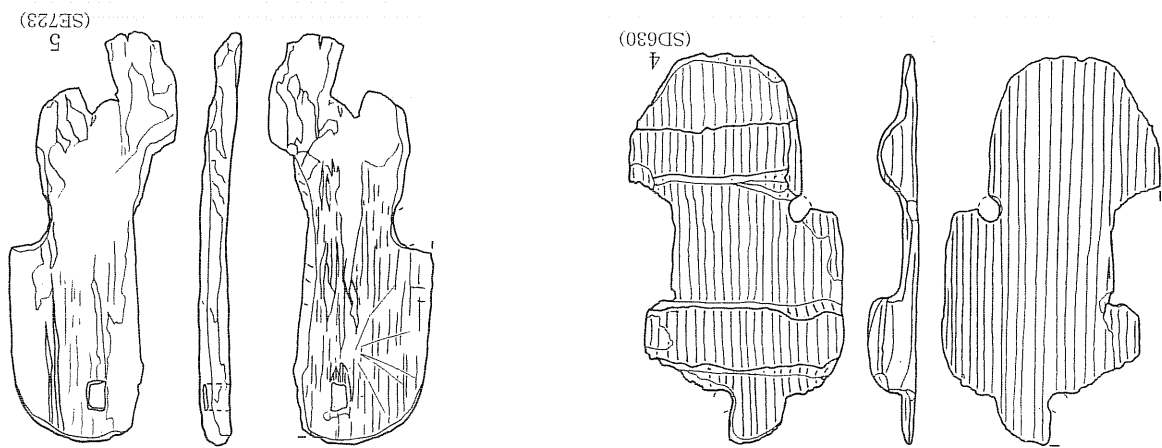
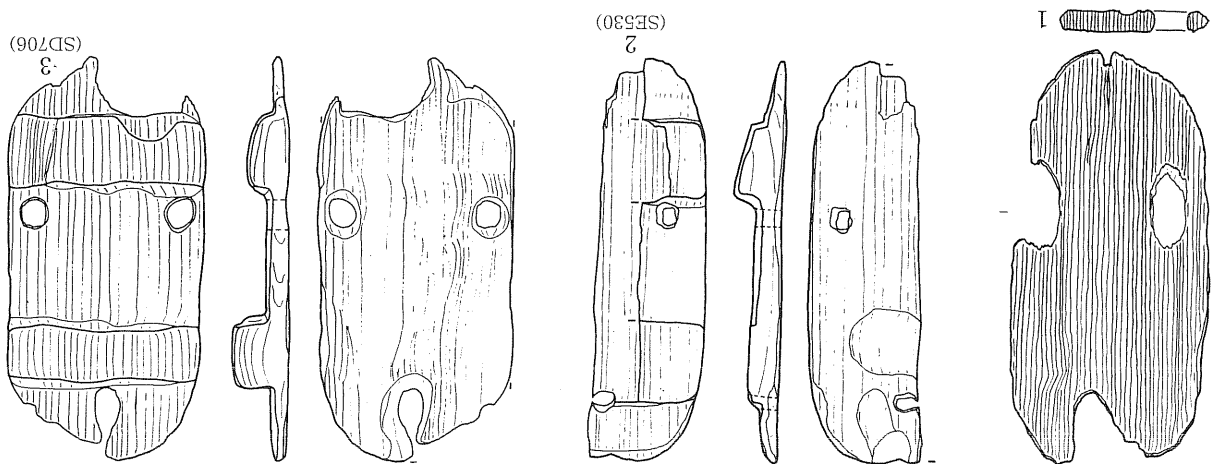
第296図 出土遺物(46) 木製品：装身具(1) 櫛・扇子骨・用途不明具



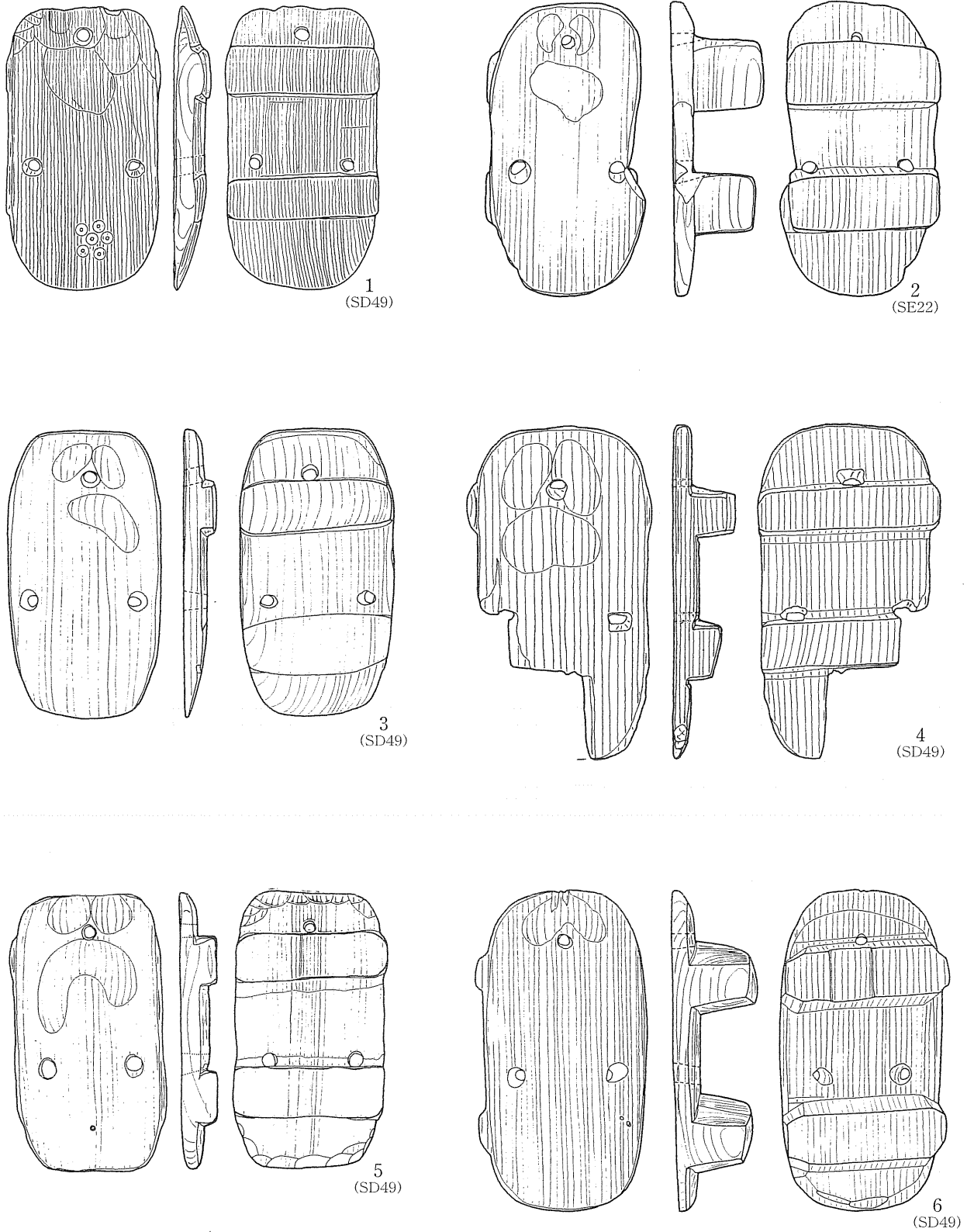
第297図 出土遺物 (47) 木製品：装身具 (2) 刀柄・刀鞘



第298図 出土遺物 (48) 木製品：履物 (1) 下駄 (1)

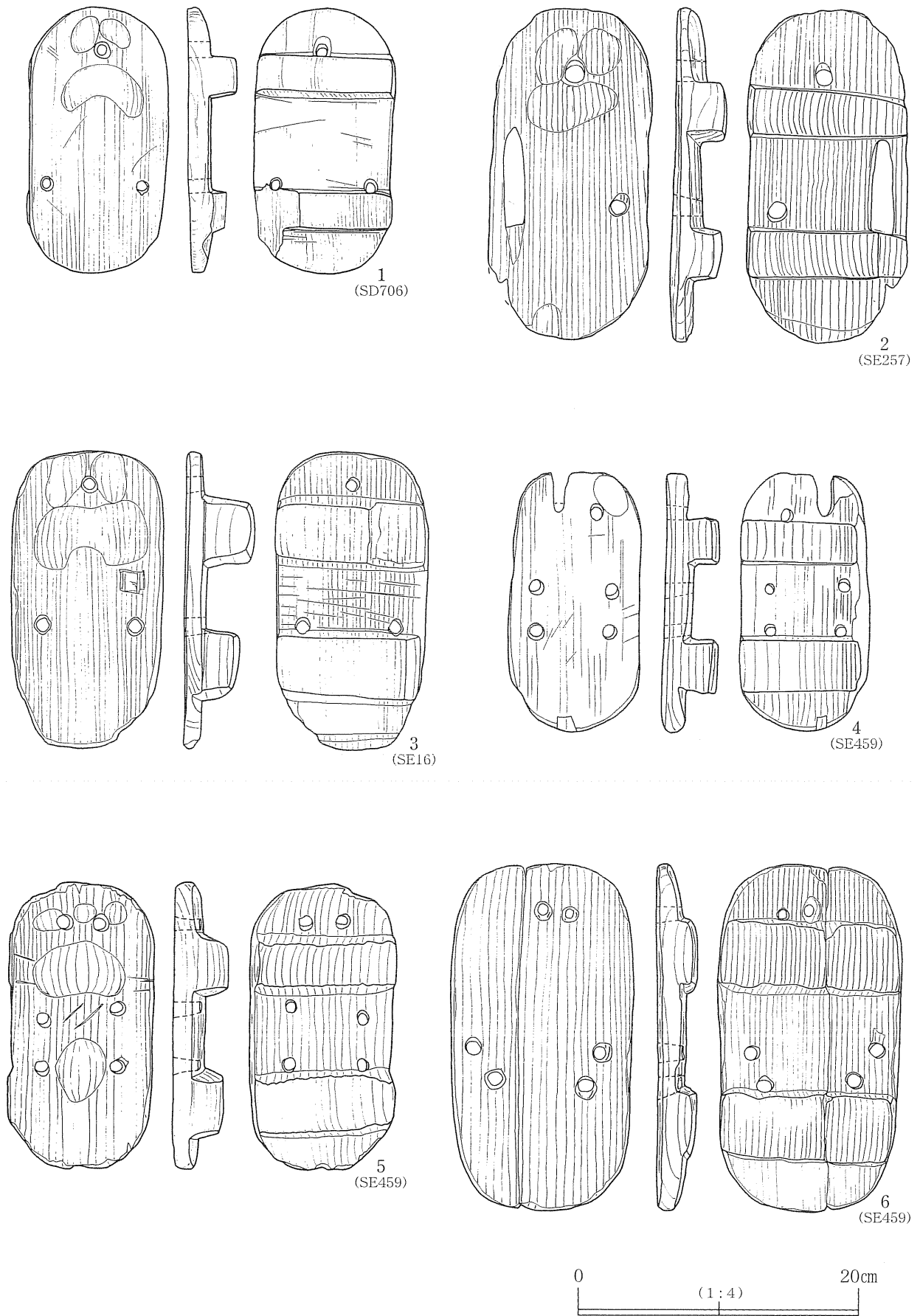


第299図 出土遺物 (49) 木製品：履物 (2) 下駄 (2)

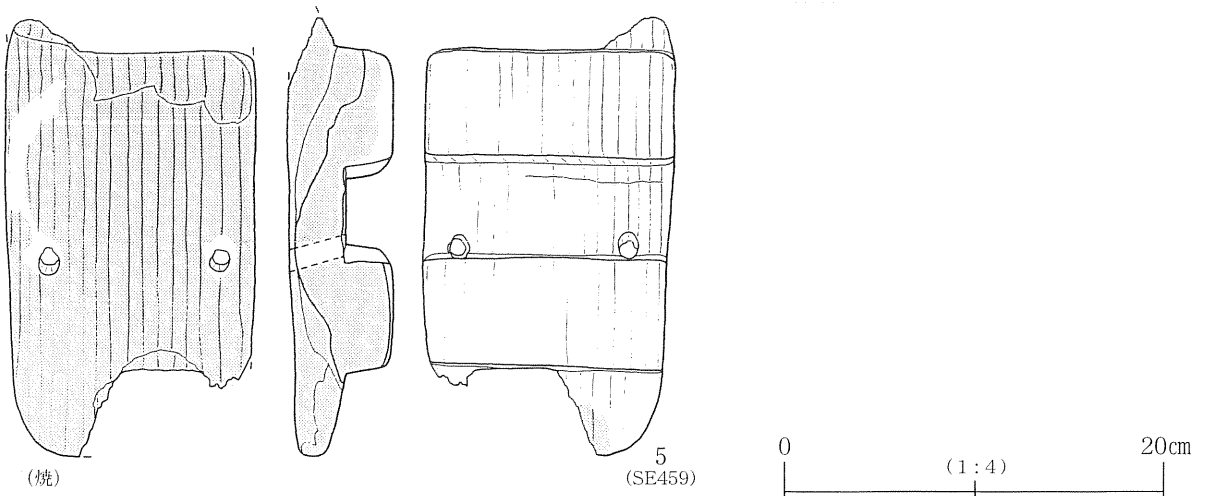
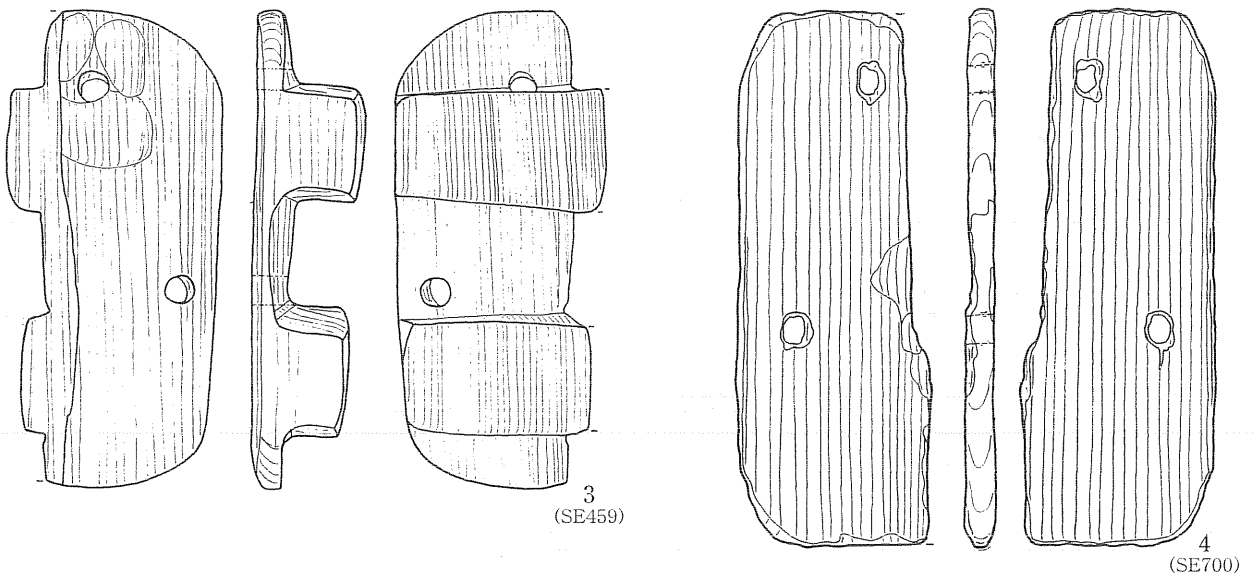
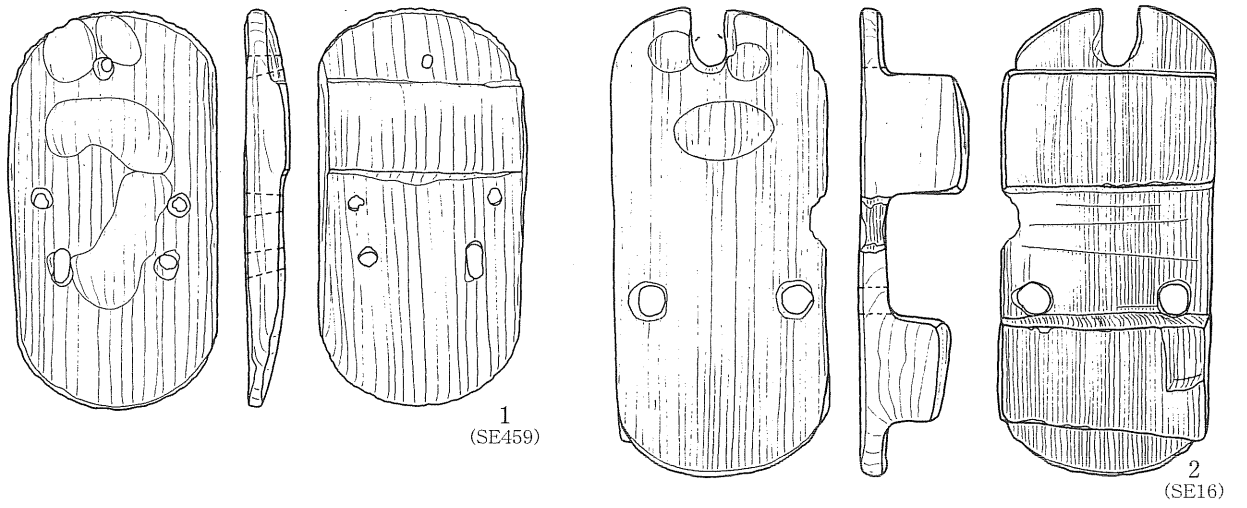


0 (1:4) 20cm

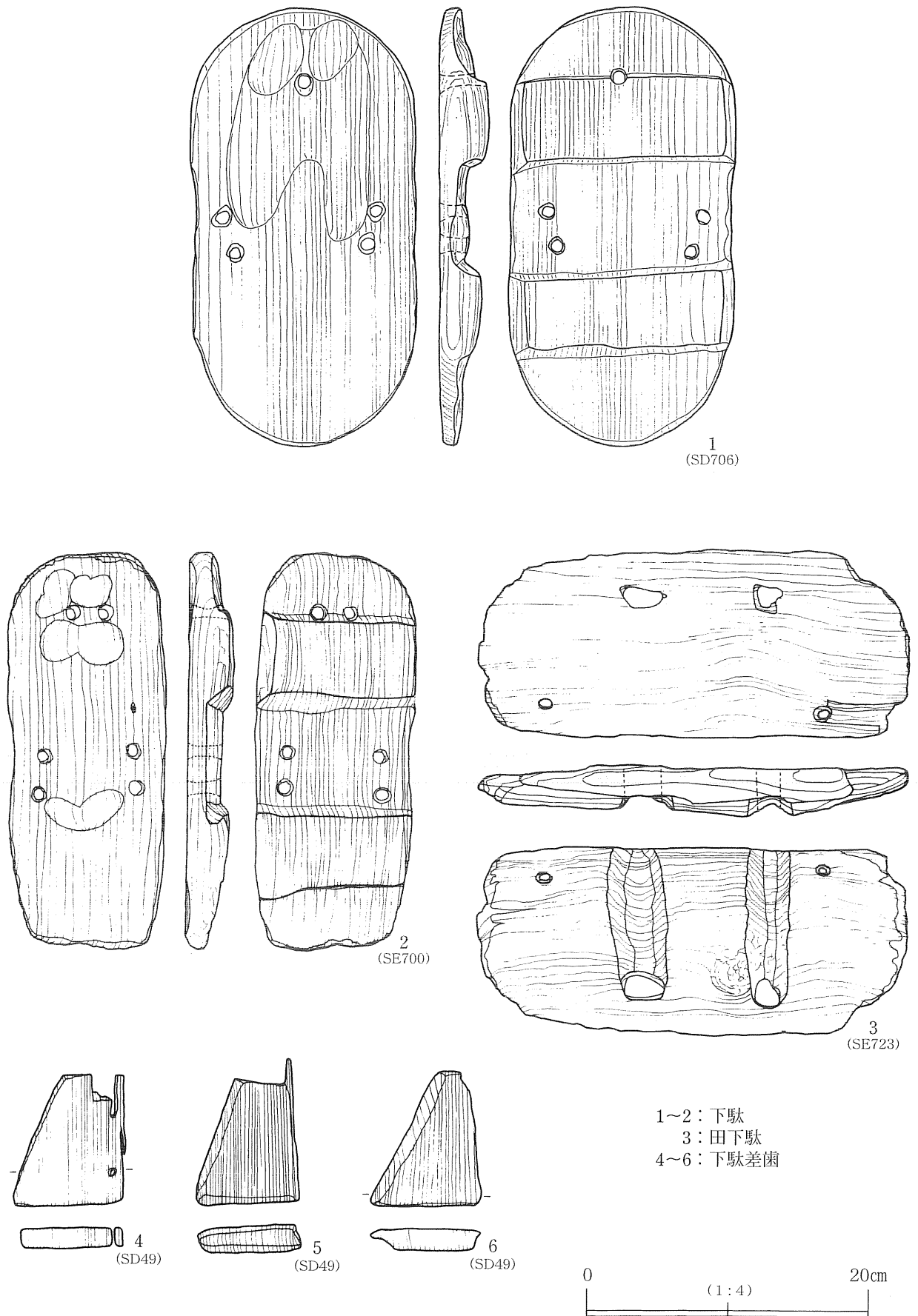
第300図 出土遺物 (50) 木製品：履物 (3) 下駄 (3)



第301図 出土遺物 (51) 木製品：履物 (4) 下駄 (4)

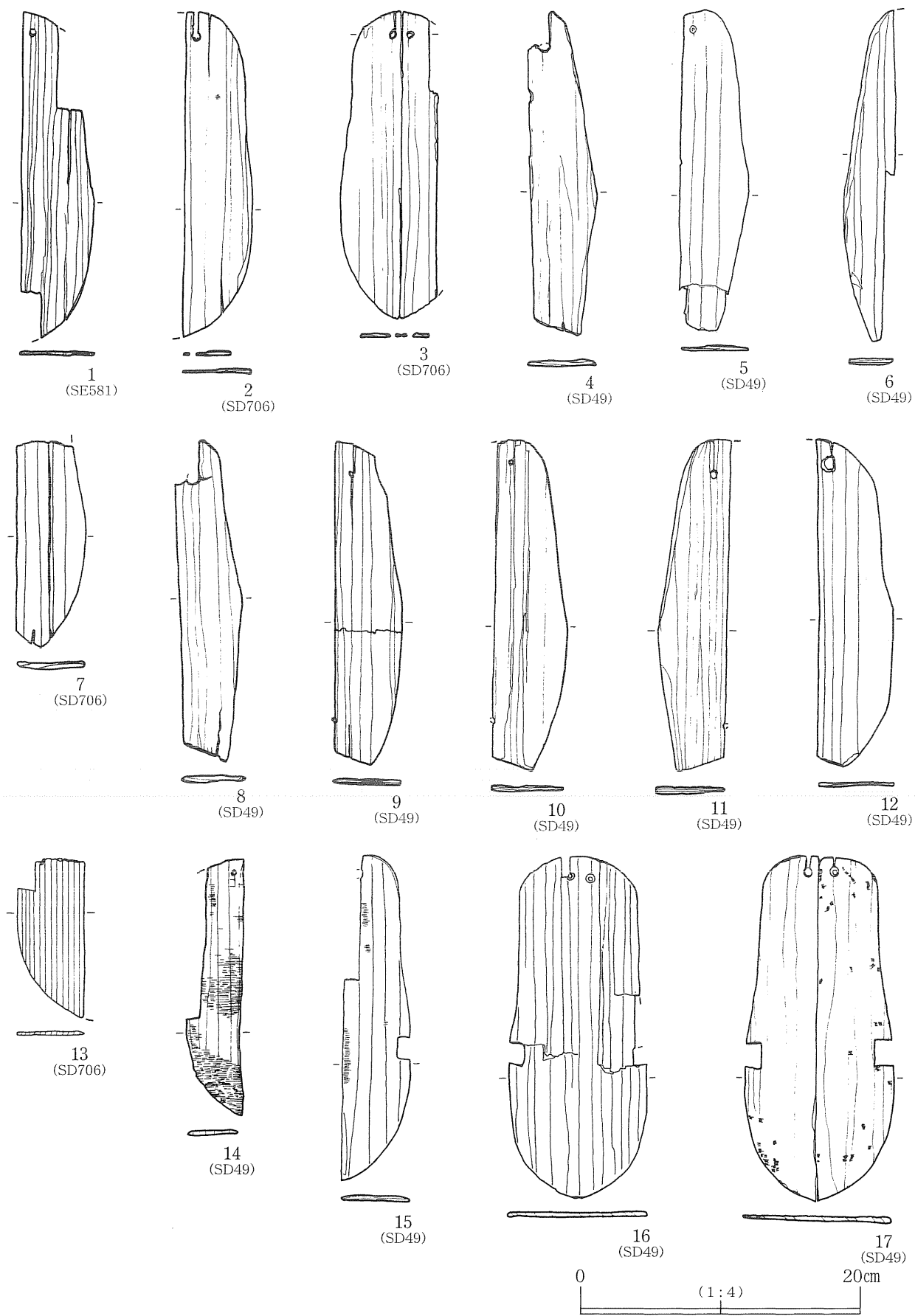


第302図 出土遺物 (52) 木製品：履物 (5) 下駄 (5)

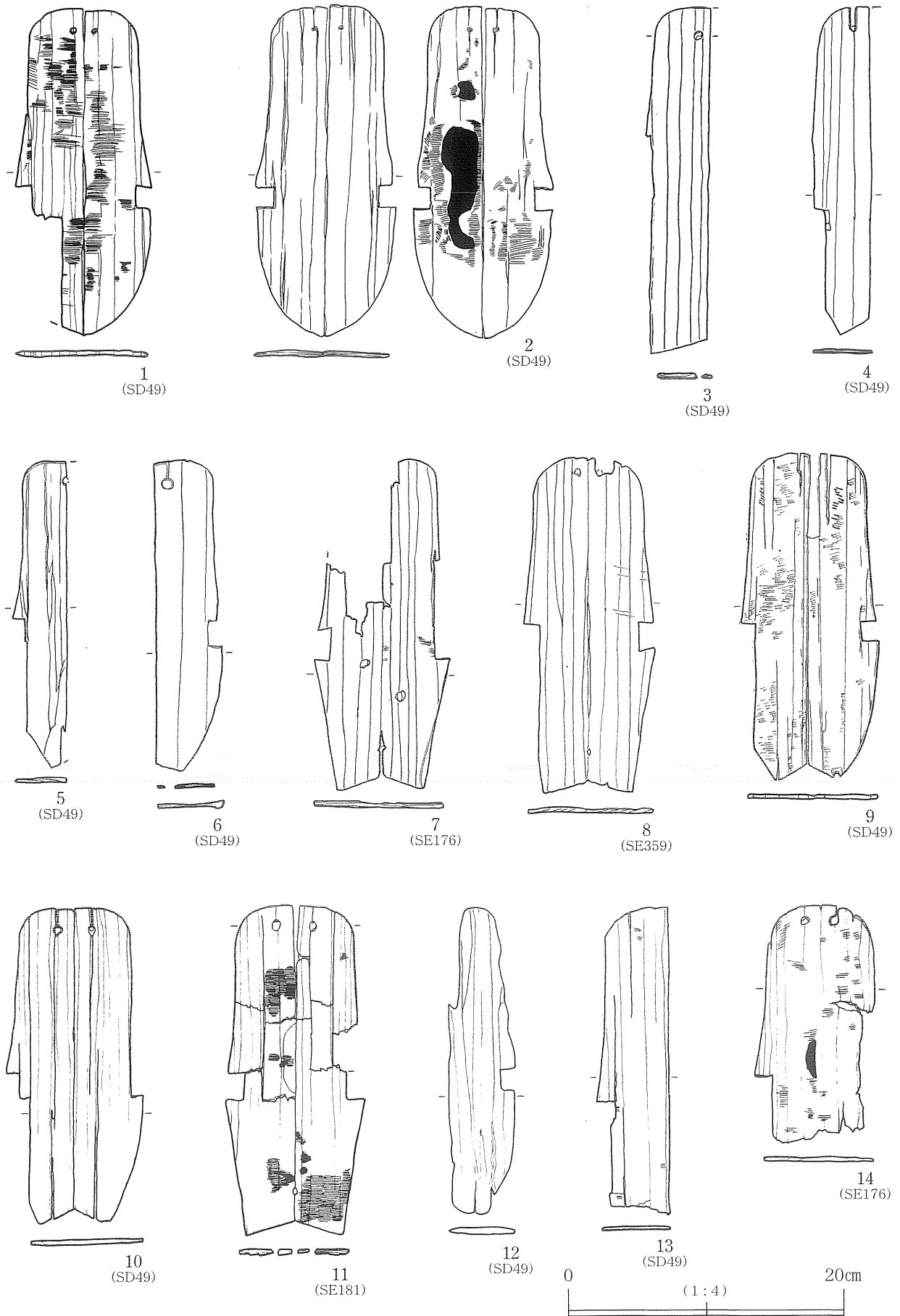


1~2: 下駄
3: 田下駄
4~6: 下駄差菌

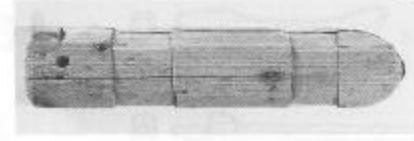
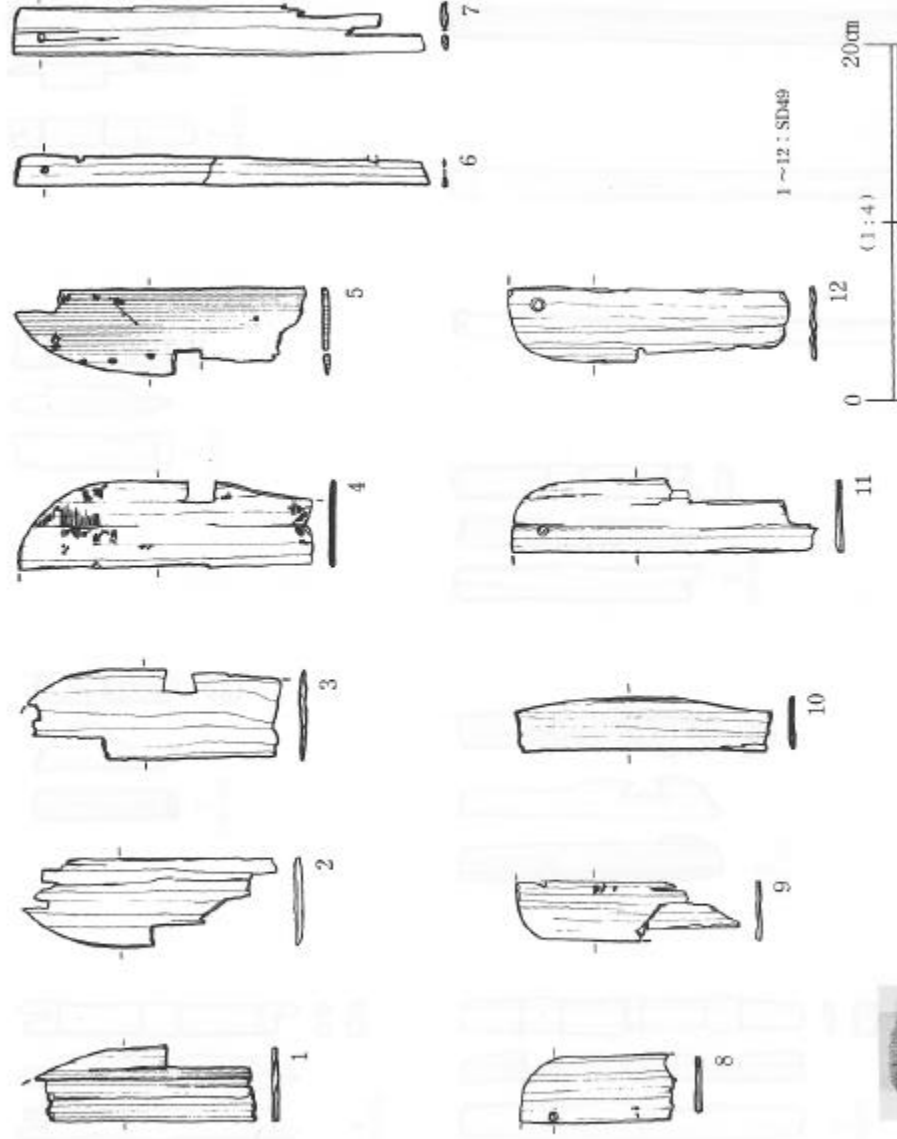
第303図 出土遺物 (53) 木製品：履物 (6) 下駄 (6)・田下駄・下駄差菌



第304図 出土遺物 (54) 木製品：履物 (7) 草履芯 (1)



第305図 出土遺物 (55) 木製品：履物 (8) 草履芯 (2)

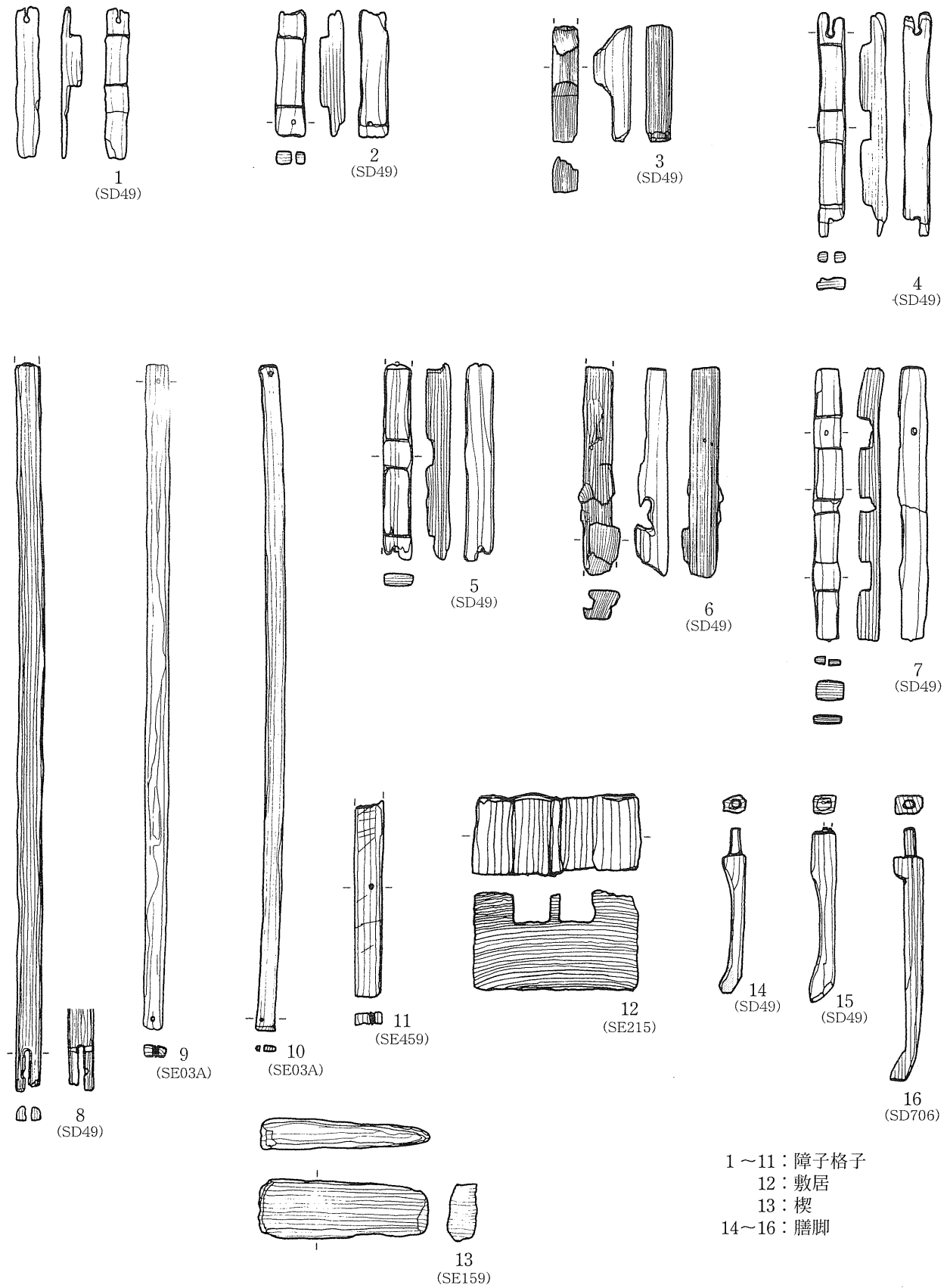


調査風景 (SE583)



第306図 出土遺物 (56) 木製品：履物 (9) 草履芯 (3)

第5節 中世・近世の出土遺物



1~11：障子格子
12：敷居
13：楔
14~16：膳脚

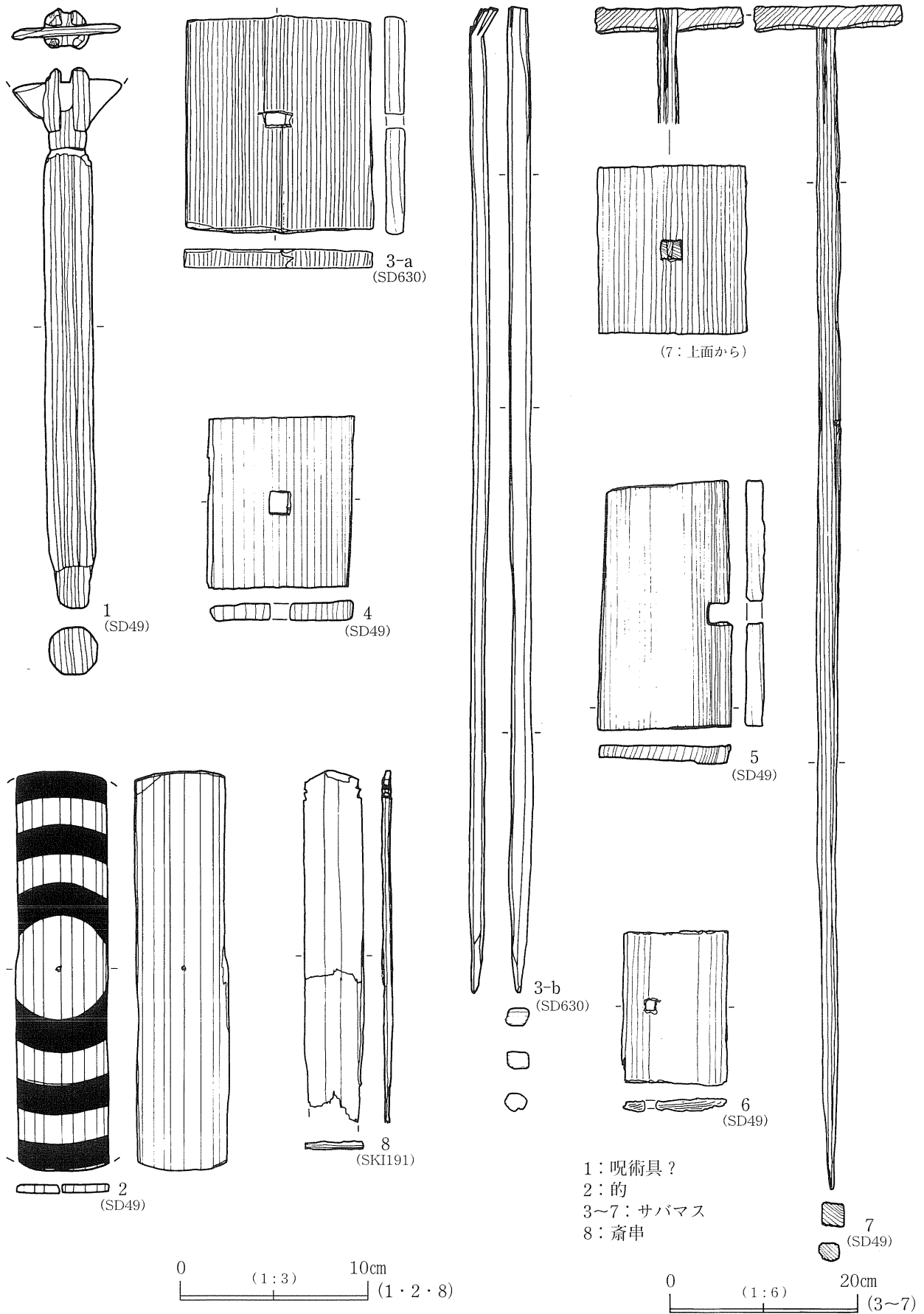
(13のみ) 0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 20cm

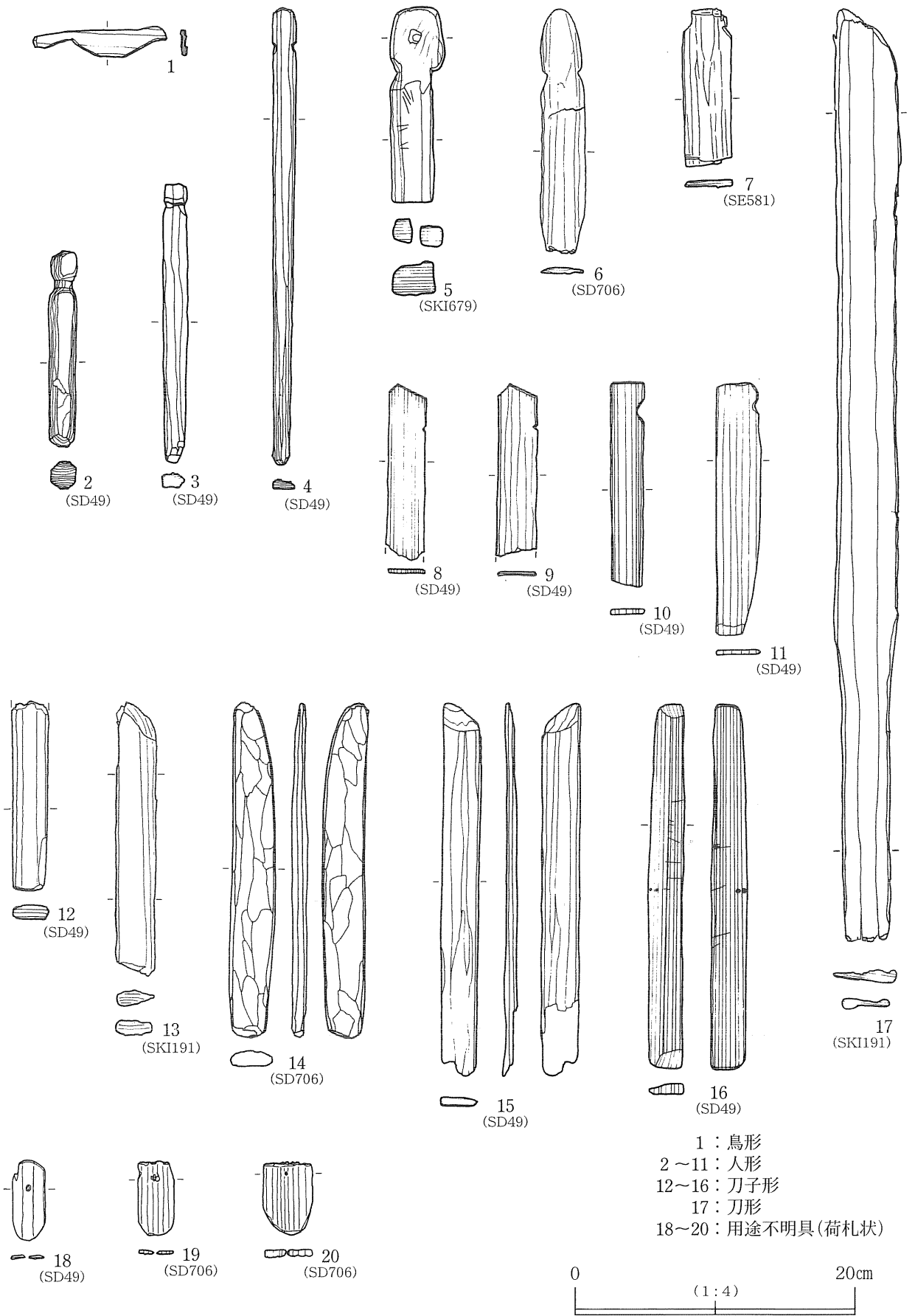
第307図 出土遺物 (57) 木製品：建具・調度具



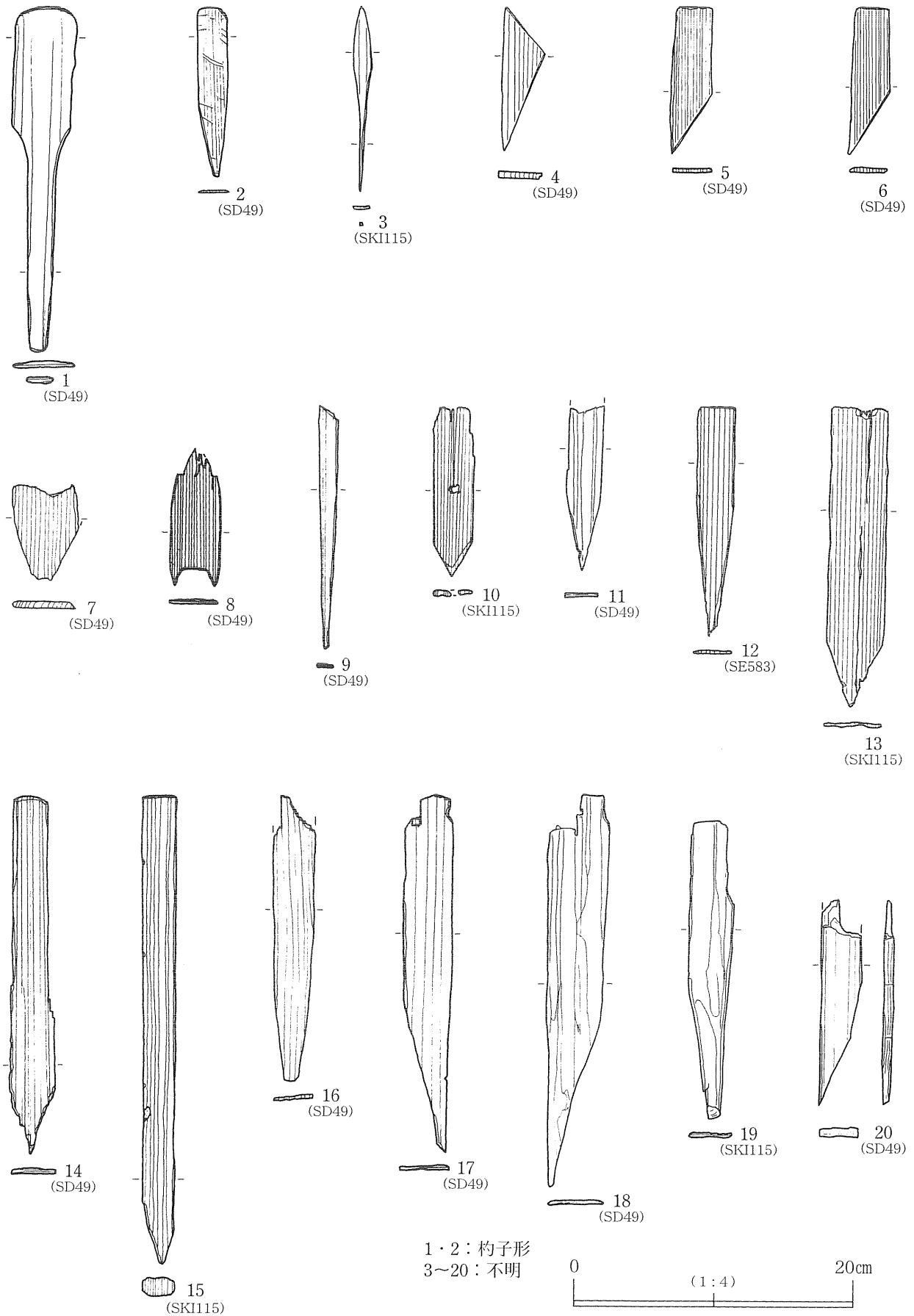
第308図 出土遺物 (58) 木製品：火処具、染・織具



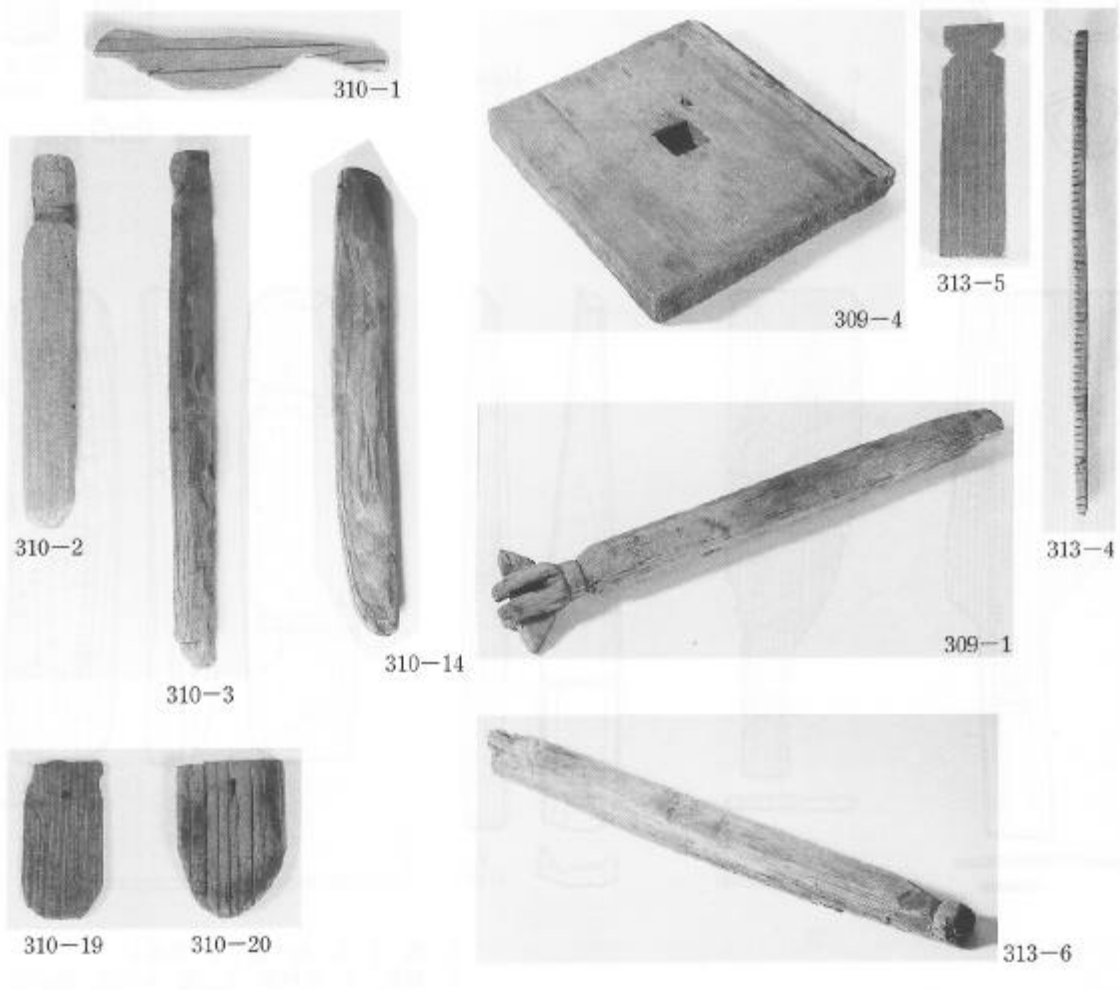
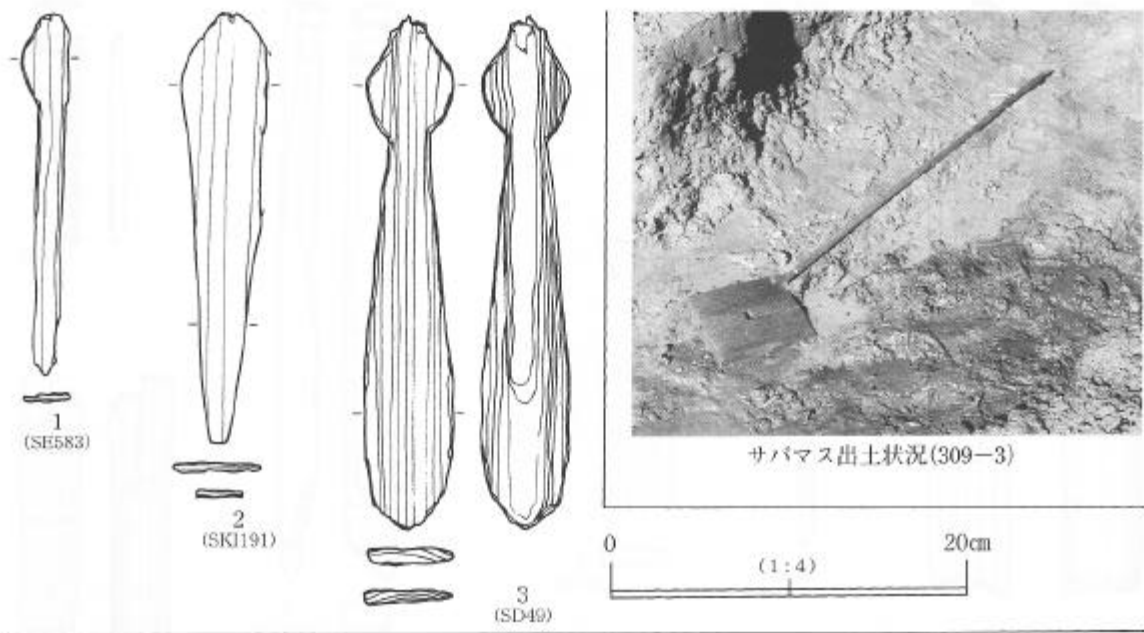
第309図 出土遺物 (59) 木製品：呪術具



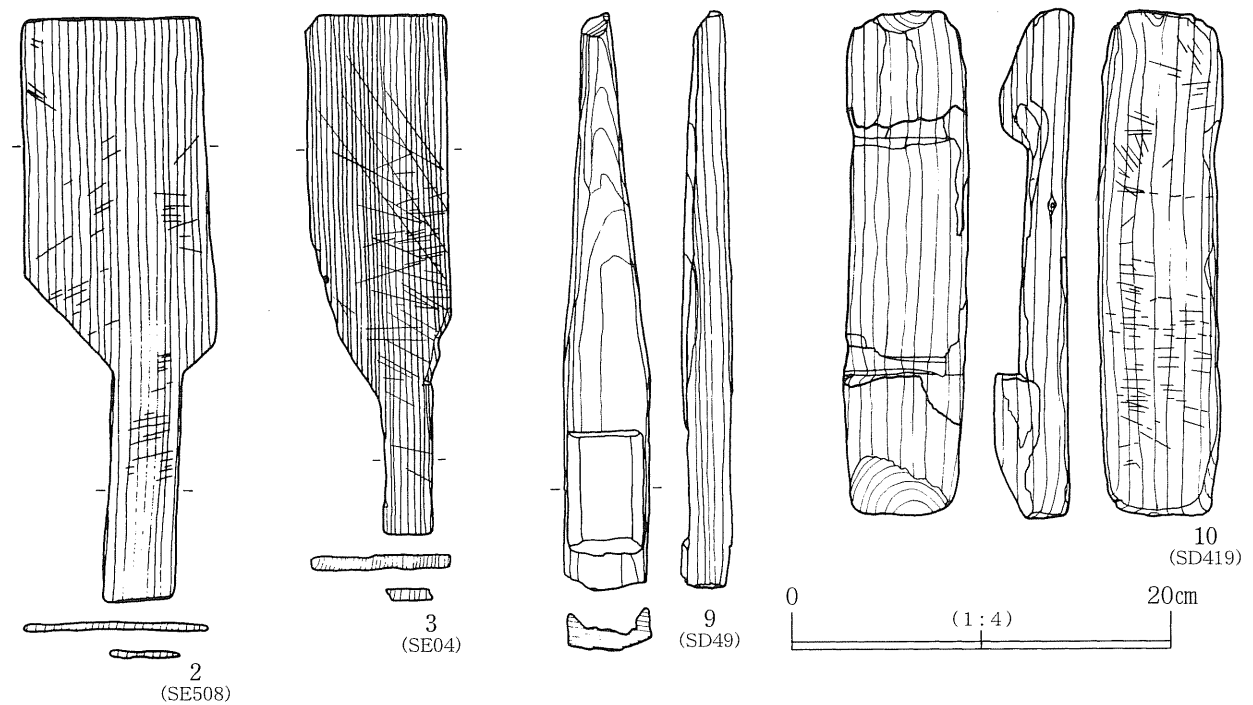
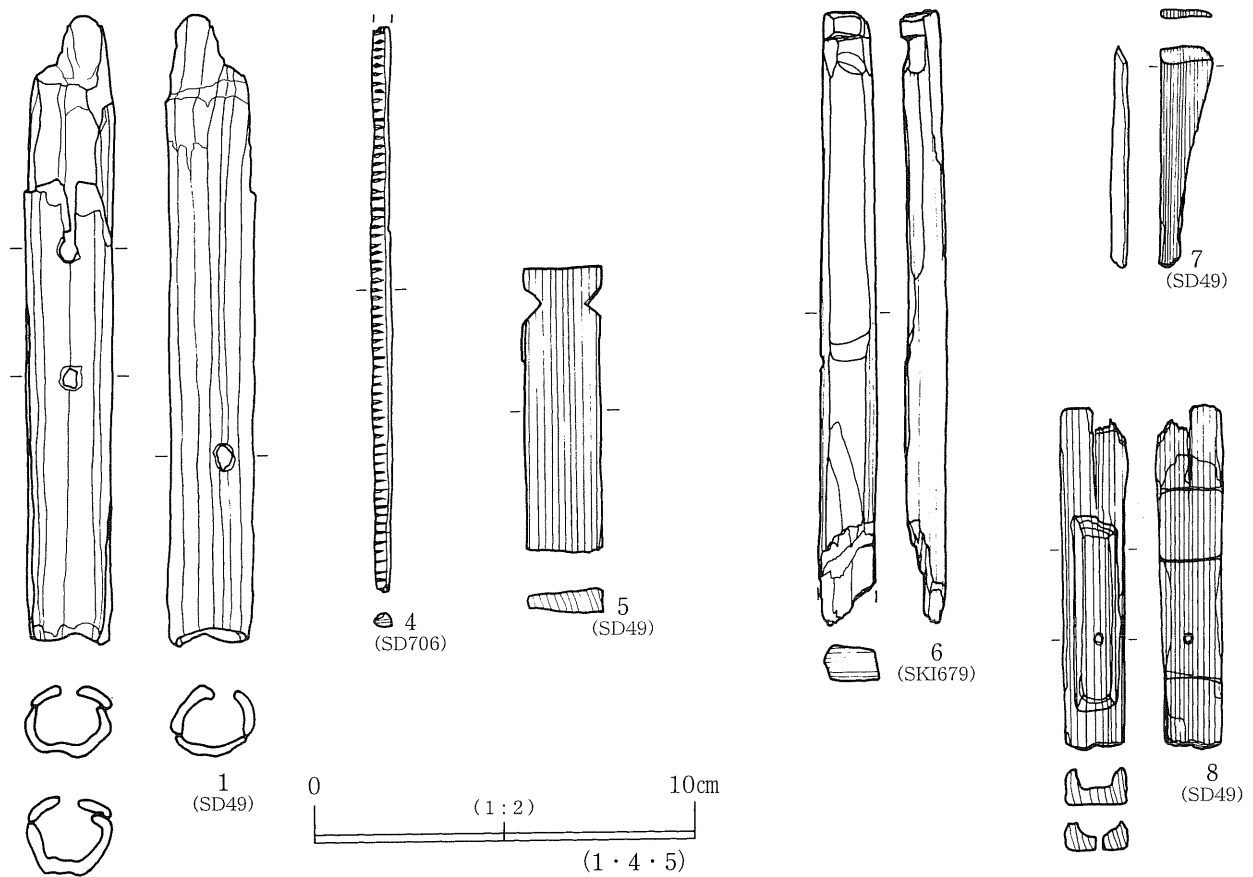
第310図 出土遺物 (60) 木製品：形代 (1)



第311図 出土遺物 (61) 木製品：形代 (2)

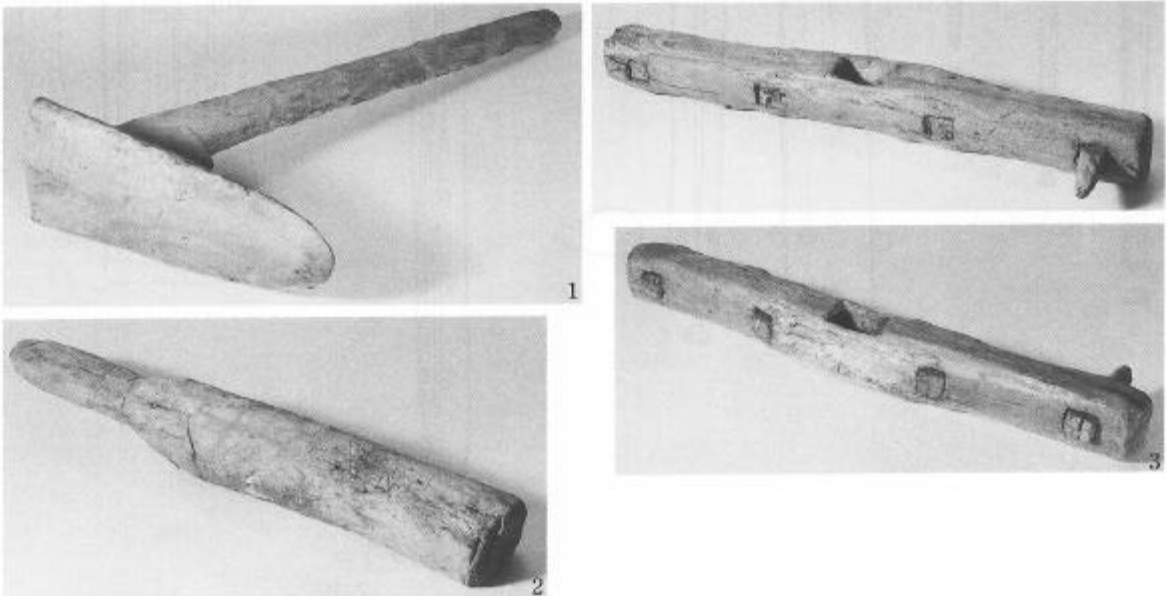
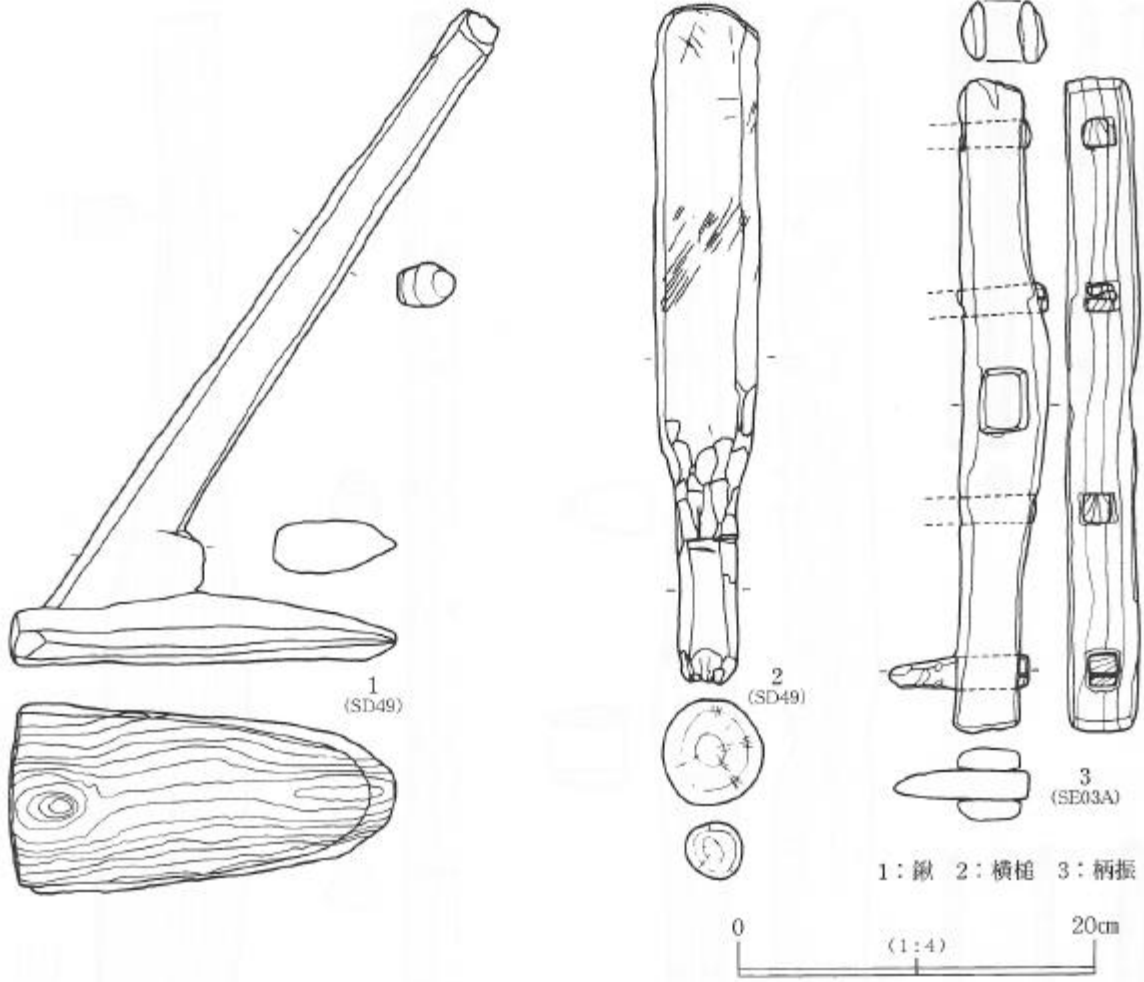


第312図 出土遺物 (62) 木製品：形代 (3)

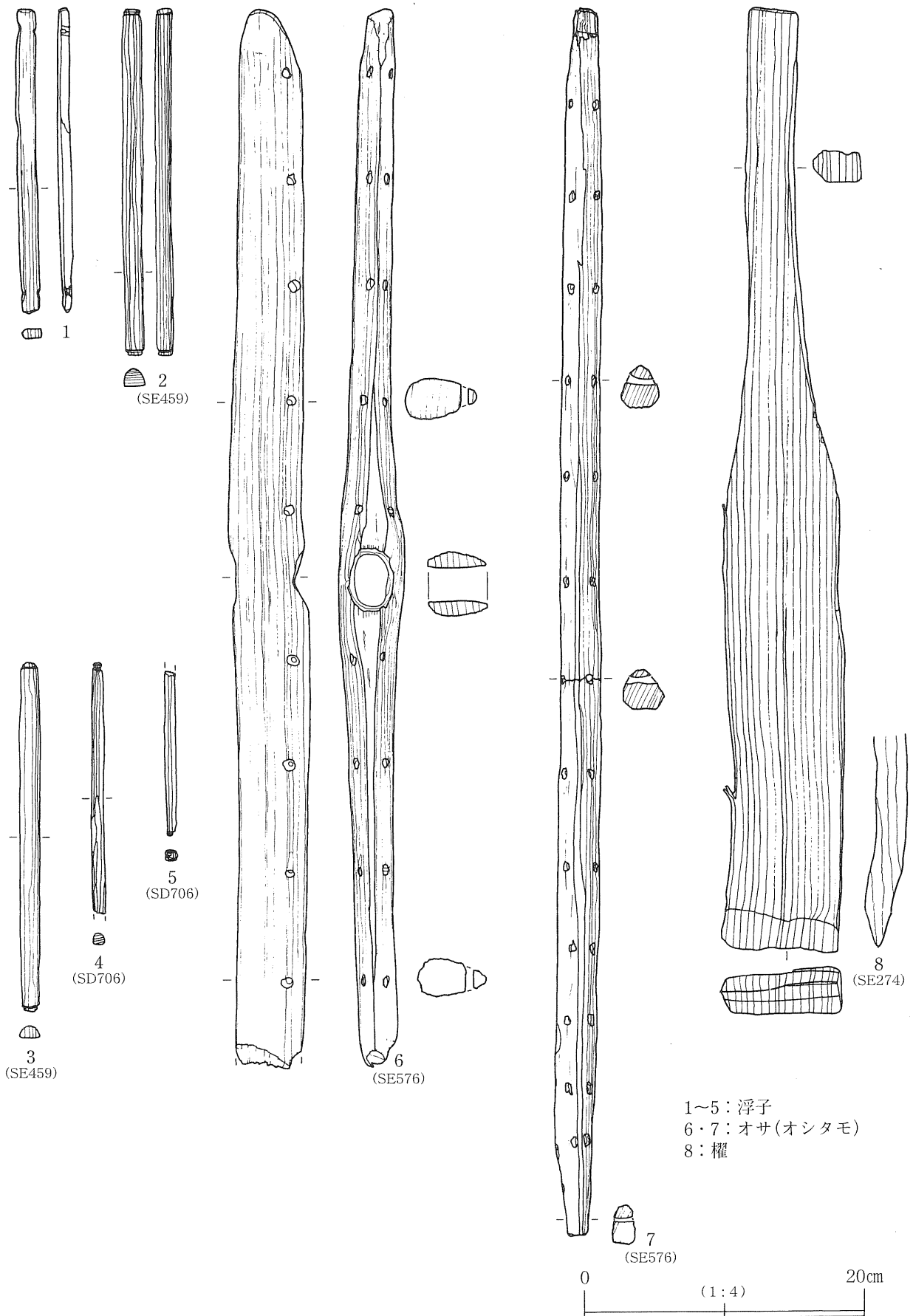


1: 笛 2・3: 羽子板 4: 物差し
5: 荷札 6: 天秤棒 7: 筥 8~10: 砥石台

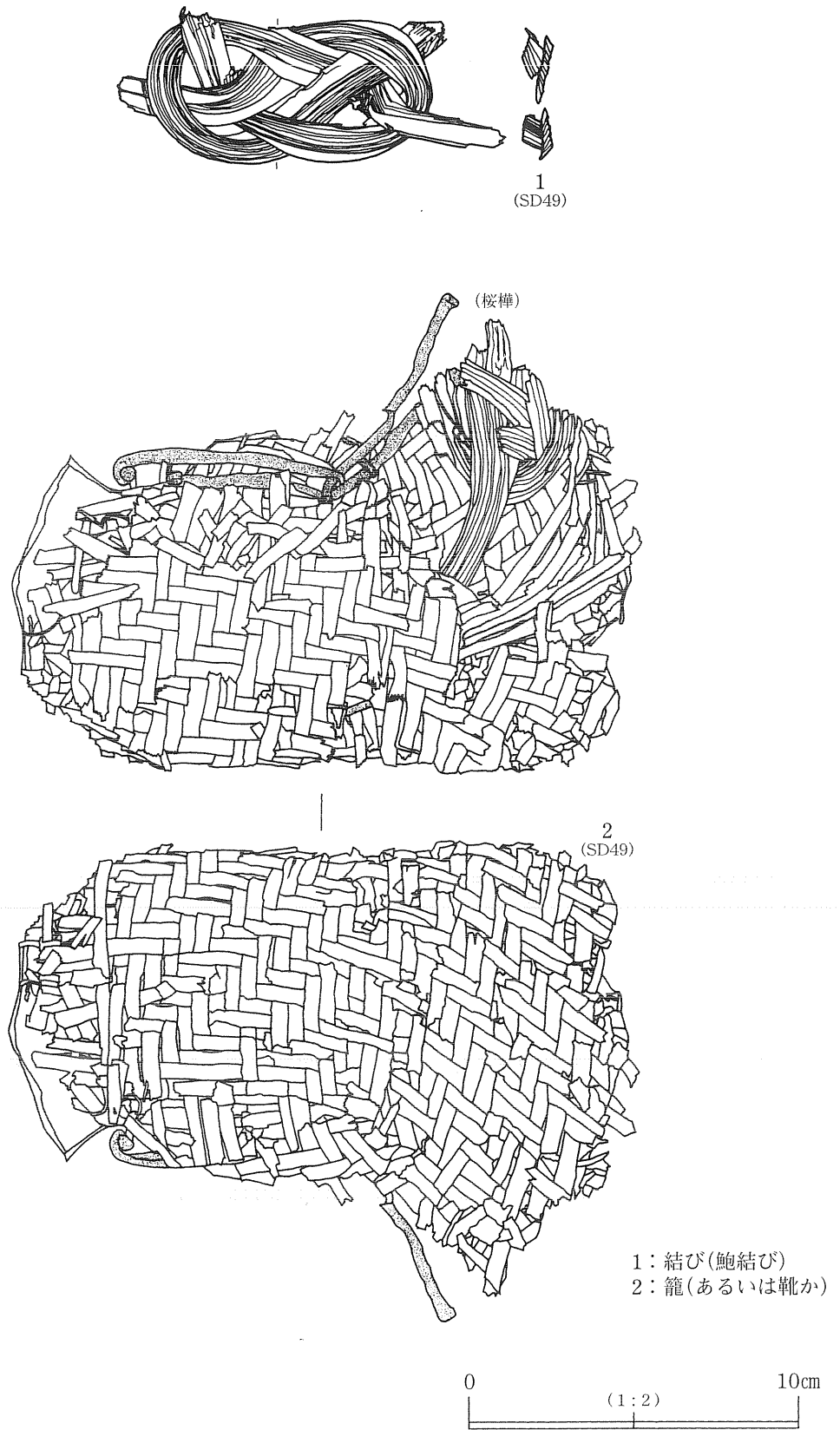
第313図 出土遺物 (63) 木製品: 遊戯具・計量具・運搬具・工具



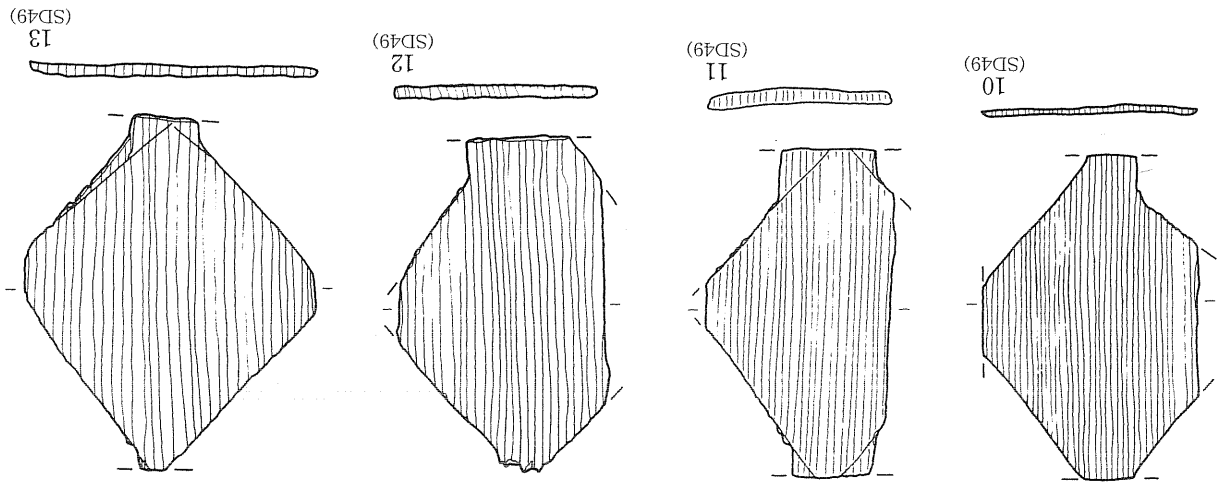
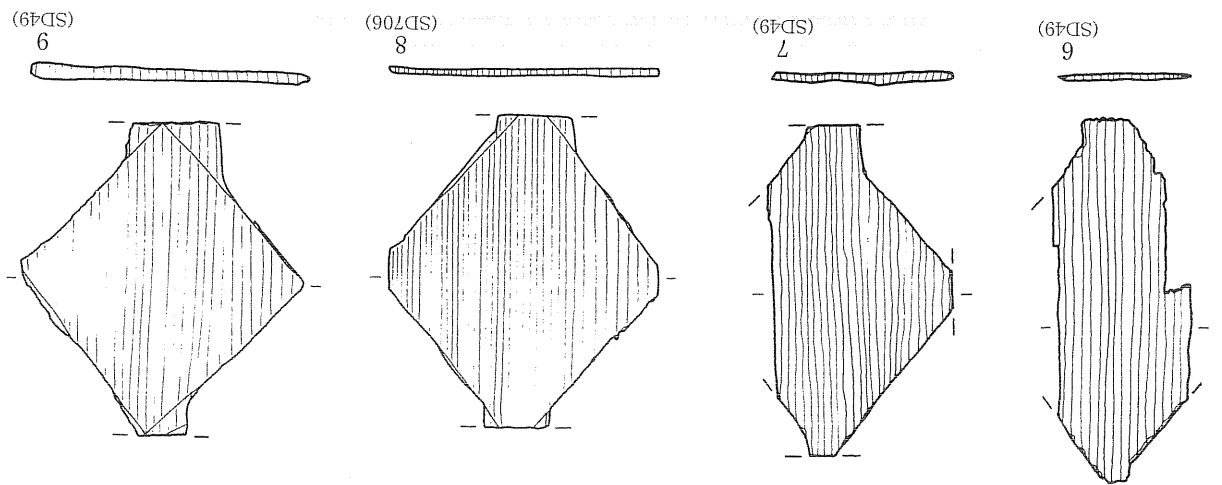
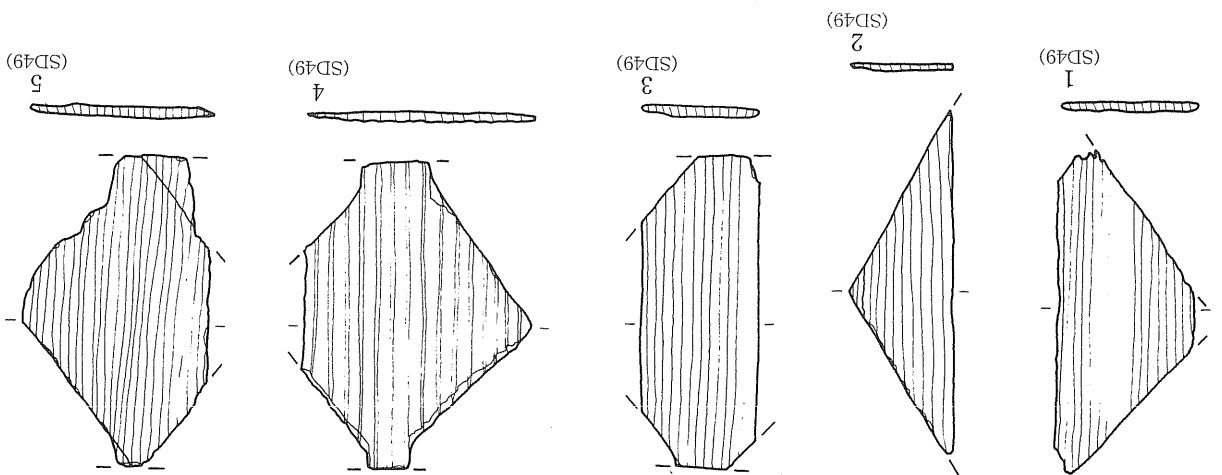
第314図 出土遺物 (64) 木製品：農具



第315図 出土遺物 (65) 木製品：漁具

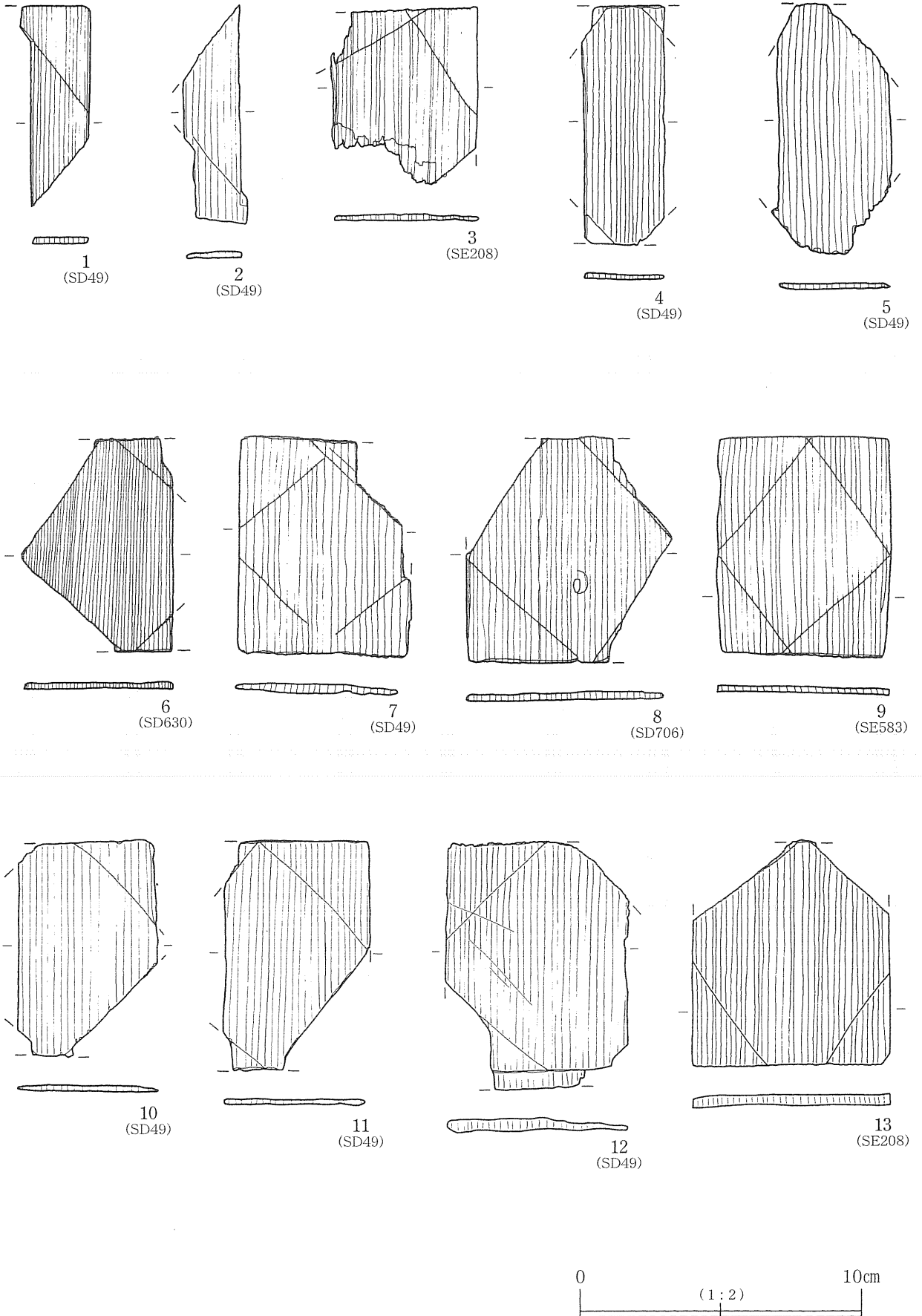


第316図 出土遺物 (66) 木製品：編物

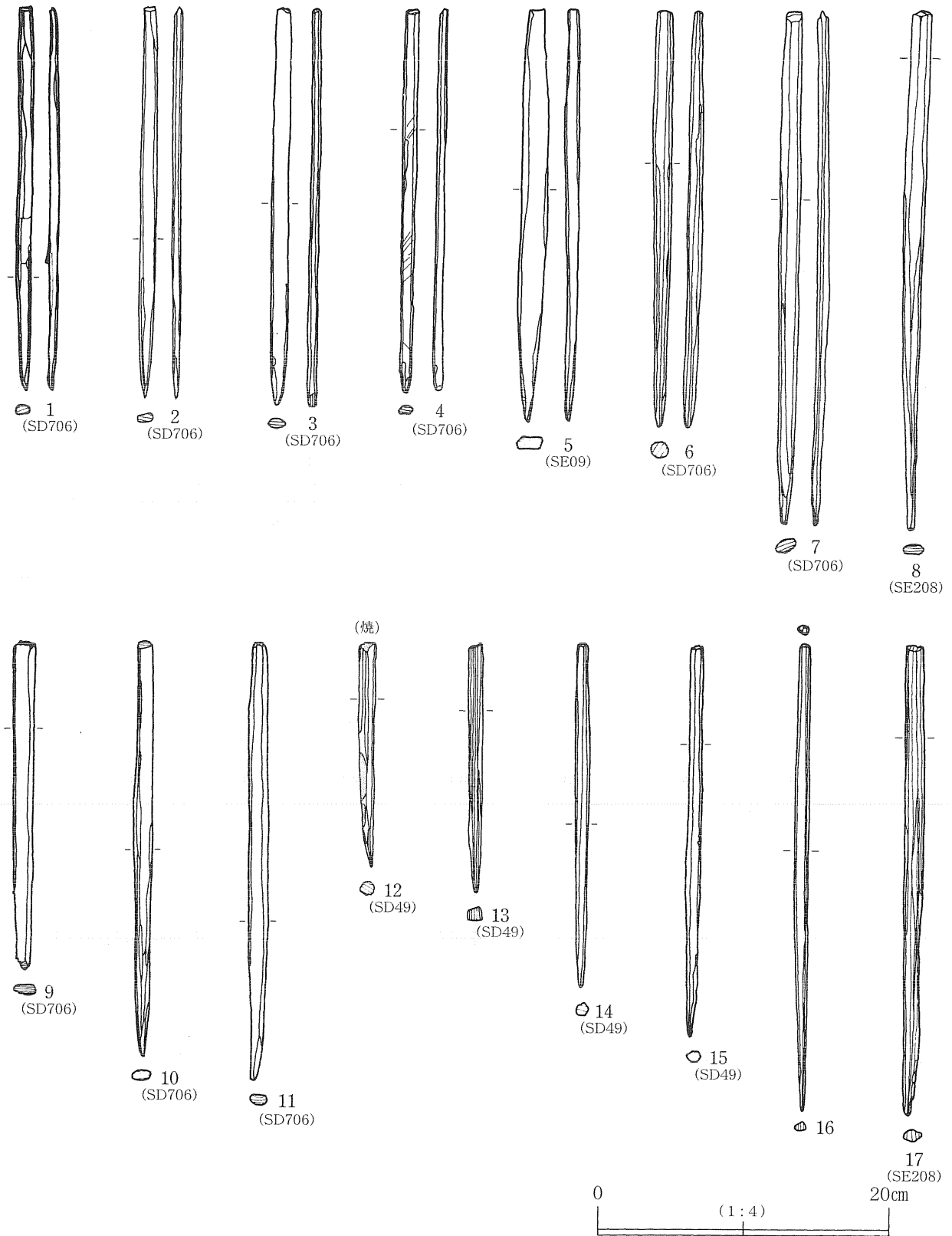


第317図 出土遺物 (67) 木製品：用途不明具 (1)

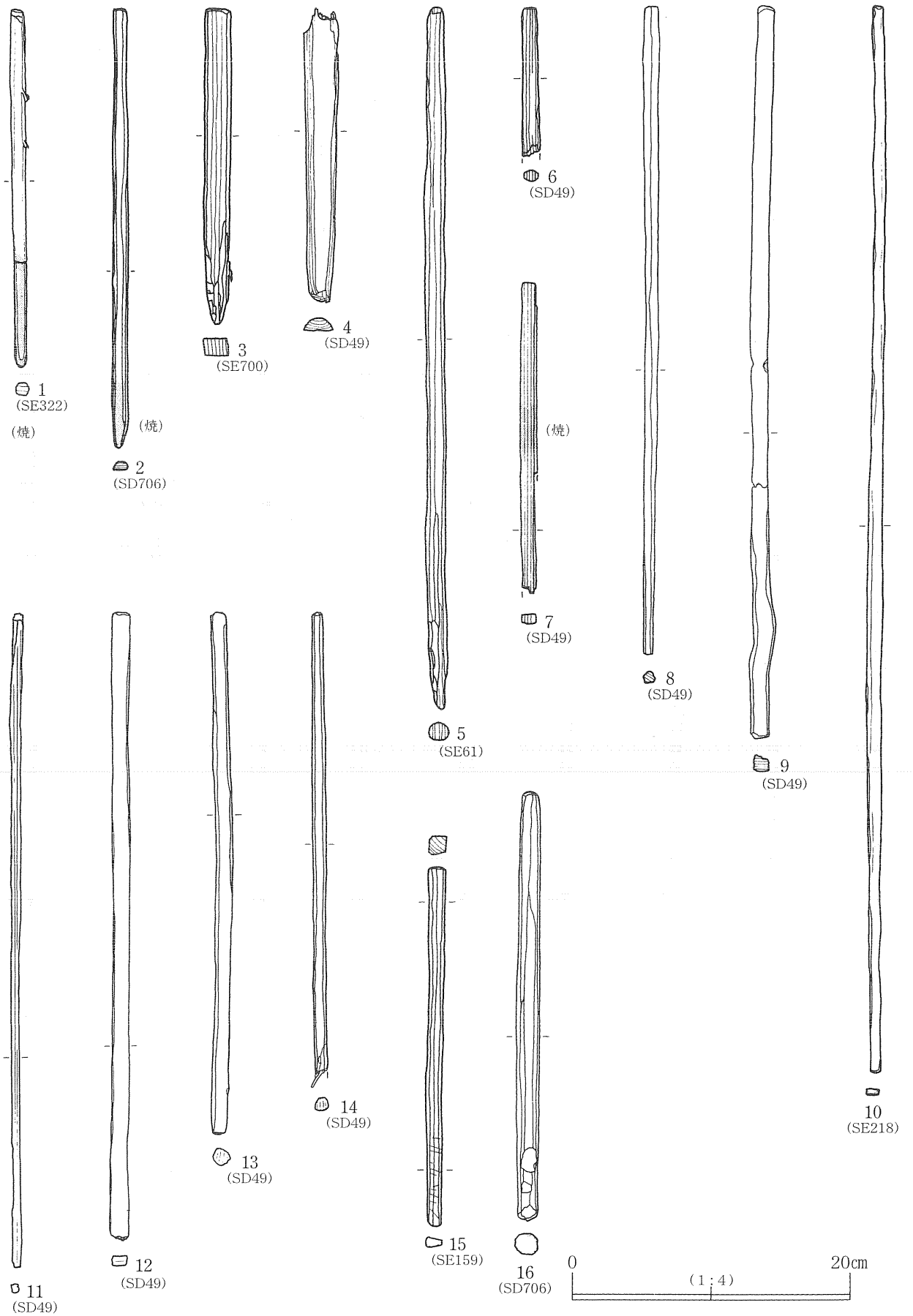
0 10cm
(1:2)



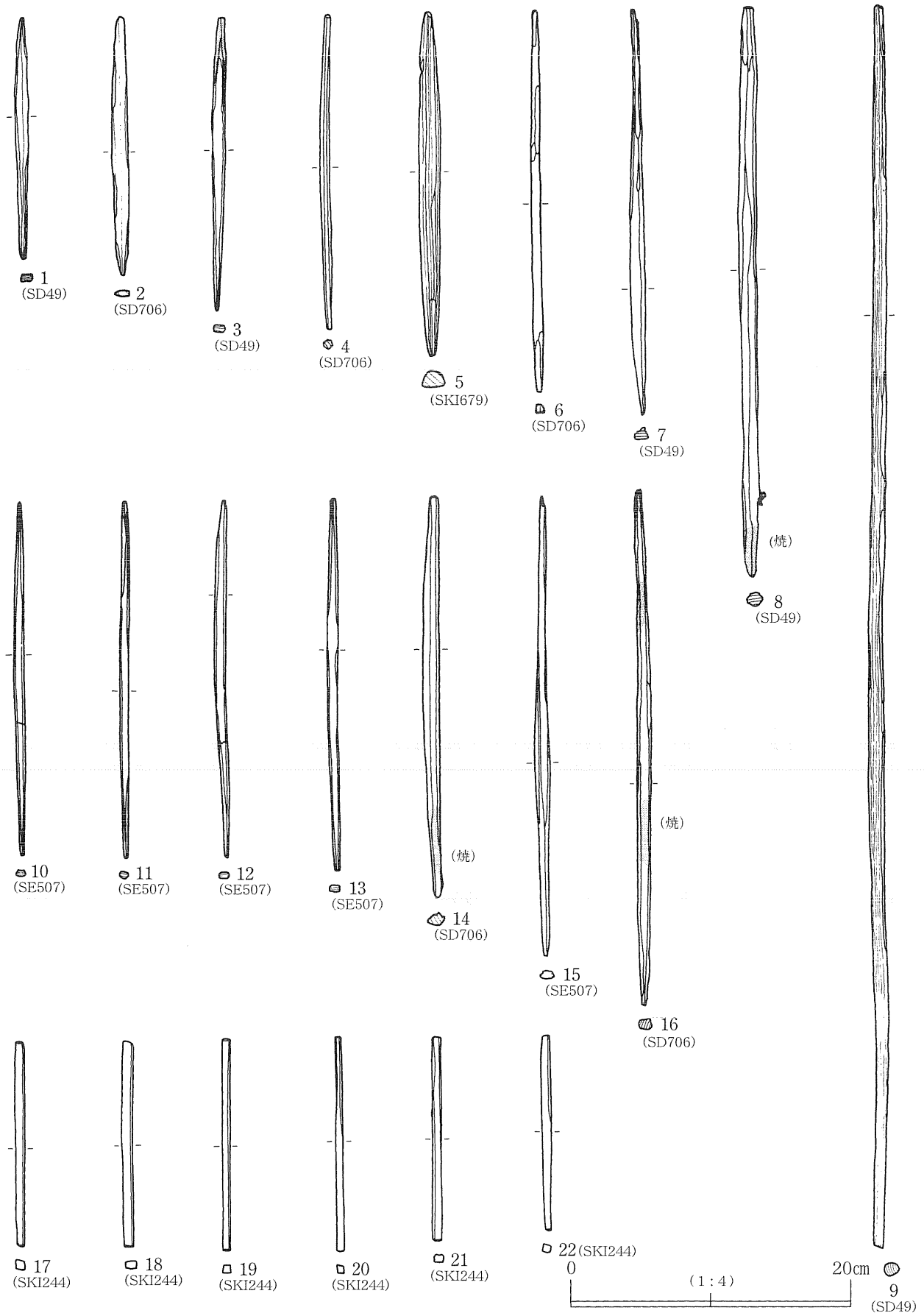
第318図 出土遺物 (68) 木製品：用途不明具 (2)



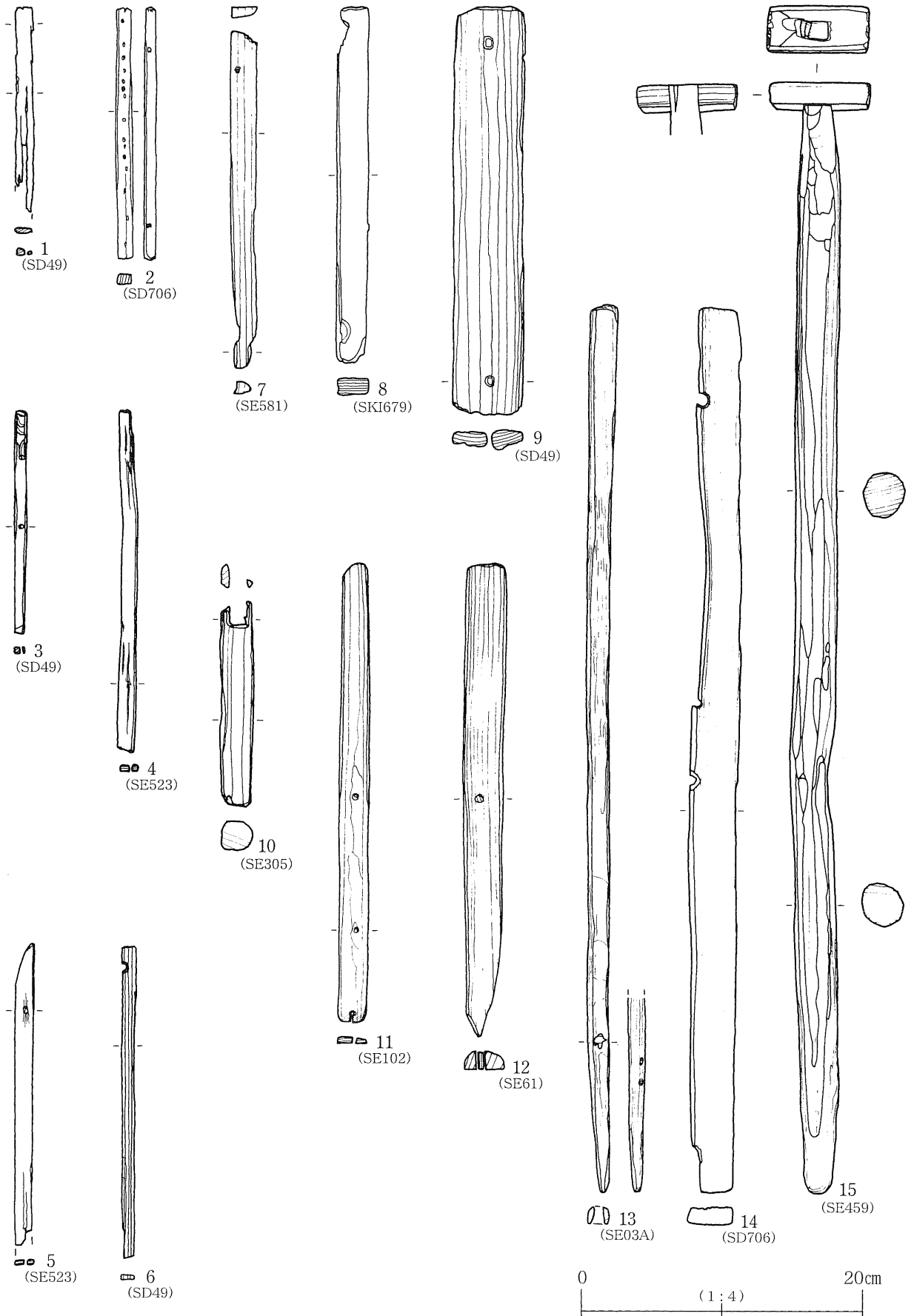
第319図 出土遺物 (69) 木製品：用途不明具 (3) 棒状



第320図 出土遺物(70) 木製品：用途不明具(4) 棒状

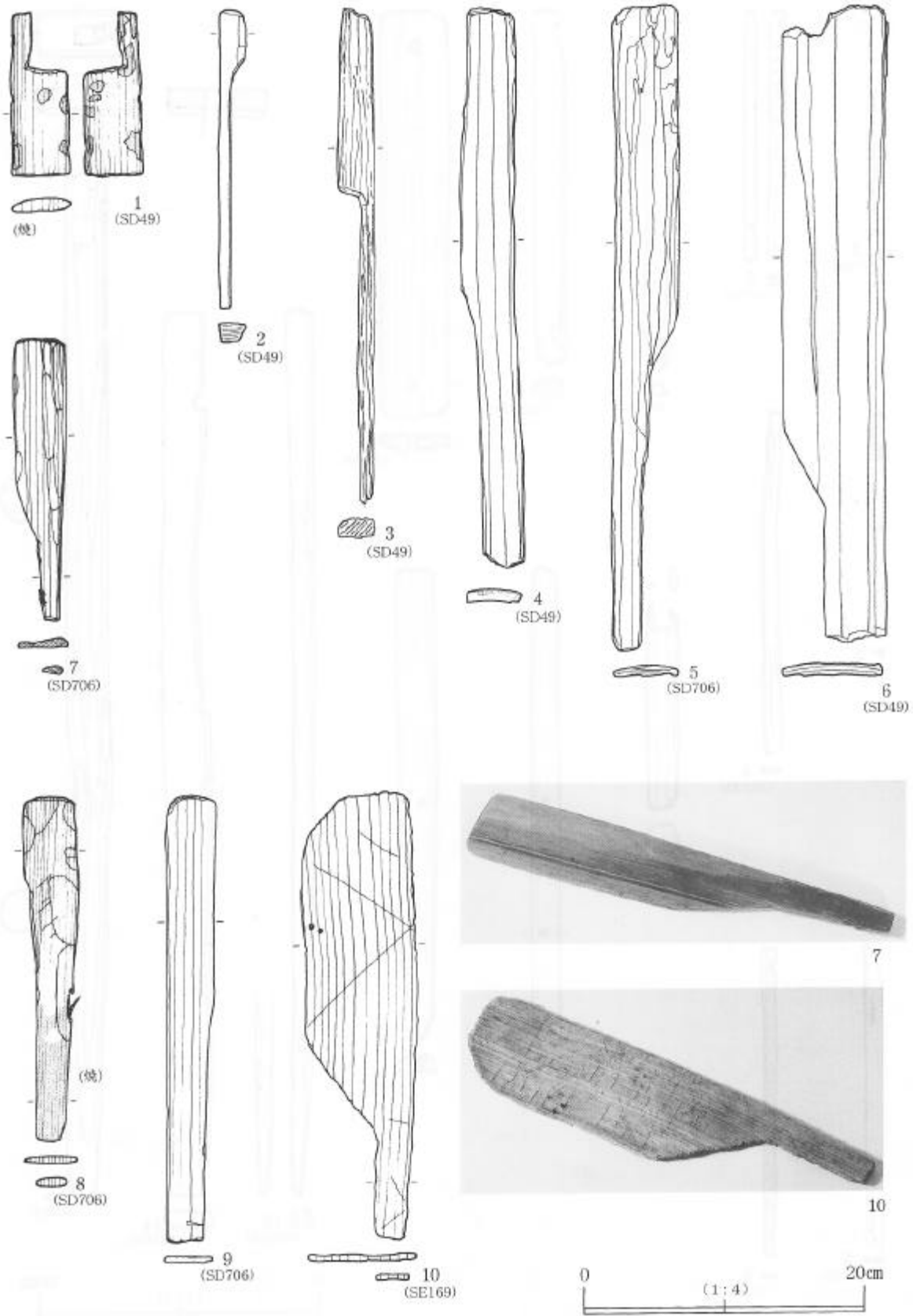


第321図 出土遺物 (71) 木製品：用途不明具 (5) 棒状

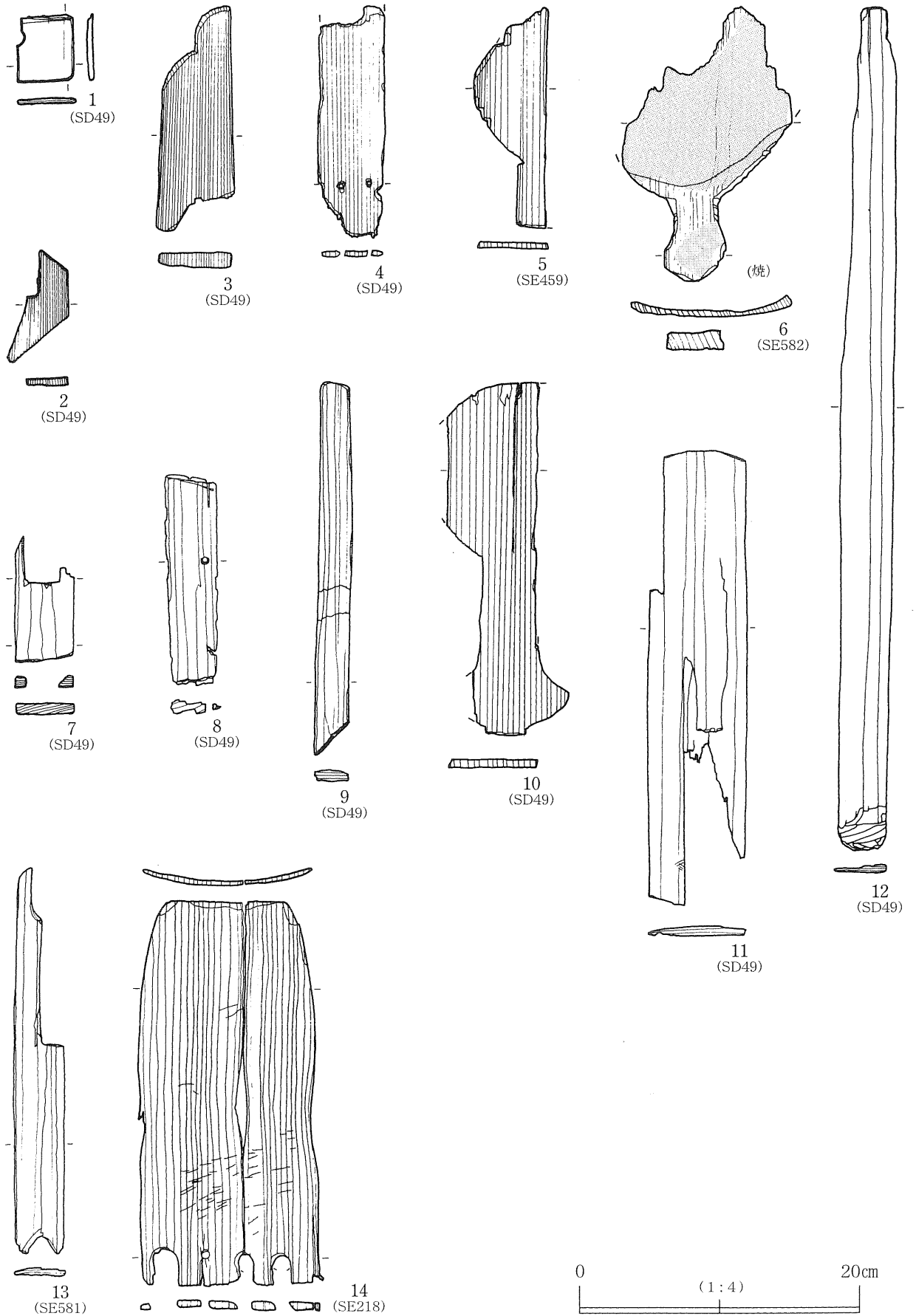


第322図 出土遺物 (72) 木製品：用途不明具 (6) 棒状

第5節 中世・近世の出土遺物

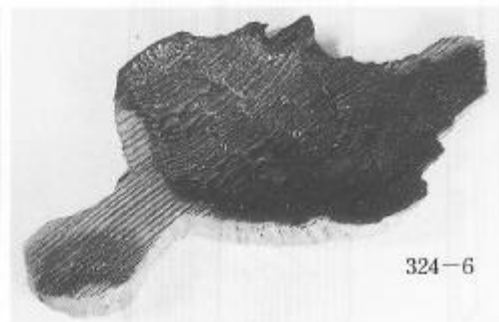
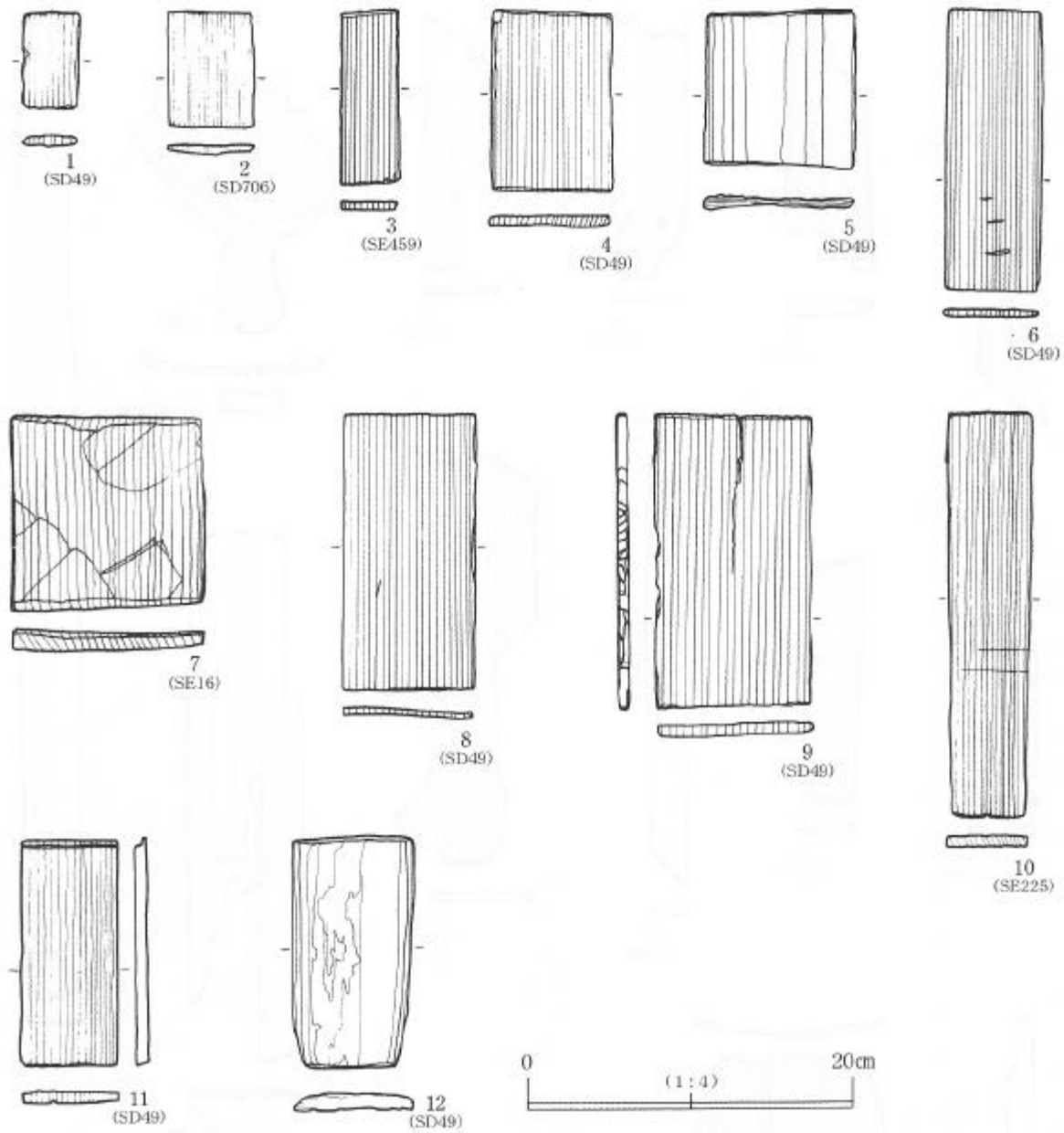


第323図 出土遺物 (73) 木製品：用途不明具 (7) 板状 (片刃状)

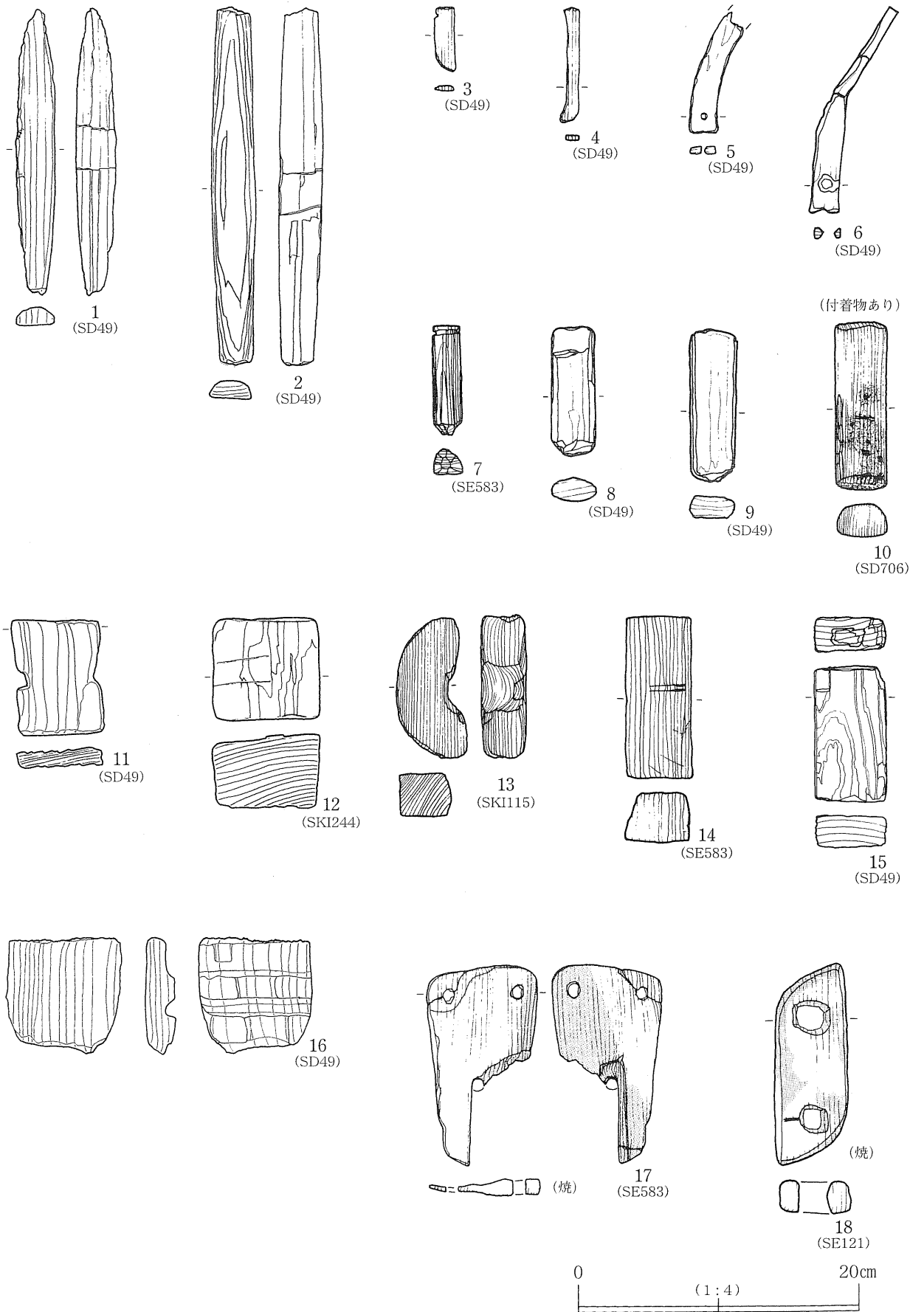


第324図 出土遺物 (74) 木製品：用途不明具 (8) 板状

第5節 中世・近世の出土遺物

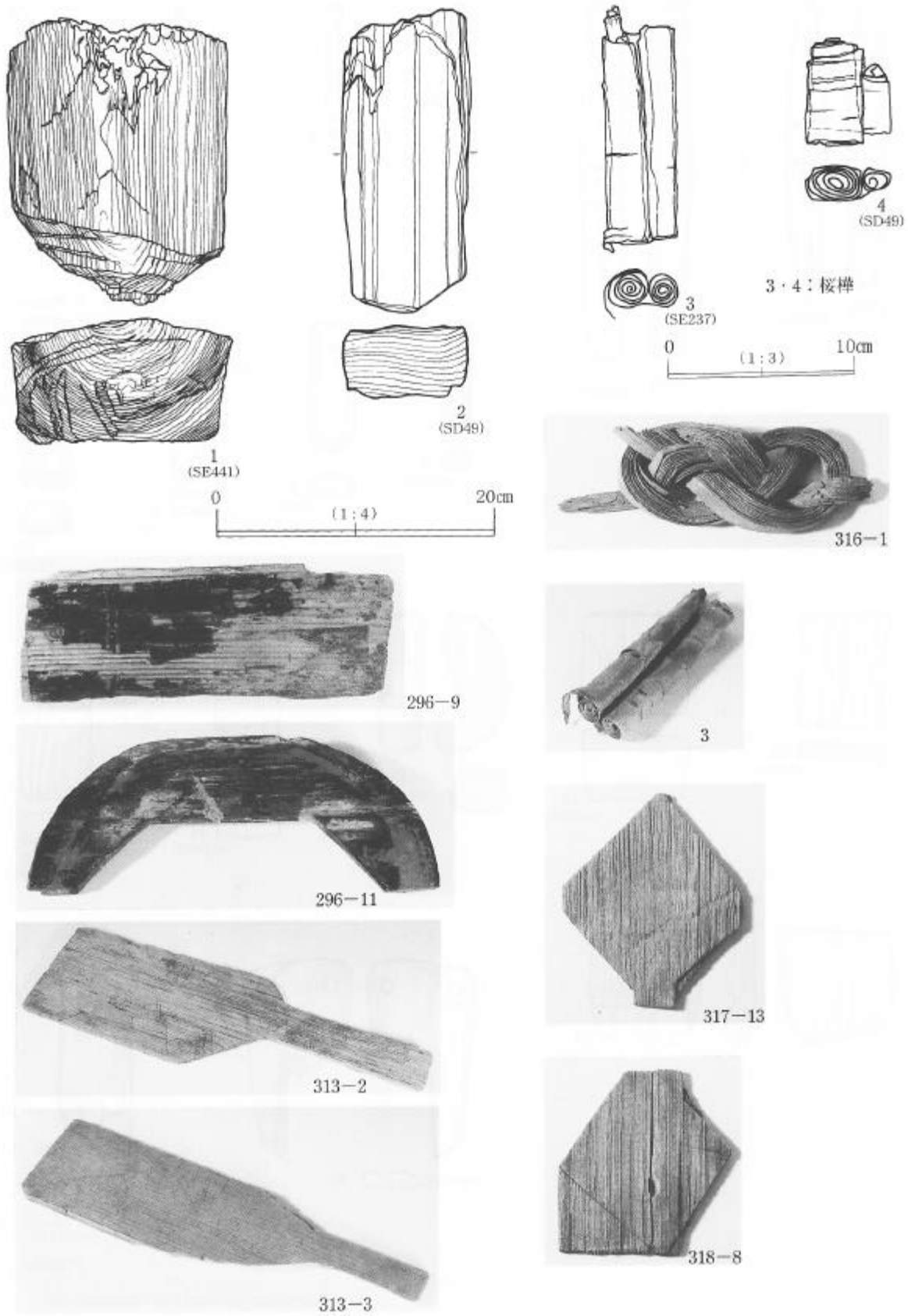


第325図 出土遺物 (75) 木製品：用途不明具 (9) 板状



第326図 出土遺物 (76) 木製品：用途不明具 (10)

第5節 中世・近世の出土遺物



第327図 出土遺物 (77) 木製品：用途不明具 (11)



274-1



275-2



277-1



276-4



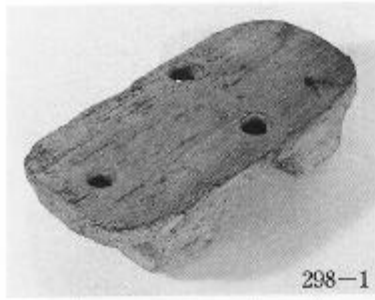
280-3



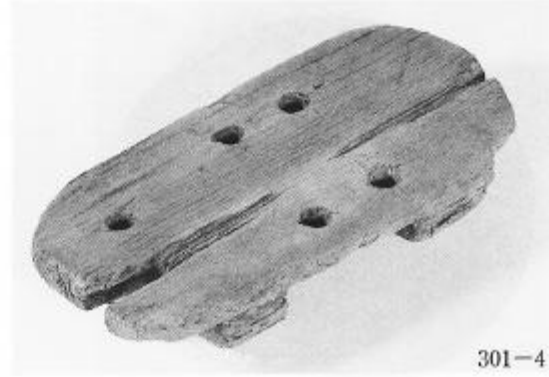
275-7

第328図 出土遺物 (78) 木製品：漆塗り碗写真

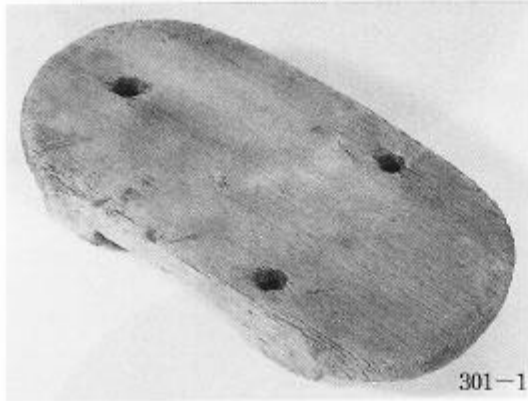
第5節 中世・近世の出土遺物



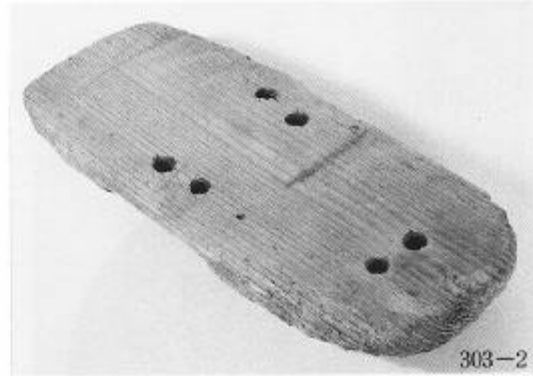
298-1



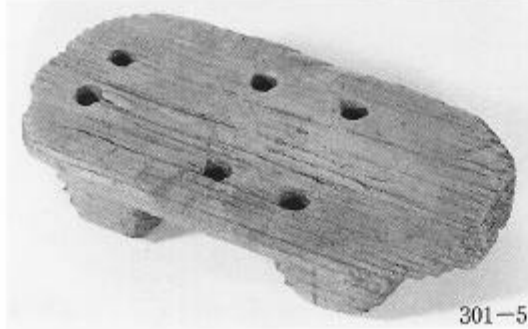
301-4



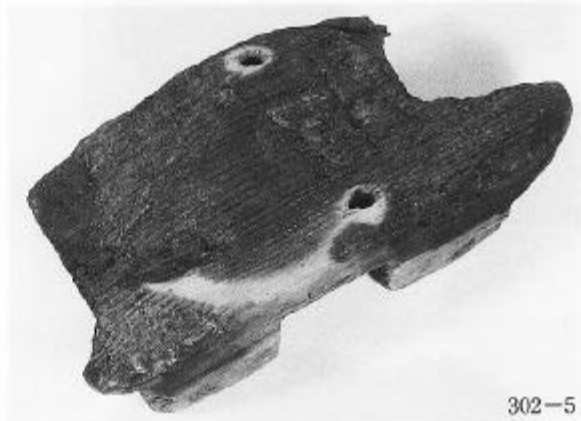
301-1



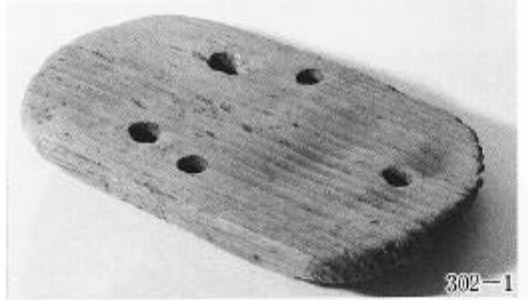
303-2



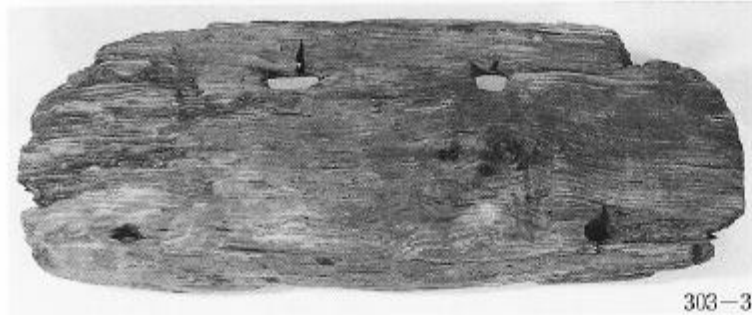
301-5



302-5



302-1



303-3

第329図 出土遺物(79) 木製品：下駄写真

第10表 出土木製品属性表

挿図番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
273	1	木筒等	木筒	SD49	長18.5幅3.0厚0.5
	2	木筒等	木筒	SD49	長18.5幅2.9厚0.3
	3	木筒等	木筒	SD49	長19.8幅2.3厚0.3
	4	木筒等	木筒	SE150	長18.8幅2.4厚0.3
	5	木筒等	木筒	SKI115	長14.9幅2.9厚0.4
	6	木筒等	木筒	SE150	長9.2幅3.5厚0.4
	7	木筒等	木筒	SKI115	長12.2幅2.2厚0.2
	8	木筒等	木筒	SD49	長15.6幅2.7厚0.6
	9	木筒等	木筒	SE216	長19.9幅2.9厚0.3
	10	木筒等	木筒	SKI115	長10.3幅2.6厚0.4
	11	木筒等	木筒	SD49	長11.4幅3.7厚0.2
25	木筒等	人魚供養札	SE587	長80.6幅14.5厚0.5	
73	木筒等	墨書板	SE205	長77.3幅9.4厚0.7	
274	1	飲食器	漆塗り皿	SD706	□8.4底6.2高1.3
	2	飲食器	漆塗り皿	SD49	□9.0底7.4高1.0
	3	飲食器	漆塗り皿	SE08	□8.8底6.8高1.0
	4	飲食器	漆塗り皿	SD49	□9.0底6.0高1.1
	5	飲食器	漆塗り皿	SD49	□9.4底6.5高1.4
	6	飲食器	漆塗り皿	SD49	□9.4底6.0高1.4
	7	飲食器	漆塗り皿	SD49	□9.0底6.2高1.7
	8	飲食器	漆塗り蓋	SE121	□11.4底6.4高2.2
	9	飲食器	漆塗り蓋	OA55	□13.4底5.3高2.0
	10	飲食器	漆塗り椀	SE208	□12.4底6.5高3.6
	11	飲食器	漆塗り椀	SE288	□12.7底6.4高5.2
	12	飲食器	漆塗り椀	SD706	□14.0底7.3高4.8
	13	飲食器	漆塗り椀	SD49	□14.6底7.0高4.3
275	1	飲食器	漆塗り椀	SE238	底7.0高(4.3)
	2	飲食器	漆塗り椀	SD49	底7.0高(5.0)
	3	飲食器	漆塗り椀	SKI679	底6.2高(5.0)
	4	飲食器	漆塗り椀	SE694	底7.2高(4.5)
	5	飲食器	漆塗り椀	SD49	底6.8高(4.8)
	6	飲食器	漆塗り椀	SKI191	底7.2高(4.6)
	7	飲食器	漆塗り椀	SD49	底6.6高(3.6)
	8	飲食器	漆塗り椀	SE60	□14.2
	9	飲食器	漆塗り椀	SD49	
	10	飲食器	漆塗り椀	SD49	
	11	飲食器	漆塗り椀	SD49	底部厚1.0
276	1	飲食器	漆塗り椀	SE569	□13.6底6.8高4.8
	2	飲食器	漆塗り椀	SD49	□12.8底7.8高4.1
	3	飲食器	漆塗り椀	SE322	底7.4高(2.7)
	4	飲食器	漆塗り椀	SD49	底7.6高(3.3)
277	1	飲食器	漆塗り椀	SD49	底8.0高(3.9)
	2	飲食器	漆塗り椀	SE518	□13.5底7.1高5.4
	3	飲食器	漆塗り椀	SE108	底5.6高(2.0)
	4	飲食器	漆塗り椀	SD49	底7.8高(2.1)
	5	飲食器	漆塗り椀	SD49	底7.6高(1.7)
278	1	飲食器	漆塗り椀	SE441	□13.5底7.0高5.7
	2	飲食器	漆塗り椀	表採	底6.5高(5.6)
279	1	飲食器	漆塗り椀	SD49	底6.8高(3.3)
	2	飲食器	漆塗り椀	SE322	底7.2高(3.0)
	3	飲食器	漆塗り椀	SE441	底7.3高(8.5)
280	1	飲食器	漆塗り椀	SE536	底7.8高(6.2)
	2	飲食器	漆塗り椀	SK223	底5.7高(1.6)
	3	飲食器	漆塗り椀	SD49	底6.6高(4.0)
	4	飲食器	漆塗り椀	SE108	底5.7高(3.2)
281	1	飲食器	箸	SD706	長19.4幅0.8厚0.5

挿図番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量	
281	2	飲食器	箸		SD706	長19.6幅0.7厚0.5
	3	飲食器	箸		SD706	長19.7幅0.7厚0.5
	4	飲食器	箸		SD706	長20.1幅0.6厚0.5
	5	飲食器	箸		SD706	長20.5幅0.7厚0.5
	6	飲食器	箸		SD706	長20.5幅0.7厚0.6
	7	飲食器	箸		SD706	長20.5幅0.6厚0.6
	8	飲食器	箸		SD706	長20.6幅0.6厚0.5
	9	飲食器	箸		SD706	長20.7幅0.7厚0.5
	10	飲食器	箸		SD706	長20.7幅0.8厚0.5
	11	飲食器	箸		SD706	長20.8幅0.7厚0.5
	12	飲食器	箸		SD706	長20.8幅0.6厚0.5
	13	飲食器	箸		SD706	長21.3幅0.5厚0.4
	14	飲食器	箸		SD706	長23.5幅0.7厚0.6
	15	飲食器	箸		SD706	長20.0幅0.6厚0.5
	16	飲食器	箸		SD706	長22.0幅0.7厚0.6
	17	飲食器	箸		SD706	長20.2幅0.7厚0.5
	18	飲食器	箸		SD706	長20.2幅0.7厚0.5
	19	飲食器	箸		SD706	長20.3幅0.8厚0.5
	20	飲食器	箸		SD706	長20.4幅0.7厚0.5
	21	飲食器	箸		SD706	長20.4幅0.7厚0.4
	22	飲食器	箸		SD706	長20.4幅0.7厚0.5
	23	飲食器	箸		SD706	長20.5幅0.7厚0.4
	24	飲食器	箸		SD706	長20.3幅0.7厚0.5
	25	飲食器	箸		SD706	長21.1幅0.6厚0.5
	26	飲食器	箸		SD706	長21.2幅0.7厚0.5
	27	飲食器	箸		SD706	長21.7幅0.6厚0.5
	28	飲食器	箸		SD706	長19.3幅0.7厚0.5
	282	1	飲食器	杓子	I	SE09
2		飲食器	杓子	I	SD49	長21.5幅4.9厚0.6
3		飲食器	杓子	I	SD706	長23.0幅5.0厚0.5
4		飲食器	杓子	I	SE181	長22.9幅5.0厚0.8
5		飲食器	杓子	I	SD49	長25.6幅6.3厚1.1
6		飲食器	杓子	II	SD49	長20.2幅5.0厚0.6
7		飲食器	杓子	II	SD49	長24.9幅6.6厚1.1
283	1	飲食器	折敷		SE519	長23.0幅22.5厚1.9
	2	飲食器	折敷		SE189	長27.5幅24.9厚0.7
	3	飲食器	折敷		SD49	長37.8幅28.5厚1.1
	4	飲食器	折敷		SE523	長22.3幅20.9厚0.8
	5	飲食器	折敷		SE710	長(20.5)幅13.1厚0.9
	6	飲食器	折敷		SE225	長(18.7)幅11.3厚0.7
284	1	飲食器	折敷		SD49	長18.0幅(6.1)厚0.7
	2	飲食器	折敷		SD49	長18.6幅(9.5)厚0.8
	3	飲食器	折敷		SD49	長21.6幅(7.2)厚0.9
	4	飲食器	折敷		SE239	長22.3幅(11.9)厚0.6
	5	飲食器	折敷		SE189	長28.0幅(4.0)厚0.6
	6	飲食器	折敷		SD49	長19.2幅7.8厚0.7
	7	飲食器	折敷		SE225	長22.4幅(7.7)厚0.8
	8	飲食器	折敷		SE458	長22.6幅(6.8)厚0.5
	9	飲食器	折敷		SD706	長26.5幅(5.9)厚0.8
	10	飲食器	折敷		SE523	長21.4幅(10.0)厚0.6
	11	飲食器	折敷		SE459	長25.7幅(12.4)厚0.9
	12	飲食器	折敷		SE700	長28.7幅(7.8)厚0.4
	13	飲食器	折敷		SE700	長28.7幅(17.3)厚0.5
285	1	飲食器	折敷		SD706	長28.4幅(7.2)厚0.5
	2	飲食器	折敷		SE458	長31.8幅(6.1)厚0.7
	3	飲食器	折敷		SE710	長31.0幅(12.2)厚0.7
	4	飲食器	折敷		SE219	長30.3幅(19.4)厚0.8

(法量cm)

第5節 中世・近世の出土遺物

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	5	飲食器	折敷		SE579	長30.0幅(8.6)厚1.0
	6	飲食器	折敷		SE700	長34.2幅(9.0)厚0.7
	7	飲食器	折敷		SE16	長34.2幅(15.6)厚0.5
	8	飲食器	折敷		SE458	長22.1幅14.0厚1.3
	9	飲食器	折敷		SD49	長9.5幅6.6厚0.5
286	1	飲食器	折敷		SD49	長15.4幅(12.4)厚0.8
	2	飲食器	折敷		SD49	長23.1幅4.1厚0.4
	3	飲食器	折敷		SD49	長21.9幅11.5厚0.8
	4	飲食器	折敷		SE523	長28.6幅6.3厚0.7
	5	飲食器	折敷台		SD49	長4.2幅19.0厚1.2
287	1	調理・炊事具	蓋		SE683	径(14.8)厚0.7
	2	調理・炊事具	蓋		SD49	径(17.7)厚0.9
	3	調理・炊事具	蓋		SD49	径(23.0)厚1.2
	4	調理・炊事具	蓋		SD49	径21.6厚1.1
	5	調理・炊事具	蓋		SD49	径24.0厚1.1
	6	調理・炊事具	蓋		SE710	径34.8厚2.0
	7	調理・炊事具	蓋		SD49	径25.4厚1.3
	8	容器	把手		SE121	長26.6幅10.7厚2.1
	9	調理・炊事具	ささら		SE27	長27.0幅5.4
288	1	調理・炊事具	俎板		SE291	長42.5幅24.8厚1.1
289	1	調理・炊事具	俎板		SE307	長70.0幅23.8厚2.6
	2	調理・炊事具	柄杓		SE154	口9.2底9.6高6.2
	3	調理・炊事具	柄杓		SE205	口11.7高10.0
	4	調理・炊事具	柄杓		SD419	口10.5高10.7
	5	調理・炊事具	柄杓		SE459	口10.9高7.5
290	1	容器	曲物		SE540	口29.7高21.1
	2	容器	曲物		SE159	口22.8高10.6
	3	容器	曲物		SE29	長38.0短35.0高17.0
	4	容器	曲物		SE591	口60.6高50.4
	5	容器	曲物		SE27	口37.3高50.5
	6	容器	曲物		SE26	口49.4高36.4
291	1	容器	曲物底板	I	SKI191	径8.4厚0.8
	2	容器	曲物底板	I	SKI312	径10.2厚0.6
	3	容器	曲物底板	I	SE205	径21.4厚1.4
	4	容器	曲物底板	I	SE218	径20.6厚1.1
	5	容器	曲物底板	I	SD49	径15.2厚0.8
	6	容器	曲物底板	I	SE305	径21.8厚1.2
	7	容器	曲物底板	I	SE535	径23.4厚1.0
	8	容器	曲物底板	I	SD49	径24.0厚1.2
	9	容器	曲物底板	I	SE29	径25.5厚1.0
292	1	容器	曲物底板	II	SD49	径(9.5)厚0.3
	2	容器	曲物底板	II	SD49	径9.9厚0.8
	3	容器	曲物底板	II	SD49	径9.6厚0.6
	4	容器	曲物底板	II	SD49	径11.5厚0.8
	5	容器	曲物底板	II	SD706	径10.4厚0.7
	6	容器	曲物底板	II	SE181	径8.8厚0.7
	7	容器	曲物底板	II	SE458	径9.6厚0.6
	8	容器	曲物底板	II	SE523	径9.4厚1.2
	9	容器	曲物底板	II	SE23	径11.5厚0.9
	10	容器	曲物底板	II	SD706	径(13.9)厚0.5
	11	容器	曲物底板	II	SKI115	径(18.0)厚0.9
	12	容器	曲物底板	II	SD49	径(21.8)厚0.6
	13	容器	曲物底板	II	SE459	径(20.4)厚1.2
	14	容器	曲物底板	II	SD706	径(16.5)厚0.6
	15	容器	曲物底板	II	SD419	径(19.0)厚1.7
	16	容器	曲物底板	II	SE459	径(22.7)厚1.3
	17	容器	曲物底板	II	SE16	径24.9厚1.1

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
293	1	容器	曲物底板	II	SE507	径26.7厚1.1
	2	容器	曲物底板	II	SD630	径(21.7)厚1.3
	3	容器	曲物底板	II	SD49	径(27.2)厚0.8
	4	容器	曲物底板	III	SKI115	径21.0厚1.0
	5	容器	曲物底板	II	SKP1710	径(23.6)厚1.1
	6	容器	曲物底板	II	SE03A	径24.0厚1.5
	7	容器	曲物底板	III	SD49	径18.5厚1.0
	8	容器	曲物底板	III	SD49	径21.2厚0.7
	9	容器	曲物底板	III	SE03A	径(19.8)厚1.7
	10	容器	曲物底板	II	SE205	径22.6厚1.1
294	1	容器	箱蓋		SKI679	長(12.0)幅8.7厚1.8
	2	容器	箱(組物)		SD706	長(12.2)幅8.7厚3.4
	3	容器	箱(組物)		SE458	長42.0幅(13.6)厚0.9
	4	容器	箱(組物)		SE149	長36.0幅21.6高5.0
	5	容器	箱(組物)		MN88	長14.2幅10.7厚1.4
	6	容器	箱(組物)		SD49	長11.1幅3.8厚0.5
	7	容器	箱(組物)		SD49	長4.6幅5.1厚0.7
	8	容器	箱(組物)		SE03A	長11.5幅1.6厚0.5
	9	容器	箱(組物)		SE03A	長29.8幅3.5厚1.6
	10	容器	箱(組物)		SE03A	長47.2幅3.3厚1.4
	11	容器	把手		SD706	長9.2幅1.6厚1.3
	12	容器	把手		SD49	長(13.8)幅1.6厚0.5
	13	容器	把手		SKI115	長15.0幅2.3厚0.7
295	1	容器	栓		8トレ	長2.9幅2.1厚2.1
	2	容器	栓		SD49	長4.6幅2.6厚2.6
	3	容器	栓		SD49	長7.3幅2.9厚1.7
	4	容器	栓		SD49	長9.0幅3.1厚2.5
	5	容器	栓		SKI115	長15.7幅2.0厚1.9
	6	容器	栓		SKI115	長4.0幅3.4厚2.9
	7	容器	栓		SE146	長6.0幅3.7厚3.2
	8	容器	栓		SD49	長7.8幅(5.5)厚2.0
296	1	装身具	櫛		SD49	長3.5幅5.8厚0.9
	2	装身具	櫛		SD49	長2.7幅(5.1)厚1.1
	3	装身具	櫛		SE238	長4.5幅(3.4)厚1.5
	4	装身具	扇子		SD49	長(5.8)幅0.8厚0.1
	5	装身具	扇子		SD49	長(5.9)幅0.8厚0.2
	6	装身具	扇子		SD49	長(5.7)幅0.8厚0.2
	7	装身具	扇子		SD49	長(7.9)幅0.8厚0.2
	8	用途不明具	漆製品		SD49	長(4.8)幅1.3厚1.1
	9	用途不明具	漆製品		SD49	長5.7幅14.5厚0.7
	10	用途不明具	漆製品		SD630	長1.7幅6.2厚0.2
	11	調度具	台		SKI679	長6.5幅15.4厚1.4
297	1	装身具	刀子柄		SE243	長15.4幅3.2厚2.0
	2	装身具	刀子柄		SE174	長12.1幅2.9厚1.1
	3	装身具	刀子柄		SD49	長(7.7)幅2.6厚0.3
	4	装身具	刀子柄		SD49	長19.7幅3.0厚2.0
	5	装身具	刀子柄		SD49	長(15.2)幅3.4厚0.4
	6	装身具	刀子柄		SD49	長(8.7)幅2.8厚0.7
	7	装身具	刀子柄		SD49	長(8.4)幅2.8厚1.3
	8	装身具	刀子柄		SE188	長(9.7)幅2.4厚0.2
	9	装身具	刀子鞘		SD49	長(15.5)幅3.5厚0.5
	10	装身具	刀子鞘		SD49	長24.5幅3.6厚0.6
	11	装身具	刀子鞘		SD49	長26.0幅3.5厚0.6
	12	装身具	刀子鞘		SD49	長28.6幅4.5厚0.6
	13	装身具	刀子鞘		SD49	長27.8幅6.5厚0.8
298	1	履物	下駄		SE121	長14.1幅7.3高3.8
	2	履物	下駄		SE22	長15.5幅8.6高3.8

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	3	履物	下駄		SE127	長14.2幅8.7高2.3
	4	履物	下駄		SD49	長16.5幅8.4高3.2
	5	履物	下駄		SD49	長(15.2)幅9.4高2.0
	6	履物	下駄		SD49	長(14.5)幅9.1高2.4
	7	履物	下駄		SD49	長(22.4)幅(1.9)高2.1
	8	履物	下駄		SD49	長(16.4)幅(3.4)高2.4
	9	履物	下駄		SE441	長(15.9)幅(10.1)高3.0
299	1	履物	下駄		23トレ	長(22.0)幅10.4高1.1
	2	履物	下駄		SE530	長21.2幅(6.1)高2.6
	3	履物	下駄		SD706	長(21.7)幅10.9高3.2
	4	履物	下駄		SD630	長(20.5)幅(11.3)高2.4
	5	履物	下駄		SE723	長(22.0)幅(8.8)高2.0
	6	履物	下駄		SE359	長20.0幅(9.3)高4.1
	7	履物	下駄		MK83	長(22.6)幅10.4高2.6
300	1	履物	下駄		SD49	長19.3幅10.4高2.5
	2	履物	下駄		SE22	長20.1幅10.9高6.4
	3	履物	下駄		SD49	長19.7幅10.9高2.6
	4	履物	下駄		SD49	長22.8幅12.4高4.3
	5	履物	下駄		SD49	長17.8幅10.5高2.5
	6	履物	下駄		SD49	長21.0幅11.7高6.0
301	1	履物	下駄		SD706	長19.0幅10.2高3.6
	2	履物	下駄		SE257	長23.8幅11.5高3.6
	3	履物	下駄		SE16	長22.0幅10.6高5.1
	4	履物	下駄		SE459	長18.8幅9.3高4.3
	5	履物	下駄		SE459	長20.6幅10.2高3.9
	6	履物	下駄		SE459	長25.3幅13.2高2.8
302	1	履物	下駄		SE459	長21.2幅11.2高2.6
	2	履物	下駄		SE16	長24.9幅11.5高5.8
	3	履物	下駄		SE459	長25.2幅(11.3)高6.0
	4	履物	田下駄		SE700	長28.6幅(10.2)高1.6
	5	履物	下駄		SE459	長(23.2)幅13.2高5.6
303	1	履物	下駄		SE706	長31.4幅15.9高3.6
	2	履物	下駄		SE700	長28.4幅12.3高3.2
	3	履物	田下駄		SE723	長30.6幅13.6高3.8
	4	履物	下駄差歯		SD49	長9.4幅7.5厚1.5
	5	履物	下駄差歯		SD49	長10.3幅7.2厚2.0
	6	履物	下駄差歯		SD49	長9.6幅8.0厚1.6
304	1	履物	草履芯	I	SE581	長(23.5)幅(5.2)厚0.2
	2	履物	草履芯	I	SD706	長(23.4)幅(4.8)厚0.3
	3	履物	草履芯	I	SD706	長22.1幅(7.0)厚0.2
	4	履物	草履芯	II	SD49	長(23.2)幅(4.5)厚0.5
	5	履物	草履芯	II	SD49	長23.1幅(5.0)厚0.4
	6	履物	草履芯	II	SD49	長(23.9)幅(3.7)厚0.5
	7	履物	草履芯	II	SD706	長(14.9)幅(4.9)厚0.4
	8	履物	草履芯	II	SD49	長(23.5)幅(5.0)厚0.6
	9	履物	草履芯	II	SD49	長(23.3)幅(4.9)厚0.4
	10	履物	草履芯	II	SD49	長23.4幅(5.3)厚0.4
	11	履物	草履芯	II	SD49	長(23.7)幅(5.6)厚0.3
	12	履物	草履芯	II	SD49	長(23.9)幅(5.2)厚0.5
	13	履物	草履芯	III	SD706	長(11.6)幅(4.9)厚0.2
	14	履物	草履芯	III	SD49	長(18.6)幅(4.2)厚0.4
	15	履物	草履芯	III	SD49	長(23.5)幅(5.2)厚0.6
	16	履物	草履芯	III	SD49	長24.6幅9.9厚0.4
	17	履物	草履芯	III	SD49	長24.9幅10.7厚0.5
305	1	履物	草履芯	III	SD49	長24.0幅10.1厚0.3
	2	履物	草履芯	III	SD49	長24.3幅10.2厚0.7
	3	履物	草履芯	IV	SD49	長(25.4)幅(4.7)厚0.3

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	4	履物	草履芯	IV	SD49	長(24.1)幅(4.4)厚0.6
	5	履物	草履芯	IV	SD49	長(22.5)幅(4.0)厚0.5
	6	履物	草履芯	IV	SD49	長(22.8)幅(5.0)厚0.5
	7	履物	草履芯	IV	SE176	長(24.3)幅9.9厚0.5
	8	履物	草履芯	IV	SE359	長24.6幅9.4厚0.4
	9	履物	草履芯	IV	SD49	長24.1幅10.2厚0.4
	10	履物	草履芯	IV	SD49	長23.1幅10.0厚0.5
	11	履物	草履芯	IV	SE181	長24.2幅11.1厚0.4
	12	履物	草履芯	V	SD49	長(22.4)幅(5.0)厚0.7
	13	履物	草履芯	V	SD49	長(22.4)幅(5.2)厚0.3
	14	履物	草履芯	V	SE176	長(17.5)幅(8.7)厚0.4
306	1	履物	草履芯	V	SD49	長(12.4)幅(4.3)厚0.3
	2	履物	草履芯	V	SD49	長(14.4)幅(4.9)厚0.4
	3	履物	草履芯	V	SD49	長(14.3)幅(5.1)厚0.4
	4	履物	草履芯	V	SD49	長(16.6)幅(4.9)厚0.2
	5	履物	草履芯	V	SD49	長(16.4)幅(5.0)厚0.3
	6	履物	草履芯	V	SD49	長(23.5)幅(1.7)厚0.3
	7	履物	草履芯	V	SD49	長(23.4)幅(2.8)厚0.3
	8	履物	草履芯	V	SD49	長(8.8)幅(3.9)厚0.3
	9	履物	草履芯	V	SD49	長(12.3)幅(3.5)厚0.3
	10	履物	草履芯	V	SD49	長(14.3)幅(3.1)厚0.3
	11	履物	草履芯	V	SD49	長(16.5)幅(4.1)厚0.4
	12	履物	草履芯	V	SD49	長(15.9)幅(4.3)厚0.4
307	1	建具	障子格子		SD49	長(8.7)幅2.0厚0.9
	2	建具	障子格子		SD49	長(10.6)幅1.7厚1.5
	3	建具	障子格子		SD49	長(8.1)幅1.8厚2.5
	4	建具	障子格子		SD49	長(15.7)幅1.9厚0.8
	5	建具	障子格子		SD49	長(13.7)幅1.9厚0.8
	6	建具	障子格子		SD49	長(14.7)幅2.5厚2.0
	7	建具	障子格子		SD49	長(19.1)幅2.0厚1.4
	8	建具	障子格子		SD49	長(50.8)幅1.8厚1.0
	9	建具	障子格子		SE03A	長46.8幅1.6厚0.8
	10	建具	障子格子		SE03A	長46.4幅1.5厚0.4
	11	建具	障子格子		SE459	長(13.8)幅1.9厚1.0
	12	建具	敷居		SE215	長5.8幅11.8厚7.0
	13	建具	楔		SE159	長3.1幅8.9厚1.5
	14	調度具	膳脚		SD49	長11.6幅1.8厚1.3
	15	調度具	膳脚		SD49	長(12.4)幅1.8厚1.3
	16	調度具	膳脚		SD706	長17.7幅2.0厚1.4
308	1	火処具	自在鉤		SD49	長27.1幅5.9厚2.7
	2	火処具	火鑽臼		SD49	長2.2幅(10.5)厚1.5
	3	火処具	糸巻き		SD49	長31.8幅3.厚02.4
	4	染織具	紡錘車		SD49	長6.2幅5.9厚1.3
	5	染織具	紡錘車		SD49	長6.4幅6.5厚0.8
	6	染織具	手押木		SD49	長6.5幅(10.7)厚4.5
	7	染織具	手押木		SD49	長4.0幅14.3厚3.0
309	1	呪術具	用途不明		SD49	長29.2幅5.8厚2.5
	2	呪術具	的		SD49	径21.8幅(5.1)厚0.6
	3	呪術具	サバマス		SD630	板:長23.2幅20.2厚2.2 棒:長105.8幅2.5
	4	呪術具	サバマス		SD49	長18.4幅15.4厚2.1
	5	呪術具	サバマス		SD49	長27.2幅(14.0)厚1.9
	6	呪術具	サバマス		SD49	長16.7幅(11.3)厚1.3
	7	呪術具	サバマス		SD49	板:長18.1幅16.0厚1.8 棒:長126.4幅15.7厚2.4
	8	呪術具	斎串		SKI191	長(19.0)幅3.0厚0.4
310	1	形代	鳥形		1トレ	長2.1幅9.6厚0.4

第5節 中世・近世の出土遺物

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	2	形代	人形	立体	SD49	長14.0幅1.8厚1.9
	3	形代	人形	立体	SD49	長19.8幅1.9厚1.1
	4	形代	人形	立体	SD49	長32.9幅1.6厚0.7
	5	形代	人形	立体	SKI679	長13.9幅4.5厚2.3
	6	形代	人形		SD706	長17.5幅3.3厚0.5
	7	形代	人形		SE581	長(11.3)幅3.5厚0.6
	8	形代	人形		SD49	長(12.6)幅2.9厚0.3
	9	形代	人形		SD49	長12.3幅2.8厚0.4
	10	形代	人形		SD49	長14.8幅2.4厚0.5
	11	形代	人形		SD49	長18.1幅3.1厚3.5
	12	形代	刀子形		SD49	長(13.6)幅2.7厚1.0
	13	形代	刀子形		SKI191	長19.7幅3.0厚1.1
	14	形代	刀子形		SD706	長24.3幅3.2厚1.3
	15	形代	刀子形		SD49	長27.0幅2.8厚0.6
	16	形代	刀子形		SD49	長16.4幅2.6厚0.8
	17	形代	刀子形		SKI191	長(66.7)幅4.5厚0.9
	18	形代	その他		SD49	長5.8幅2.4厚0.3
	19	形代	その他		SD706	長5.3幅2.6厚0.3
	20	形代	その他		SD706	長5.2幅3.5厚0.5
311	1	形代	杓子形		SD49	長24.9幅4.6厚0.5
	2	形代	杓子形		SD49	長12.2幅2.8厚0.3
	3	形代	その他		SKI115	長13.5幅1.2厚0.2
	4	形代	その他		SD49	長10.4幅3.2厚0.5
	5	形代	その他		SD49	長10.5幅2.9厚0.3
	6	形代	その他		SD49	長10.6幅3.0厚0.3
	7	形代	その他		SD49	長6.8幅4.9厚0.5
	8	形代	その他		SD49	長10.0幅3.5厚0.3
	9	形代	その他		SD49	長17.7幅1.5厚0.4
	10	形代	その他		SKI115	長12.2幅3.0厚0.4
	11	形代	その他		SD49	長(12.0)幅2.5厚0.3
	12	形代	その他		SE583	長16.5幅2.8厚0.2
	13	形代	その他		SKI115	長21.8幅4.2厚0.4
	14	形代	その他		SD49	長25.8幅3.3厚0.5
	15	形代	その他		SKI115	長33.7幅2.5厚1.4
	16	形代	その他		SD49	長(20.8)幅3.0厚0.5
	17	形代	その他		SD49	長25.7幅3.5厚0.3
	18	形代	その他		SD49	長28.4幅4.5厚0.4
	19	形代	その他		SKI115	長21.5幅3.1厚0.3
	20	形代	その他		SD49	長(14.8)幅3.0厚0.8
312	1	形代	その他		SE583	長20.4幅2.6厚0.5
	2	形代	その他		SKI191	長24.3幅4.9厚0.5
	3	形代	その他		SD49	長28.9幅5.0厚1.0
313	1	遊戯具	笛		SD49	長15.7幅2.4厚2.1
	2	遊戯具	羽子板		SE508	長31.0幅10.3厚0.5
	3	遊戯具	羽子板		SE04	長27.6幅7.6厚0.8
	4	計量具	物差し		SD706	長(15.0)幅0.5厚0.4
	5	運搬具	荷札		SD49	長7.6幅2.0厚0.7
	6	運搬具	天秤棒		SKI679	長(32.7)幅3.2厚1.9
	7	工具	篋		SD49	長11.7幅3.0厚1.0
	8	工具	砥石台		SD49	長18.1幅3.5厚1.9
	9	工具	砥石台		SD49	長30.4幅4.8厚2.3
	10	工具	砥石台		SD419	長26.7幅6.4厚4.0
314	1	農具	鍬		SD49	台部:長21.8幅10.7 柄:長(45.6)幅18.1厚3.1
	2	農具	横槌		SD49	長38.1幅6.1厚5.8
	3	農具	柄振		SE03A	長36.6幅4.7厚3.9
315	1	農具	浮子		2トレ	長21.9幅1.5厚0.9

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	2	漁具	浮子		SE459	長24.8幅1.4厚1.2
	3	漁具	浮子		SE459	長25.0幅1.4厚0.9
	4	漁具	浮子		SD706	長(18.1)幅0.8厚0.8
	5	漁具	浮子		SD706	長(12.0)幅0.9厚0.7
	6	漁具	オサ		SE576	長(76.4)幅6.0厚4.6
	7	漁具	オサ		SE576	長87.0幅3.0厚3.2
	8	漁具	櫂		SE274	長67.7幅8.8厚3.4
316	1	編物	結び		SD49	長11.8幅4.3厚1.0
	2	編物	籠		SD49	長20.1幅14.9
317	1	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.6幅(3.7)厚0.3
	2	用途不明具	方形木製品		SD49	長9.1幅(2.8)厚0.3
	3	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.4幅(3.1)厚0.3
	4	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.2幅(6.1)厚0.3
	5	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.3幅(4.9)厚0.3
	6	用途不明具	方形木製品		SD49	長9.7幅(3.8)厚0.2
	7	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.8幅(4.9)厚0.4
	8	用途不明具	方形木製品		SD706	長8.3幅7.1厚0.2
	9	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.4幅7.5厚0.4
	10	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.6幅(5.7)厚0.3
	11	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.8幅(5.0)厚0.6
	12	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.9幅(5.6)厚0.4
	13	用途不明具	方形木製品		SD49	長9.3幅7.6厚0.3
318	1	用途不明具	方形木製品		SD49	長7.3幅(2.5)厚0.3
	2	用途不明具	方形木製品		SD49	長7.8幅(2.2)厚0.2
	3	用途不明具	方形木製品		SE208	長6.4幅(5.3)厚0.4
	4	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.6幅(3.0)厚0.2
	5	用途不明具	方形木製品		SD49	長9.0幅(4.3)厚0.2
	6	用途不明具	方形木製品		SD630	長7.3幅(5.5)厚0.3
	7	用途不明具	方形木製品		SD49	長7.9幅(6.3)厚0.4
	8	用途不明具	方形木製品		SD706	長8.1幅7.3厚0.3
	9	用途不明具	方形木製品		SE583	長7.9幅6.2厚0.2
	10	用途不明具	方形木製品		SD49	長7.8幅(5.0)厚0.2
	11	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.2幅(5.2)厚0.2
	12	用途不明具	方形木製品		SD49	長8.9幅(6.6)厚0.5
	13	用途不明具	方形木製品		SE208	長9.1幅7.2厚0.4
319	1	用途不明具	棒状		SD706	長26.6幅1.0厚0.7
	2	用途不明具	棒状		SD706	長27.2幅1.1厚0.6
	3	用途不明具	棒状		SD706	長27.5幅1.1厚0.6
	4	用途不明具	棒状		SD706	長26.3幅1.0厚0.5
	5	用途不明具	棒状		SE09	長28.7幅2.0厚0.9
	6	用途不明具	棒状		SD706	長28.9幅1.3厚1.0
	7	用途不明具	棒状		SD706	長35.5幅1.4厚1.0
	8	用途不明具	棒状		SE208	長35.8幅1.4厚0.6
	9	用途不明具	棒状		SD706	長22.7幅1.4厚0.7
	10	用途不明具	棒状		SD706	長28.7幅1.3厚0.7
	11	用途不明具	棒状		SD706	長30.2幅1.3厚0.7
	12	用途不明具	棒状		SD49	長15.6幅1.1厚0.9
	13	用途不明具	棒状		SD49	長17.4幅1.1厚0.9
	14	用途不明具	棒状		SD49	長23.7幅1.0厚0.9
	15	用途不明具	棒状		SD49	長26.9幅1.1厚0.7
	16	用途不明具	棒状		MD74	長32.3幅0.9厚0.6
	17	用途不明具	棒状		SE208	長33.0幅0.9厚0.8
320	1	用途不明具	棒状		SE322	長25.9幅1.0厚0.9
	2	用途不明具	棒状		SD706	長31.7幅1.1厚0.6
	3	用途不明具	棒状		SE700	長22.8幅1.9厚1.3
	4	用途不明具	棒状		SD49	長21.5幅2.5厚1.0
	5	用途不明具	棒状		SE61	長50.8幅1.5厚1.2

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	6	用途不明具	棒状		SD49	長(10.6)幅1.3厚0.8
	7	用途不明具	棒状		SD49	長(22.5)幅1.2厚0.7
	8	用途不明具	棒状		SD49	長46.8幅1.0厚0.9
	9	用途不明具	棒状		SD49	長52.9幅1.9厚1.2
	10	用途不明具	棒状		SE218	長77.0幅1.0厚0.6
	11	用途不明具	棒状		SD49	長47.5幅0.8厚0.7
	12	用途不明具	棒状		SD49	長45.7幅1.3厚0.8
	13	用途不明具	棒状		SD49	長37.9幅1.2厚1.2
	14	用途不明具	棒状		SD49	長34.8幅1.0厚0.7
	15	用途不明具	棒状		SE159	長26.1幅1.3厚1.3
	16	用途不明具	棒状		SD706	長30.0幅1.7厚1.5
321	1	用途不明具	棒状		SD49	長17.3幅1.0厚0.5
	2	用途不明具	棒状		SD706	長18.7幅1.2厚0.4
	3	用途不明具	棒状		SD49	長20.9幅0.9厚0.4
	4	用途不明具	棒状		SD706	長22.6幅0.7厚0.7
	5	用途不明具	棒状		SKI679	長24.9幅1.6厚1.1
	6	用途不明具	棒状		SD706	長27.5幅0.6厚0.6
	7	用途不明具	棒状		SD49	長29.0幅1.0厚0.8
	8	用途不明具	棒状		SD49	長41.0幅1.7厚0.9
	9	用途不明具	棒状		SD49	長65.9幅1.1厚1.0
	10	用途不明具	棒状		SE507	長25.5幅0.7厚0.5
	11	用途不明具	棒状		SE507	長25.8幅0.7厚0.6
	12	用途不明具	棒状		SE507	長25.8幅0.8厚0.5
	13	用途不明具	棒状		SE507	長26.9幅0.7厚0.5
	14	用途不明具	棒状		SD706	長29.2幅1.2厚0.9
	15	用途不明具	棒状		SE507	長33.3幅1.1厚0.6
	16	用途不明具	棒状		SD706	長37.3幅1.0厚0.8
	17	用途不明具	棒状		SKI244	長14.7幅0.7厚0.6
	18	用途不明具	棒状		SKI244	長14.8幅0.8厚0.5
	19	用途不明具	棒状		SKI244	長15.6幅0.6厚0.6
	20	用途不明具	棒状		SKI244	長15.5幅0.6厚0.6
	21	用途不明具	棒状		SKI244	長14.7幅0.5厚0.6
	22	用途不明具	棒状		SKI244	長14.1幅0.6厚0.6
322	1	用途不明具	棒状		SD49	長(14.7)幅1.4厚0.6
	2	用途不明具	棒状		SD706	長17.8幅1.1厚0.8
	3	用途不明具	棒状		SD49	長16.0幅0.8厚0.6
	4	用途不明具	棒状		SE523	長24.5幅1.8厚0.5
	5	用途不明具	棒状		SE523	長(21.5)幅1.4厚0.5
	6	用途不明具	棒状		SD49	長22.4幅1.1厚0.4
	7	用途不明具	棒状		SE581	長25.0幅1.9厚0.9
	8	用途不明具	棒状		SKI679	長25.5幅2.3厚1.1
	9	用途不明具	棒状		SD49	長29.4幅5.2厚1.4
	10	用途不明具	棒状		SE305	長14.8幅2.4厚2.0
	11	用途不明具	棒状		SE102	長33.1幅2.1厚0.5
	12	用途不明具	棒状		SE61	長33.9幅3.1厚1.3
	13	用途不明具	棒状		SE03A	長63.6幅1.5厚1.2
	14	用途不明具	棒状		SD706	長63.3幅3.4厚1.3
	15	用途不明具	棒状		SE459	長99.1幅8.9厚4.0
323	1	用途不明具	板状		SD49	長11.8幅4.2厚1.0
	2	用途不明具	板状		SD49	長21.4幅1.9厚1.4
	3	用途不明具	板状		SD49	長35.4幅2.7厚1.4
	4	用途不明具	板状		SD49	長40.1幅4.2厚0.9
	5	用途不明具	板状		SD706	長46.2幅4.8厚0.8
	6	用途不明具	板状		SD49	長45.5幅7.6厚1.0
	7	用途不明具	板状		SD706	長20.0幅3.6厚0.7
	8	用途不明具	板状		SD706	長24.7幅3.8厚0.6
	9	用途不明具	板状		SD706	長32.0幅3.6厚0.3

挿図	番号	大項目	小項目	分類	出土位置	法量
	10	用途不明具	板状		SE169	長32.1幅8.2厚0.8
324	1	用途不明具	板状		SD49	長4.9幅5.1厚0.4
	2	用途不明具	板状		SD49	長4.4幅8.2厚0.6
	3	用途不明具	板状		SD49	長16.0幅5.5厚1.0
	4	用途不明具	板状		SD49	長(16.6)幅4.7厚0.4
	5	用途不明具	板状		SE459	長15.8幅5.0厚0.4
	6	用途不明具	板状		SE582	長(19.7)幅(12.1)厚1.4
	7	用途不明具	板状		SD49	長9.0幅4.2厚0.8
	8	用途不明具	板状		SD49	長15.2幅3.8厚0.9
	9	用途不明具	板状		SD49	長28.0幅2.5厚0.9
	10	用途不明具	板状		SD49	長25.4幅(8.8)厚0.8
	11	用途不明具	板状		SD49	長32.8幅7.1厚0.6
	12	用途不明具	板状		SD49	長60.3幅3.8厚0.5
	13	用途不明具	板状		SE581	長27.8幅3.6厚0.6
	14	用途不明具	板状		SE218	長27.6幅13.0厚0.5
325	1	用途不明具	板状		SD49	長6.1幅3.6厚0.7
	2	用途不明具	板状		SD706	長7.2幅5.3厚0.7
	3	用途不明具	板状		SE459	長10.9幅3.7厚0.5
	4	用途不明具	板状		SD49	長11.2幅7.6厚0.7
	5	用途不明具	板状		SD49	長9.9幅9.3厚0.9
	6	用途不明具	板状		SD49	長17.4幅5.9厚0.4
	7	用途不明具	板状		SE16	長11.9幅11.8厚1.2
	8	用途不明具	板状		SD49	長17.0幅8.2厚0.7
	9	用途不明具	板状		SD49	長18.0幅9.8厚0.8
	10	用途不明具	板状		SE225	長24.9幅5.3厚0.7
	11	用途不明具	板状		SD49	長14.0幅6.2厚0.7
	12	用途不明具	板状		SD49	長14.5幅7.6厚1.1
326	1	用途不明具	その他		SD49	長20.8幅2.8厚1.2
	2	用途不明具	その他		SD49	長25.7幅3.2厚1.2
	3	用途不明具	その他		SD49	長4.7幅1.5厚0.3
	4	用途不明具	その他		SD49	長8.2幅1.3厚0.4
	5	用途不明具	その他		SD49	長(8.7)幅3.7厚0.5
	6	用途不明具	その他		SD49	長14.7幅6.4厚0.9
	7	用途不明具	その他		SE583	長7.8幅2.0厚1.8
	8	用途不明具	その他		SD49	長9.2幅3.2厚1.7
	9	用途不明具	その他		SD49	長11.0幅3.3厚1.6
	10	用途不明具	その他		SD706	長12.2幅3.6厚2.4
	11	用途不明具	その他		SD49	長8.3幅6.4厚1.3
	12	用途不明具	その他		SKI224	長7.3幅7.5厚5.2
	13	用途不明具	その他		SKI115	長10.1幅5.0厚3.1
	14	用途不明具	その他		SE583	長11.7幅4.8厚3.6
	15	用途不明具	その他		SD49	長9.8幅5.1厚2.3
	16	用途不明具	その他		SD49	長8.3幅8.4厚2.3
	17	用途不明具	その他		SE583	長14.3幅7.9厚1.2
	18	用途不明具	その他		SE121	長14.5幅5.4厚2.5
327	1	用途不明具	その他		SE441	長20.9幅15.8厚9.0
	2	用途不明具	その他		SD49	長22.0幅9.3厚5.2
	3		樺		SE237	長13.4幅4.1厚2.6
	4		樺		SD49	長5.9幅4.7厚1.9

3 金属製品 (第330・第331図、巻頭図版6-6)

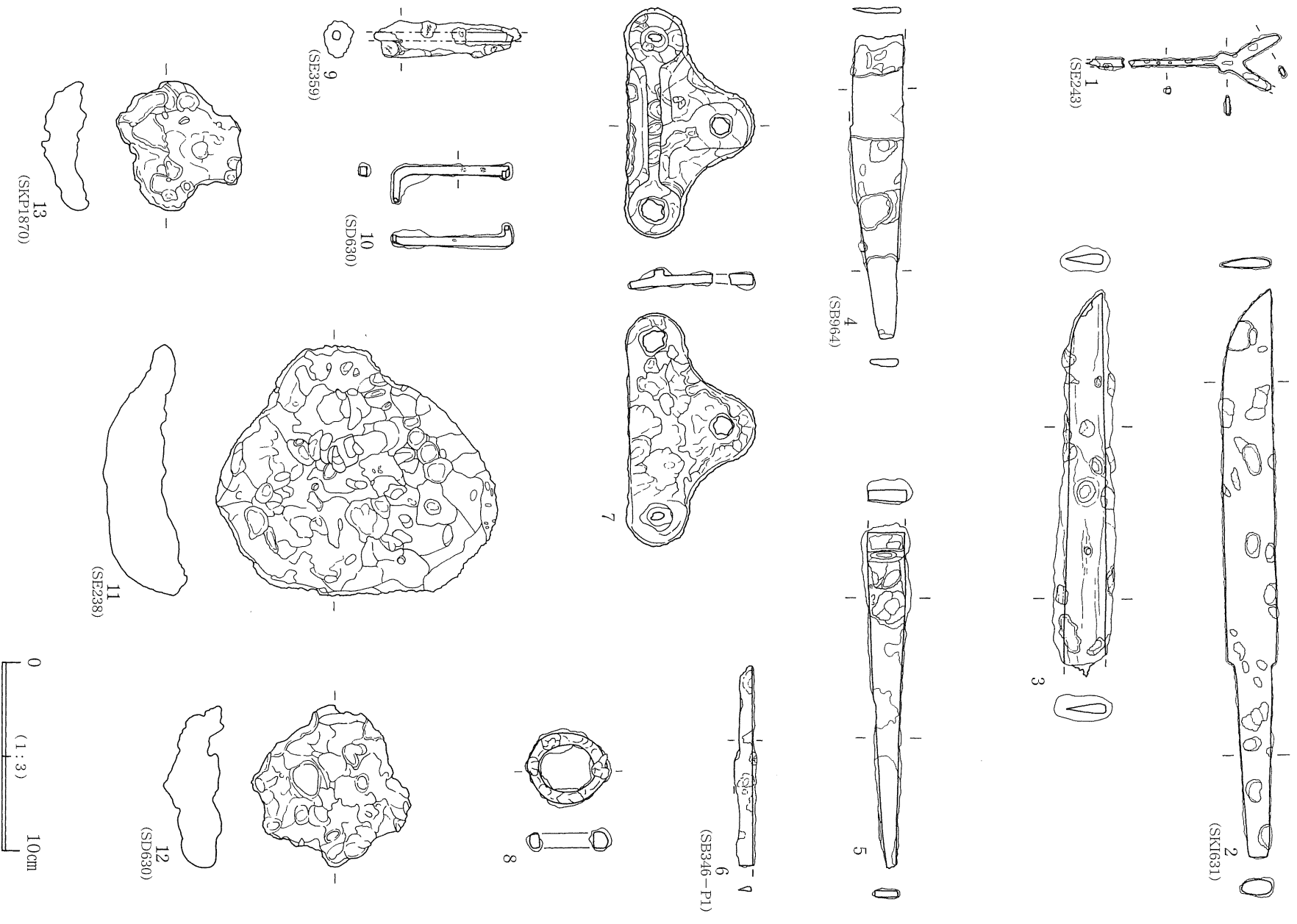
金属製品としたものには、鉄素材 (330図) のものと銅素材 (331図) のものがある。ただ331-4のみ素材不詳である。

330-1は雁股形の鉄鏃である。SE243井戸跡から出土した。2～6は刀子であり、2は完形であり、刃部の長さは20cmとなる。8は環状鉄製品である。9は釘状の製品であろうか。SE359井戸跡からの出土である。10は鏃と推定され、SD630堀跡から出土したものである。11～13は鉄滓である。11は椀形滓であり、SE238曲物内から礫と一緒に出土した。井戸廃棄の際に意識的に入れられたものと考えられる。

331-1は仏具である銅製の六器で、本来は碗と皿からなるが碗のみが出土した。底部は残っておらず、意図的に打ち欠かれた可能性がある。装飾は口縁部に沈線が三条めぐりのみで簡素である。2は銅製の切羽である。切羽は刀の束に接するところと、鞘に接するところとに添える薄い長円形の金属である。周縁部に細かい刻みが等間隔に施されている。表面には丁寧に磨く仕上げの調整がみられ、裏面は叩き調整の跡がそのまま残されている。3は銅製の火箸である。4は匙の一部に近い形状をしている。331-5～9は、331-5～7が雁首、8・9が吸口の部分である。8はSD49堀跡出土ではあるが、最上層での確認であり、同堀に伴う遺物とは考えていない。

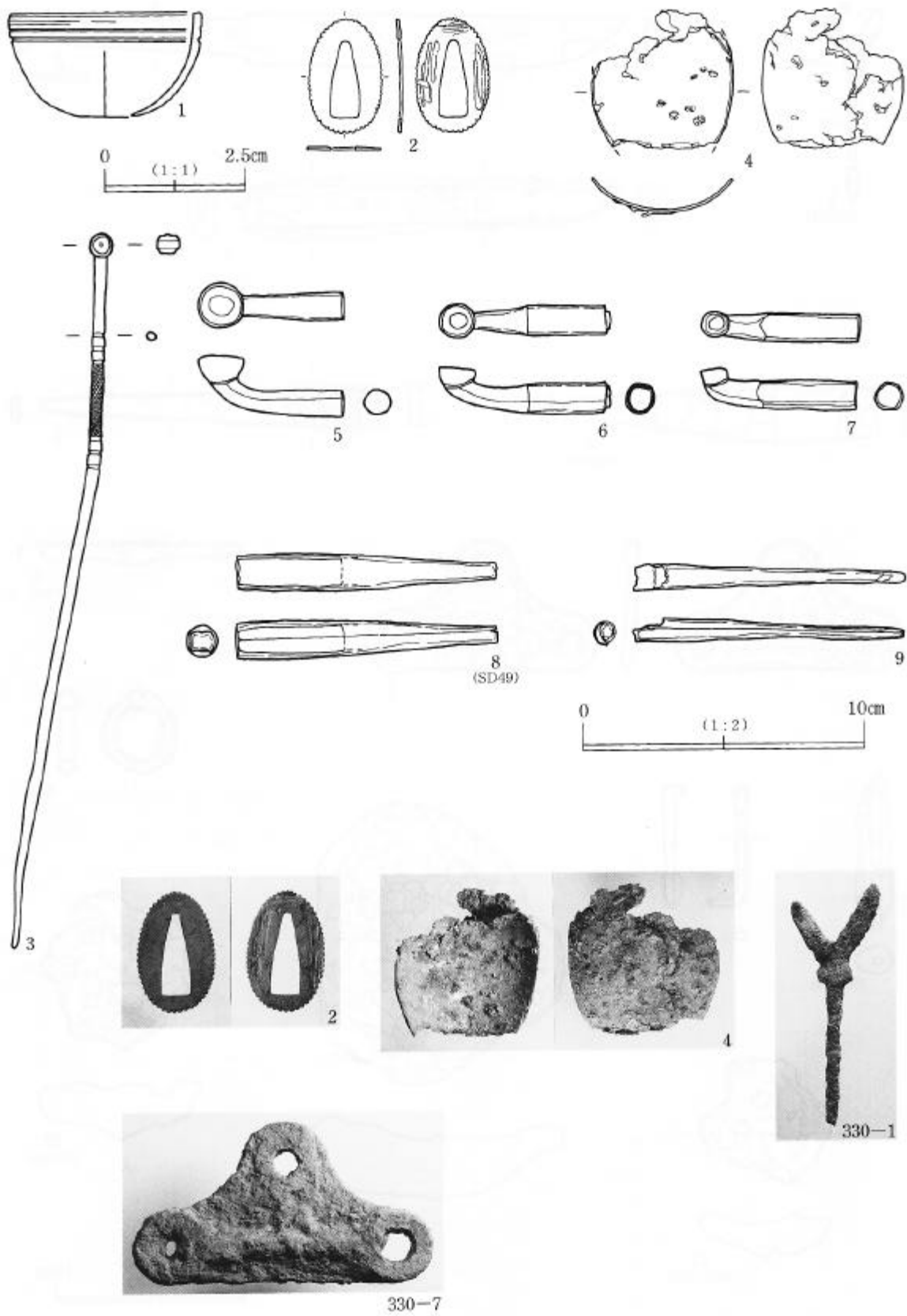
第11表 出土金属製品属性表

挿図	番号	器種	素材	出土位置	法量:長さ、幅、厚さcm、重量g
330	1	鉄鏃	鉄	SE243	長(8.3)幅(3.2)厚0.2重6.1
	2	刀子	鉄	SK631	長30.5幅3.0厚0.8重162.1
	3	刀子	鉄	MF82	長(19.8)幅2.2厚0.5重137.1
	4	刀子	鉄	SKP2231	長(16.5)幅2.7厚0.4重56.6
	5	刀子	鉄	NG78	長(18.0)幅2.0厚0.6重106.7
	6	刀子	鉄	SB346 P1	長(10.7)幅0.8厚0.2重8.9
	7	不明	鉄	NE71	長7.0幅12.4厚0.9重141.7
	8	環状鉄製品	鉄	MH77	長4.5幅3.4厚0.8重29.2
	9	釘?	鉄	SE359	長7.9幅1.9厚1.6重23.4
	10	鏃	鉄	SD630	長6.6幅0.7厚0.7重11.1
	11	鉄滓	鉄	SE238	長15.3幅13.4厚4.5重1020
	12	鉄滓	鉄	SD630	長8.6幅8.7厚3.3重194.4
	13	鉄滓	鉄	SKP1870	長6.6幅6.9厚2.6
331	1	六器	銅	LQ60	口径3.5器高1.8厚0.15
	2	切羽	銅	1トレンチ	長4.1幅3.2厚0.2重5.6
	3	火箸	銅	39トレンチ	長25.5幅0.8.0.4厚0.7重30.0
	4	不明	不明	23トレンチ	長(5.0)幅5.0厚0.1重6.1
	5	煙管	銅	表採	長5.2幅1.6厚0.9重5.8
	6	煙管	銅	表採	長6.1幅1.2厚1.1重6.7
	7	煙管	銅	NN73	長5.6幅1.0厚1.0重12.6
	8	煙管	銅	SD49	長9.3幅1.4厚1.2重22.3
	9	煙管	銅	MK50	長(9.7)幅1.0厚0.9重23.4



第330図 出土遺物 (80) 鉄製品

第5節 中世・近世の出土遺物



第331図 出土遺物 (81) 銅製品

4 石製品

(1) 砥石 (第332図1～15)

砥石は15点出土している。1はS E 104、10はS E 105、11はS E 04井戸跡、2・12はS D 49、5はS D 706堀跡、14はS D 64溝跡、4はS K 632土坑からそれぞれ出土している。

砥石はその石質、石目から荒砥・中砥・仕上砥の3種に分類される。荒砥はその石質から「研ぐ」よりも「削る」に近い使用方法になり、刀鍛冶・研師あるいは鑄造関係といった主に刃物の生産や供給につながる者が手にする道具である。中砥は刀鍛冶が中磨で使用する他は、庖丁・鎌・鉋等の刃物を始め陶磁器の器面の仕上げや日用品の調整や保守に使用されることが多く、用途とともに需要が最も広い砥石である。仕上砥は裏刃をも砥げる砥石を指し、大工道具のように繊細な刃先を要求されたり、日本古来独特の「引いて」切る刃をつけるのに適している。

本遺跡の砥石は荒砥が3点(7・12・14)、中砥が11点(1～6、8～11、13)、不明が1点(15)であり、中砥が多くを占める。木製品の加工痕(手斧痕や折敷等に残る刃物痕)から、大工道具の相方となるべき仕上砥は、存在していたことが推測できるが、今回の調査で出土したものからは確認できなかった。

原材料の産地は、古くから西日本において有名な伊予のほか、秋田県北東部(在地A)、広く東北地方で出土するもので産地は特定されていない(在地B)地域であることが分かっている。いずれも流紋岩質凝灰岩であるが、その産地によって石質は異なる。在地Aは硬い石目でやや粗粒の凝灰岩で、板状に剥離することが特徴である。在地Bは石目は細かいが柔らかいものである。中砥の搬入をみると、全国に流通する伊予砥があり、他は在地系のもので占められる。この傾向は北陸や東北の他地域と共通するものである。

(2) 石硯 (第332図16、巻頭図版6-7)

石硯は1点出土している。砥石で在地Aとされる産地の製品である。砥石の職人が、砥石を製作する際についでに作ったような製品である。本遺跡には砥石と一緒に搬入されたと考えられる。黒色の付着物(漆の可能性もある)が海部を除く表面のほぼ全体にみられる。

※砥石・石硯の起稿に際しては、鎌倉考古学研究所汐見一夫氏のご教示を得た。

(3) 礪石器 (第333図)

砥石・硯以外の擦痕等の認められる石製品を礪石器としてまとめる。全て井戸跡からの出土であり、12点を図示する。これらは井戸を廃棄する際にその祭祀行為の一つとして井戸側内に礪を投入する(あるいは残置する)事例が数多く認められるが、この中に人為的な加工が観察される石器を抽出したものである。図示したものは平坦な面を持ち、表面に凹凸が少ない。砥石のような使用をされていた可能性もある。5は同一方向に溝状の擦痕が残り、また被熱痕跡も見られる。その他にも微細な擦痕・磨面等を残す礪(被熱個体も含む)は数多く存在する。しかしこれが明確に人為的な石器であるのか判断はできず、掲載していない。

第12表 出土砥石・硯属性表

挿図	番号	出土位置	種別	産地	小口	使用面	二次加工	法 量	備 考
332	1	SE104	中砥	伊予	○	4面	—	長(6.4)幅2.8厚2.0重55.4	
	2	SD49	中砥	不明	—	3面	?	長9.4幅2.2厚1.7重62.3	右側面加工痕(生産地か、消費地二次加工かは?)。
	3	MG62	中砥	A	○	4面	○	長8.5幅2.8厚2.4重91.5	表面小口寄り盤状工具再形成か?
	4	SK632	中砥	備水?	—	4面	—	長10.2幅3.8厚3.2重118.2	
	5	SD706	中砥	B	—	4面	—	長7.6幅3.7厚2.0重68.1	
	6	NK55	中砥	伊予	—	1面	—	長6.5幅3.8厚1.3重43.7	
	7	MA55	荒砥	不明	—	4面	—	長(6.6)幅4.3厚2.8重107.5	
	8	表採	中砥	伊予	—	3面	○	長(5.3)幅3.7厚1.8重44.2	左面生産地加工痕か?裏面砥面として使用後に再形成か?
	9	表採	中砥	A	○	2面	—	長(5.6)幅4.8厚2.2重92.4	仕上砥としても使用可能か?両側面生産地成形イキ=幅1寸6分
	10	SE105	中砥	不明	○	4面	—	長(6.2)幅3.6厚2.2重55.3	
	11	SE04	中砥	B	—	3面	○	長(7.7)幅6.3厚2.9重236.2	左側面形成痕。下方は消費地での二次加工折り採り痕。四方から若干切れ込みを入れ、裏面から叩き折り
	12	SD49	荒砥	不明	—	5面	—	長(7.4)幅8.1厚4.0重251.6	
	13	SX45	中砥	A	—	2面	—	長(12.1)幅5.6厚2.2重151.3	
	14	SD64	荒砥	大村?	—	3面	—	長(6.8)幅9.3厚6.8	表面下方ハツリ工具痕(=生産地工具痕)
	15	SE16	不明	不明	不明	1面	—	長6.5幅7.5厚2.3重82.3	
	16	MF60	石硯	(A)	—	—	—	長(5.0)幅3.6厚1.6重(41.8)	砥石産地Aの石で硯を造る。表面漆?塗り。陸部を再形成途中か?

(長・幅・厚cm、重g)

凡例

産地 下記の文献を参照されたい。Aは文中在地A、Bは文中在地B。

小口 長さ方向の端部に、生産地加工痕・製品成形時加工痕が観察されるものに○、—は破損断面。

二次加工 消費地側での、再成形や折り採り他石材加工痕が観察される場合に○。

参考文献

汐見一夫 「砥石について—中世遺跡出土の仕上砥を中心に—」 『中世北陸の石文化 I』 北陸中世考古学研究会 1999 (平成11年)

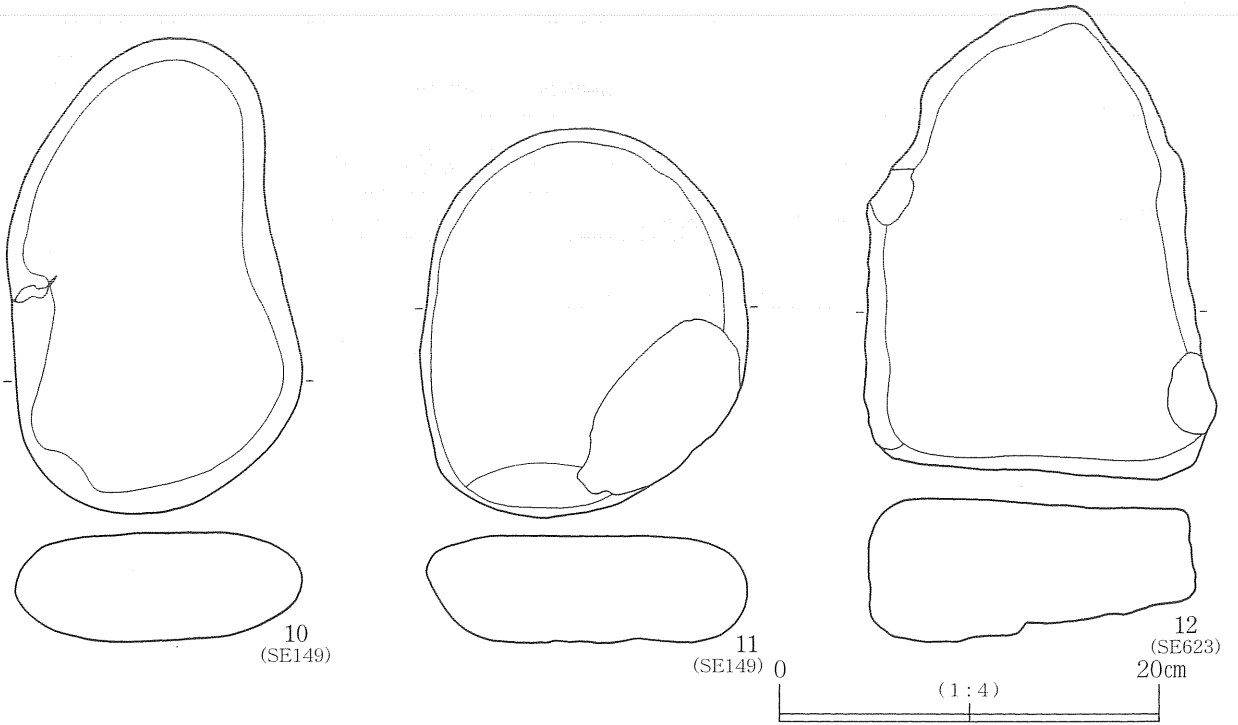
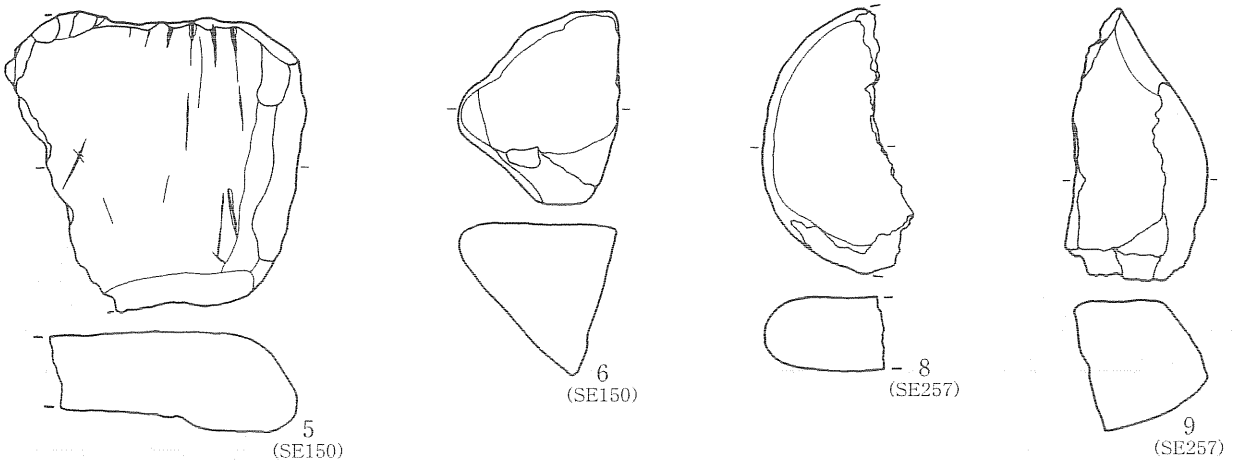
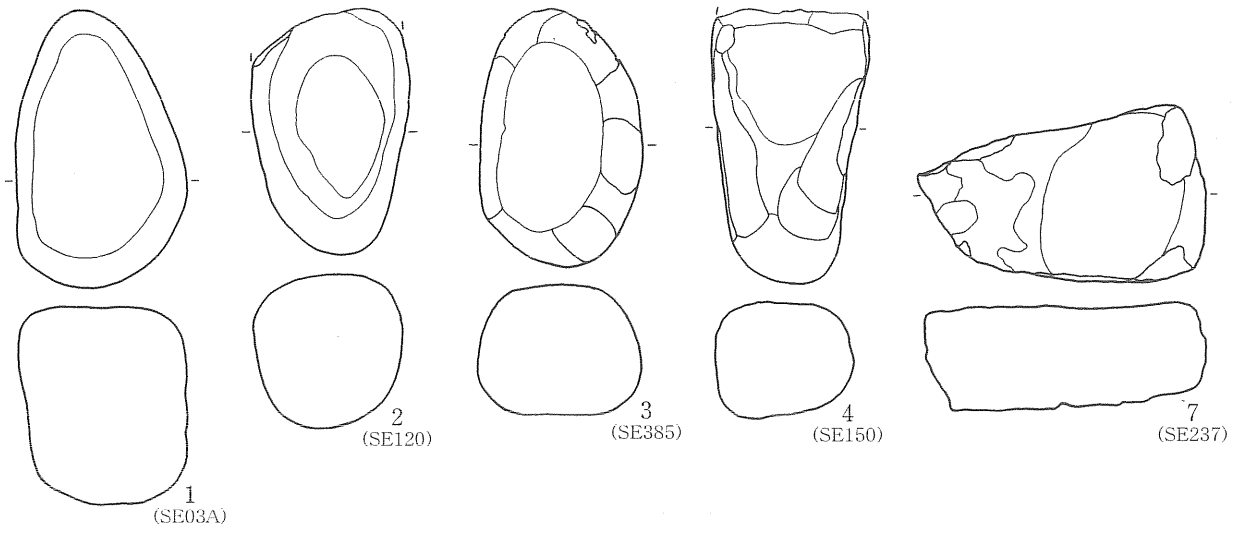
第13表 出土礫石器属性表

挿図	番号	種別	出土位置	法 量
333	1	礫石器	SE03A	長14.7幅9.0厚10.5重2180
	2	礫石器	SE120	長13.0幅8.4厚8.1重1100
	3	礫石器	SE385	長13.6幅8.6厚6.9重1260
	4	礫石器	SE150	長14.6幅8.3厚6.2重1140
	5	礫石器	SE150	長15.9幅15.6厚5.4重1580
	6	礫石器	SE150	長10.3幅8.4厚8.1重770
	7	礫石器	SE237	長9.5幅15.2厚5.8重910
	8	礫石器	SE257	長24.1幅7.2厚3.9重520
	9	礫石器	SE257	長14.5幅7.0厚6.7重880
	10	礫石器	SE149	長25.1幅15.6厚5.8重3120
	11	礫石器	SE149	長20.6幅17.2厚5.6重3040
	12	礫石器	SE623	長25.0幅18.6厚7.6重3990

(長・幅・厚cm、重g)



第332図 出土遺物 (82) 石製品 (1) 砥石・硯



第333図 出土遺物 (83) 石製品 (2)

5 土製品 (第334～336図)

土製品では漁網錘として使用された土錘と陶錘が出土している。土錘487点、陶錘18点の計505点である。16の土錘の中には、網の一部と考えられる撚縄が残存している。出土地点は遺構内では、SD49で49点、SE219で42点、SE380で21点など堀・井戸跡からまとまって出土したものの他、遺跡のほぼ全域に及んでいる。今回出土した土錘・陶錘は大きく以下の3つに分類できる。

A類(1～42)：筒状のもので、管状土錘あるいは筒形土錘と呼ばれ、曳網・巻網に使用したものとされる。325点確認する。重さは20～172gである。中央部付近に稜をもたないもの(A1類1～29)ともつもの(A2類30～42)に細分される。A2類には側面が不整五角形のもの(31など)、稜が不明瞭で全体が丸みを帯びたもの(36～39など)が見られる。陶錘(27～29)は全てA1類に属する。

B類(43～55)：細長いもので、刺網に使用したものとされる。83点確認する。重さは20g未満である。A・C類と比較して、堅く焼き締まったものが多い。

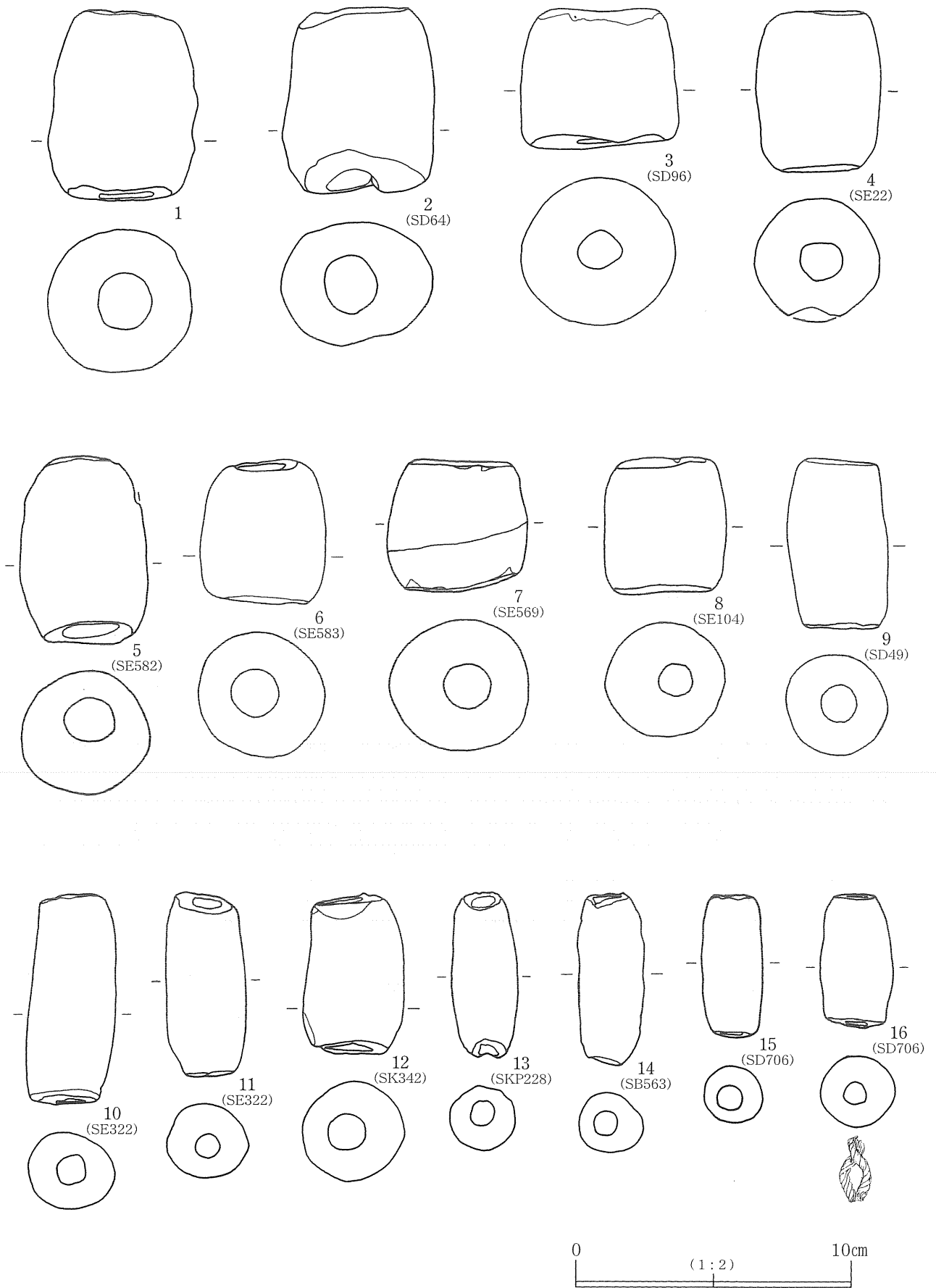
C類(56～64)：円錐形のもの。円錐の底面が平坦になるように調整(一部で切断)されている。26点確認する。重さは34～69gである。形状・製作痕跡などからA・B類とは異質な感がある。

A～C類ともその長さは3～8.9cmであり、大部分が4～7cmに収束している。なお423頁上には最大径/重量、長さ/重量の2種の土錘分布図を示している。

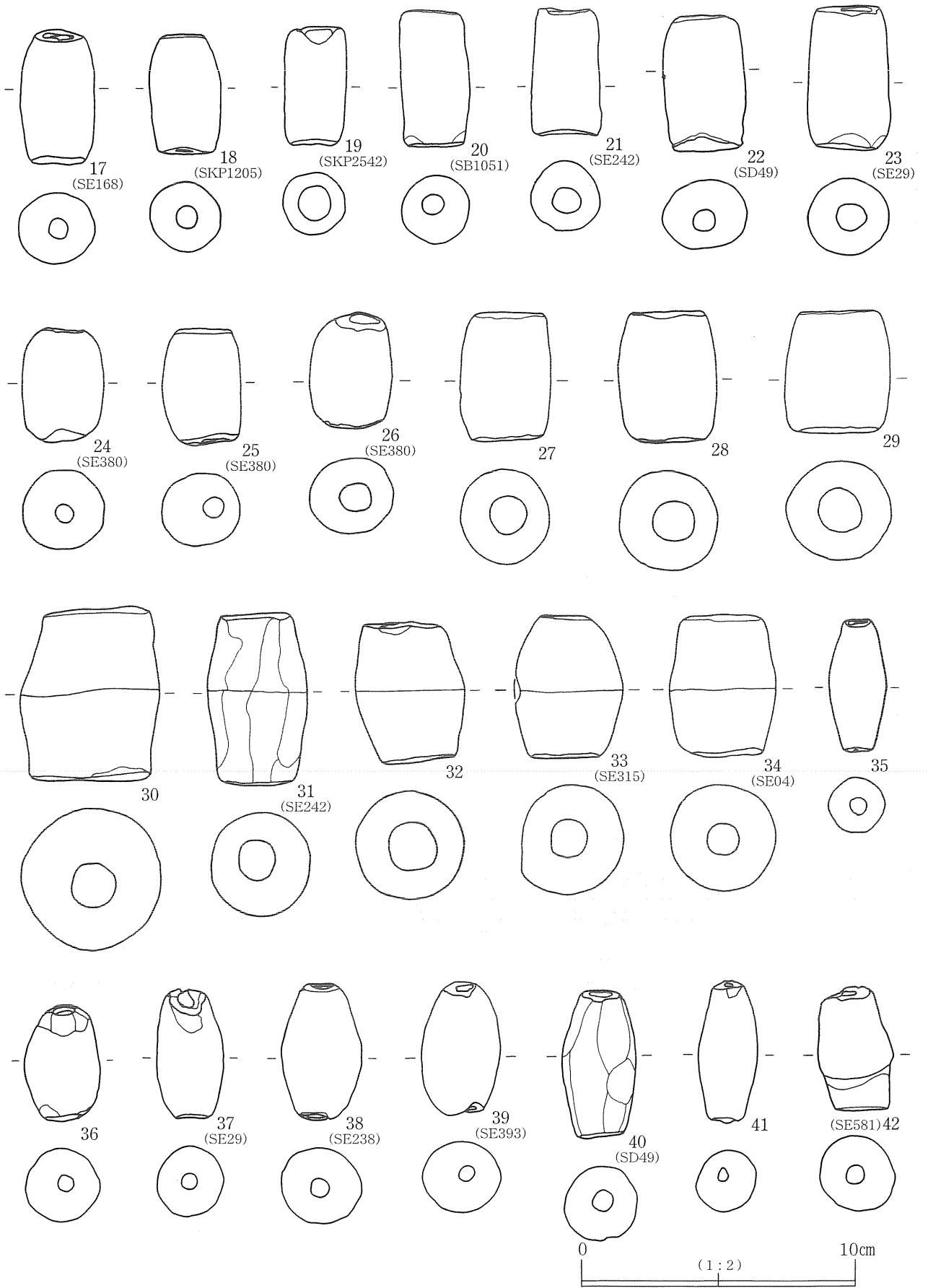
第14表 出土土錘属性表

番号	出土位置	種類	分類	長さ	最大径	重さ	備考
1	MO86	土錘	A1	66	53	168.4	
2	SD64	土錘	A1	65	55	170.4	
3	SD96	土錘	A1	51	58	165	
4	SE22	土錘	A1	59	46	128.1	
5	SE582	土錘	A1	69	48	118.8	
6	SE583	土錘	A1	53	45	108.6	
7	SE569	土錘	A1	51	54	101.8	
8	SE104	土錘	A1	50	43	81.5	
9	SD49	土錘	A1	63	38	69.4	
10	SE322	土錘	A1	77	32	72.3	
11	SE322	土錘	A1	68	30	52.7	
12	SK342	土錘	A1	59	38	76.1	
13	SKP228	土錘	A1	59	23	26.3	MM62
14	SB563	土錘	A1	63	25	31	北西隅柱
15	SD706	土錘	A1	52	21	23.1	
16	SD706	土錘	A1	48	27	34.3	撚縄残存
17	SE168	土錘	A1	49	28	31.2	
18	SKP1205	土錘	A1	43	25	26.5	MS63
19	SKP2542	土錘	A1	43	25	15.4	MB72
20	SB1051	土錘	A1	50	24	33.8	南西隅柱
21	SE242	土錘	A1	48	25	33.7	
22	SD49	土錘	A1	50	30	41.1	
23	SE29	土錘	A1	53	30	48.2	
24	SE380	土錘	A1	41	30	32.8	曲物内
25	SE380	土錘	A1	43	30	30.3	曲物内
26	SE380	土錘	A1	42	31	30.9	曲物内
27	NI79	陶錘	A1	48	35	(44.4)	
28	NI79	陶錘	A1	48	38	60.2	
29	表採	陶錘	A1	45	38	57.6	
30	NF54	土錘	A2	69	50	171	
31	SE242	土錘	A2	64	38	76.2	
32	ME80	土錘	A2	52	40	67.6	
33	SE315	土錘	A2	54	40	62.4	
34	SE04	土錘	A2	53	39	76.9	
35	MH79	土錘	A2	48	22	14.9	
36	MF75	土錘	A2	43	28	22.7	
37	SE29	土錘	A2	46	25	(21.6)	
38	SE238	土錘	A2	50	30	27.1	曲物内
39	SE393	土錘	A2	49	29	30	
40	SD49	土錘	A2	54	27	25.7	
41	MG79	土錘	A2	52	22	22.3	
42	SE581	土錘	A2	44	28	23.1	
43	28トレ	土錘	B	89	13	13.5	
44	MF55	土錘	B	(70)	13	(10.7)	
45	表採	土錘	B	63	11	7.3	
46	MP65	土錘	B	(60)	10	(5.2)	
47	表採	土錘	B	61	11	7	
48	SD49	土錘	B	41	16	10.3	
49	MK45	土錘	B	54	12	6.9	
50	SE274	土錘	B	53	16	10.6	
51	SKI679	土錘	B	51	14	(7.3)	
52	表採	土錘	B	62	14	9.5	
53	表採	土錘	B	63	14	10.1	
54	SD88	土錘	B	(53)	15	(8.5)	
55	SD706	土錘	B	56	16	13.7	
56	SV273	土錘	C	50	36	55.3	
57	SE219	土錘	C	49	36	44.3	
58	SE219	土錘	C	43	39	49.2	
59	SE219	土錘	C	39	37	37	
60	SE219	土錘	C	48	37	52.6	
61	SE219	土錘	C	48	40	55.1	
62	SE219	土錘	C	43	36	43.1	
63	SE219	土錘	C	46	39	52	
64	SE219	土錘	C	40	43	55	

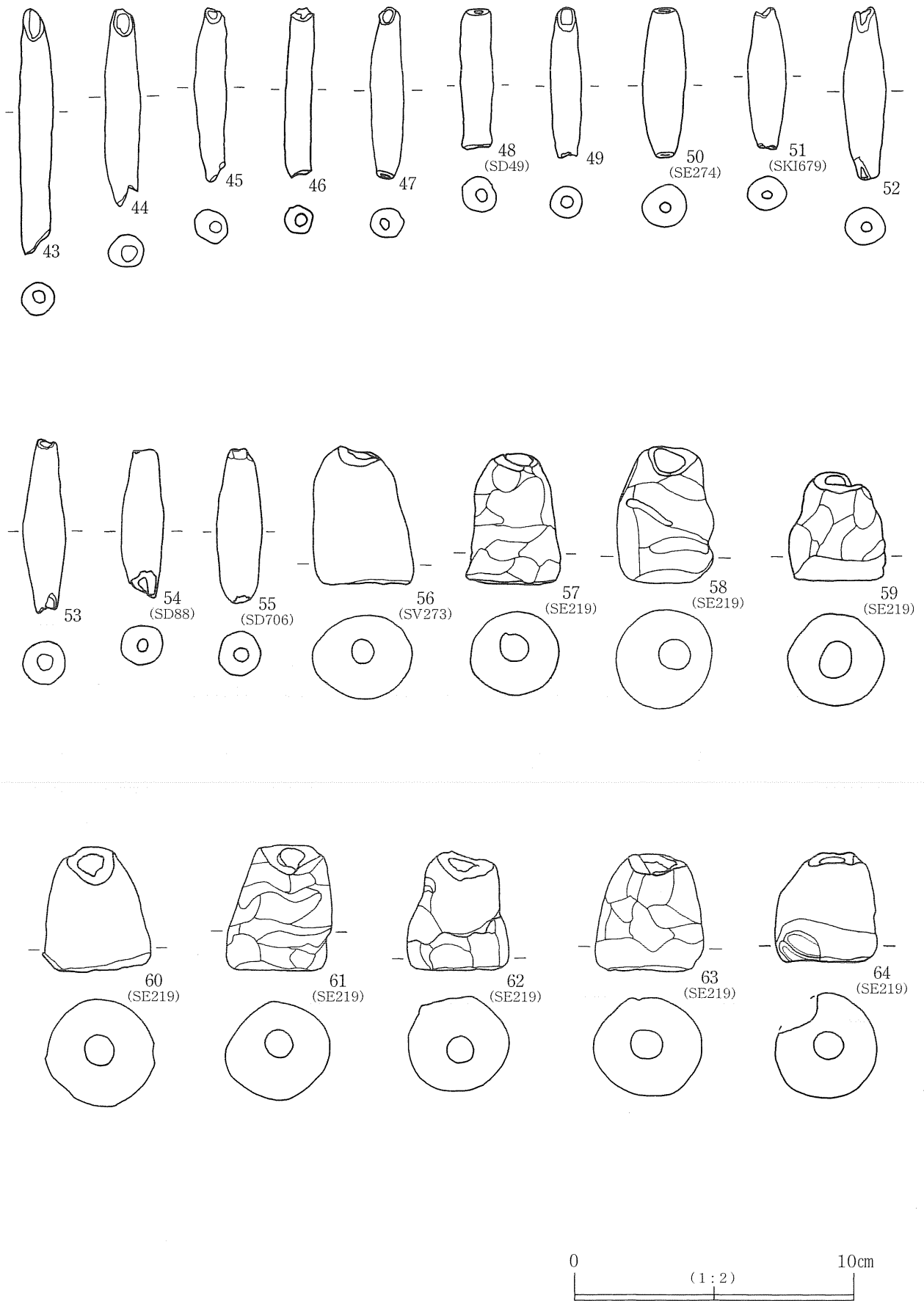
mm mm g



第334図 出土遺物 (84) 土錘 (1)

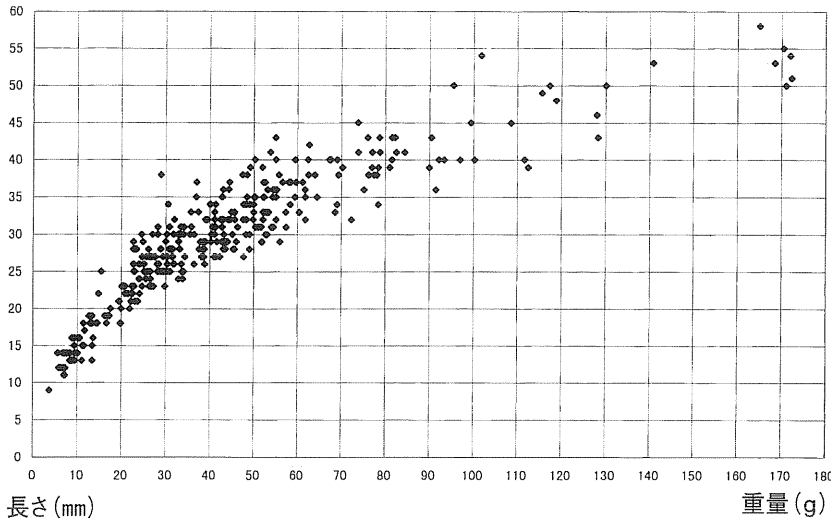


第335図 出土遺物 (85) 土錘 (2)



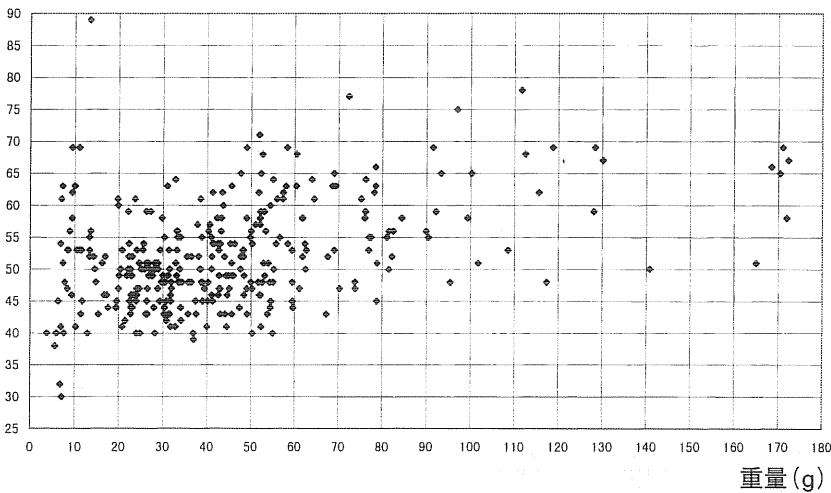
第336図 出土遺物 (86) 土錘 (3)

最大径 (mm)



土錘分布図1 最大径/重量
(母数 349個体)

長さ (mm)



土錘分布図2 最大径/重量
(母数 348個体)

6 銭貨 (第337~339図)

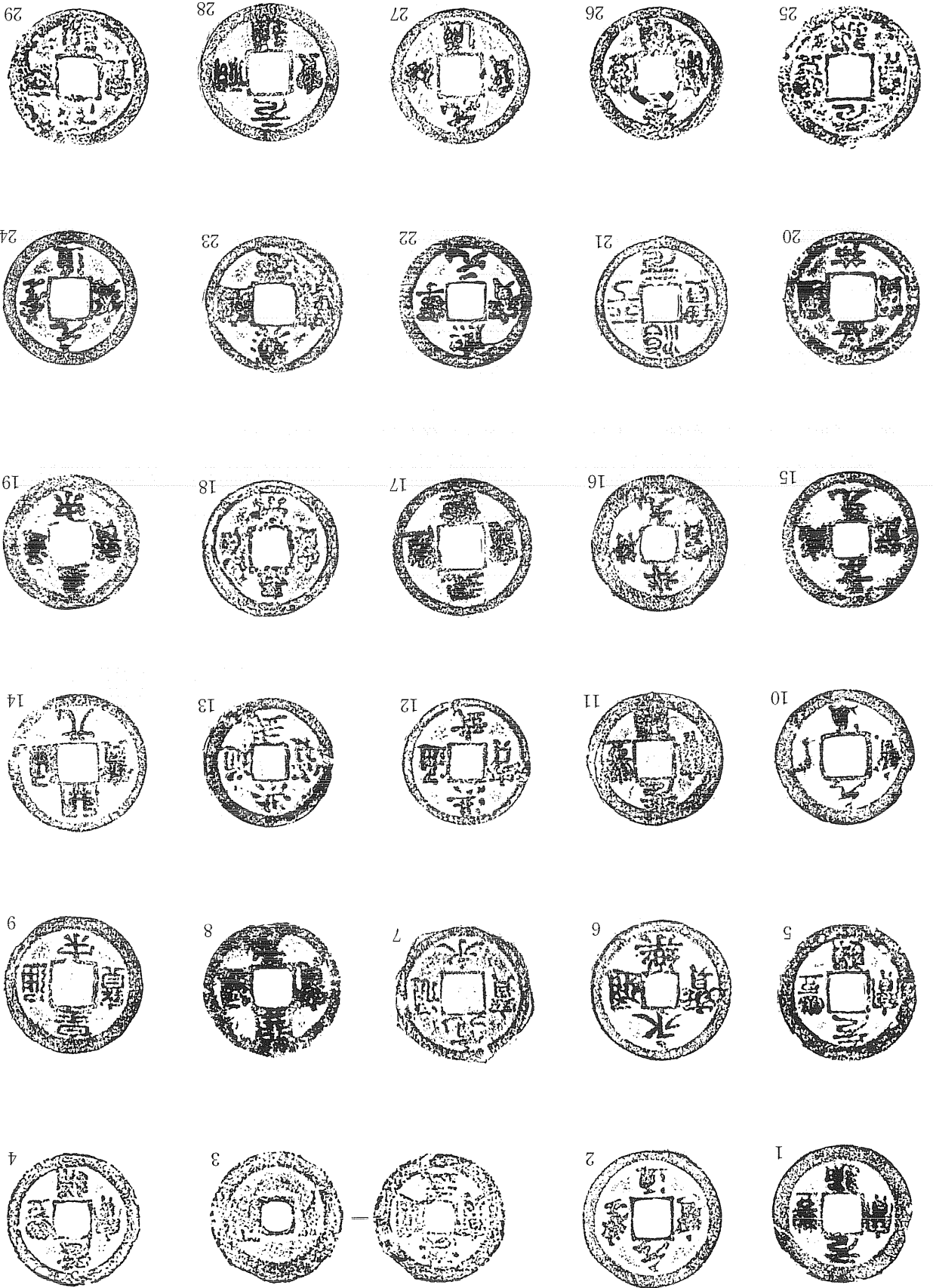
銭貨は、遺構内外より約90枚出土している。遺構内出土の銭貨は、井戸跡8基 (S E 29・32・33・154・239・319・441・491・683)、土坑3基 (S K 24・673・686)、堀跡 (S D 49・706)、竪穴状遺構1基 (S K I 191)、柱穴1基 (S K P 2273) であり、その他は旧水田跡 (S V 38) を含む遺構外から得られている。第337~339図には68枚の拓影図を載せる。なお井戸跡出土の銭貨については、第5章まとめでふれたい。銭貨種 (国名:初鑄年) と枚数は次の通りである。

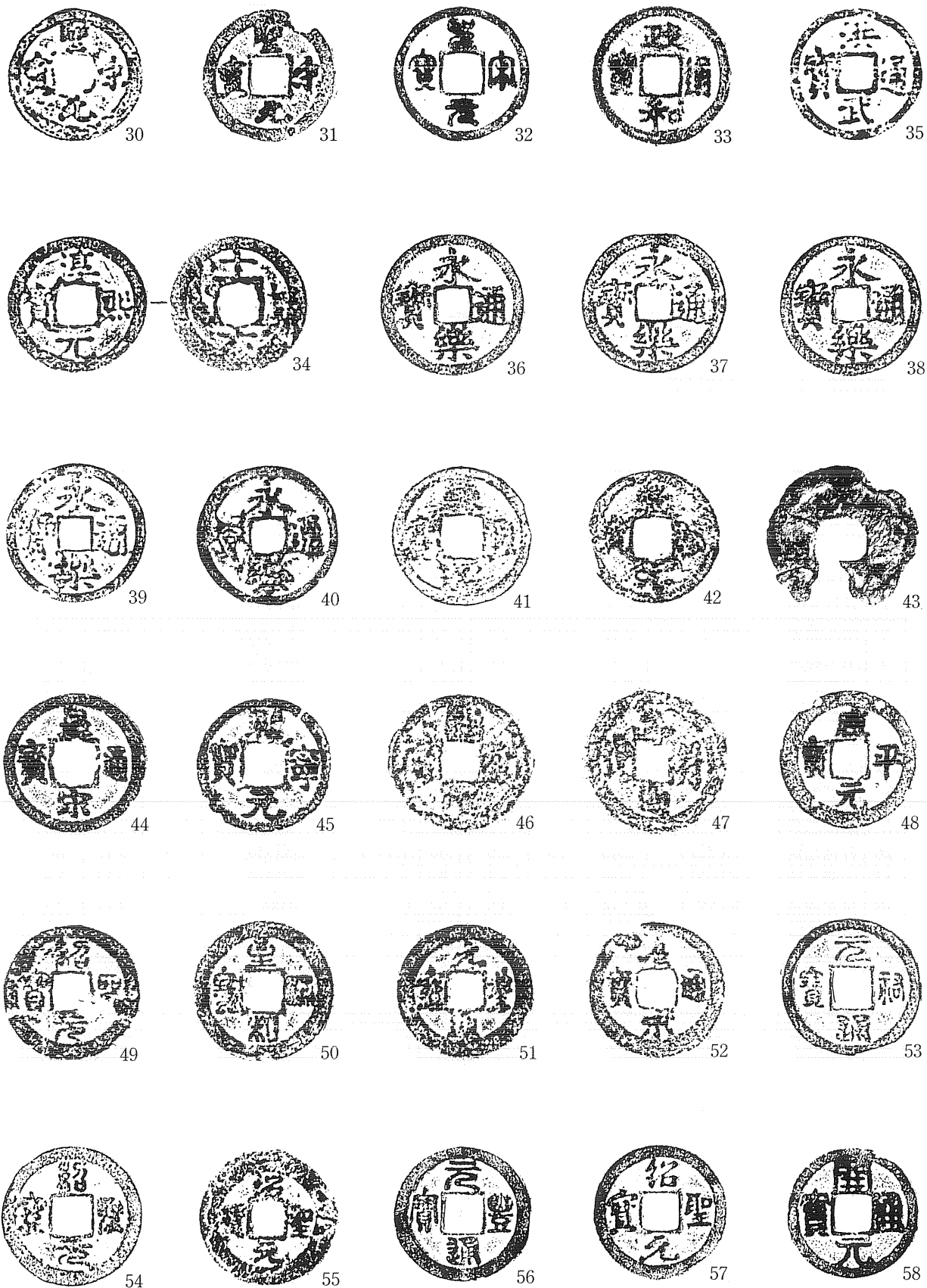
開元通寶 (唐:621) 5、淳化元寶 (北宋:990) 1、至道元寶 (北宋:995) 1、咸平元寶 (北宋:998) 1、景德元寶 (北宋:1004) 1、祥符元寶 (北宋:1008) 1、天聖元寶 (北宋:1023) 1、皇宋通寶 (北宋:1038) 6、至和通寶 (北宋:1054) 1、嘉祐通寶 (北宋:1056) 1、治平元寶 (北宋:1064) 1、熙寧元寶 (北宋:1068) 3、元豐通寶 (北宋:1078) 12、元祐通寶 (北宋:1086) 4、紹聖元寶 (北宋:1094) 4、元符通寶 (北宋:1098) 1、聖宋元寶 (北宋:1101) 3、政和通寶 (北宋:1111) 1、淳熙元寶 (南宋:1174) 1、洪武通寶 (明:1368) 4、永樂通寶 (明:1408) 6、寛永通寶 (日本:1636) 4 (その他、10枚が塊状を呈する)、口平通寶1、判読不明4。

これら銭貨の外面的観察では、明らかに本銭あるいはその可能性をもつものは、わずか数枚に過ぎず、その他は模鑄銭と見る。本銭の可能性のあるものは、政和通寶 (33)・永樂通寶 (36~38) 等であり、そのいずれもがS K P 2273とした柱穴確認面上出土の銭である。また明らかに無文銭と判断されるものは含まれていないようである。

第337図 出土遺物(87) 銭貨(1)

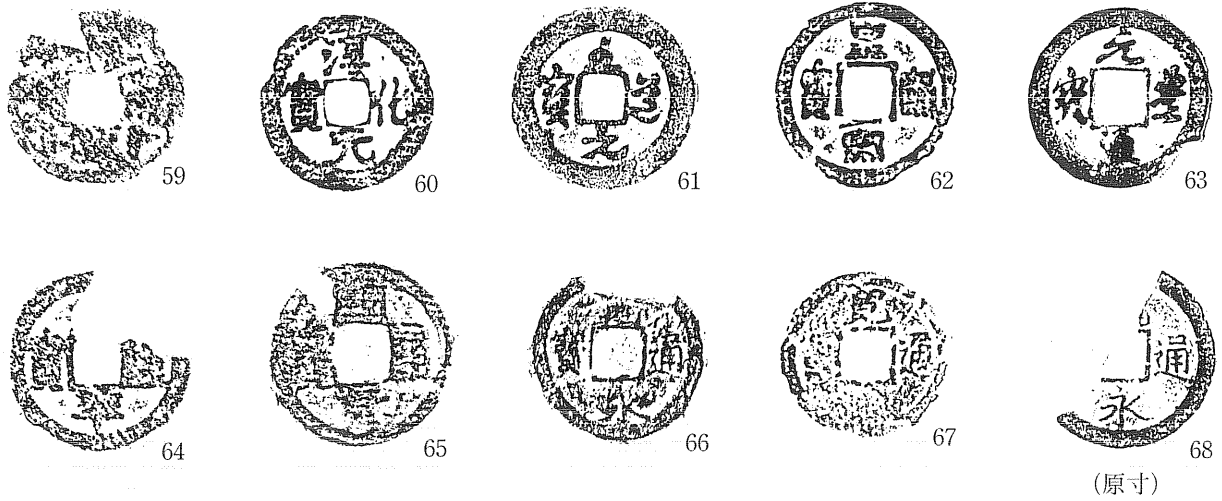
(原寸)





(原寸)

第338図 出土遺物(88) 銭貨(2)



(原寸)

第15表 出土錢貨属性表

番号	錢貨名	出土位置	外径	錢厚	量目	番号	錢貨名	出土位置	外径	錢厚	量目
1	元豊通寶	SE29~33	2.45	0.09	2.5	35	洪武通寶	SKP2273	2.35	0.14	3.4
2	元豊通寶	SE33	2.46	0.10	2.5	36	永樂通寶	SKP2273	2.51	0.12	3.6
3	洪武通寶	SE154	2.32	0.15	4.2	37	永樂通寶	SKP2273	2.53	0.14	4.3
4	元豊通寶	SE239	2.35	0.10	2.7	38	永樂通寶	SKP2273	2.49	0.13	4.0
5	元豊通寶	SE319	2.42	0.12	2.9	39	永樂通寶	SKP2273	2.49	0.13	3.3
6	永樂通寶	SE441	2.47	0.11	2.7	40	永樂通寶	SKP2273	2.50	0.11	2.6
7	判読不明	SE491	2.34	0.07	1.5	41	判読不明	SKP2273	2.46	0.12	3.7
8	開元通寶	SE683	2.42	0.09	2.8	42	判読不明	SKP2273	2.33	0.09	2.5
9	皇宋通寶	SE683	2.46	0.10	3.7	43	判読不明	SKP2273	2.52	0.11	(1.8)
10	元豊通寶	SE683	2.41	0.09	3.1	44	皇宋通寶	SKI191	2.49	0.09	2.4
11	元豊通寶	SE683	2.39	0.10	3.5	45	熙寧元寶	SKI191	2.38	0.10	2.4
12	洪武通寶	SE683	2.27	0.09	2.5	46	開元通寶	SK24	2.48	0.12	1.5
13	洪武通寶	SE683	2.27	0.15	4.0	47	元符通寶	SK24	2.54	0.16	2.4
14	開元通寶	SKP2273	2.44	0.11	3.1	48	咸平元寶	SK673	2.45	0.09	2.7
15	景德元寶	SKP2273	2.40	0.11	3.7	49	紹聖元寶	SK673	2.43	0.09	(1.4)
16	祥符元寶	SKP2273	2.45	0.10	2.9	50	至和通寶	SKI686	2.50	0.12	2.7
17	天聖元寶	SKP2273	2.46	0.11	3.6	51	元豊通寶	SKI686	2.44	0.12	3.6
18	皇宋通寶	SKP2273	2.44	0.11	3.5	52	皇宋通寶	SD49	2.45	0.11	2.9
19	皇宋通寶	SKP2273	2.41	0.07	2.1	53	元祐通寶	SD49	2.46	0.12	3.7
20	嘉祐通寶	SKP2273	2.39	0.10	3.0	54	紹聖元寶	SD49	2.47	0.09	3.0
21	治平元寶	SKP2273	2.38	0.14	3.7	55	紹聖元寶	SD49	2.44	0.15	3.5
22	熙寧元寶	SKP2273	2.35	0.11	3.3	56	元豊通寶	SD706	2.40	0.11	2.7
23	熙寧元寶	SKP2273	2.45	0.08	2.7	57	紹聖元寶	SD706	2.39	0.12	3.6
24	元豊通寶	SKP2273	2.40	0.12	3.2	58	開元通寶	NF69	2.32	0.07	2.0
25	元豊通寶	SKP2273	2.51	0.11	2.3	59	開元通寶	36トレンチ	2.39	0.10	(1.7)
26	元豊通寶	SKP2273	2.38	0.11	3.3	60	淳化元寶	MA45	2.36	0.10	2.8
27	元祐通寶	SKP2273	2.46	0.11	3.1	61	至道元寶	表採	2.46	0.10	3.3
28	元祐通寶	SKP2273	2.47	0.10	3.0	62	皇宋通寶	MF81	2.44	0.11	2.3
29	元祐通寶	SKP2273	2.47	0.11	3.2	63	元豊通寶	NF55	2.42	0.11	3.1
30	聖宋元寶	SKP2273	2.37	0.11	3.0	64	口平通寶	MP72	2.43	0.11	(1.7)
31	聖宋元寶	SKP2273	2.38	0.13	3.9	65	寬永通寶	SV38	2.44	0.10	(2.2)
32	聖宋元寶	SKP2273	2.39	0.11	2.9	66	寬永通寶	2トレンチ	2.28	0.08	(1.5)
33	政和通寶	SKP2273	2.45	0.13	3.0	67	寬永通寶	SD49	2.25	0.09	2.1
34	淳熙元寶	SKP2273	2.43	0.10	2.7	68	寬永通寶	MF50	2.50	0.11	(1.9)

(単位: cm、g)

第339図 出土遺物 (89) 錢貨 (3)

第4章 自然科学的分析

第1節 年輪年代測定

洲崎遺跡で出土し、取り上げた木製品・各種部材のうち、遺存状態の良いものについては、年輪年代測定を実施した。これは奈良国立文化財研究所、光谷拓実氏に分析を依頼したものである。測定材は総数51点であり、40点から年代数値が得られている。測定結果は以下のとおりである。測定材は井戸側に用いられた縦板、水溜に使用の曲物、木製品（折敷）である。

第16表 年輪年代測定結果

遺構番号	出土材	挿図	辺材幅	年輪数	年輪年代	備考(同材関係)	遺構番号	出土材	挿図	辺材幅	年輪数	年輪年代	備考(同材関係)
SE12	曲物	41		125	1138	同材	SE219	曲物	75	B=0.5	205	1230	
SE12	曲物	41	B=3.5	223	1275		SE220	曲物	141	B=3.3	229	—	
SE12	縦板	40	B=3	321	1296		SE227	曲物	142	B=5	245	1279	
SE12	縦板 東面	40	A=4	139	—		SE227	曲物	142		119	—	
SE16	縦板 北面	42	A=5.6	119	—		SE237	縦板 北面	80		176	1288	
SE16	縦板 南面	42	B=3.3	103	—		SE237	縦板 北面	80	B=4	130	1289	同材
SE23	縦板 南面	47	A=3.6	190	—		SE237	縦板 西面左	80	B=2.3?	176	1304	
SE26	曲物	45		101	1175	同材	SE237	縦板 北面左	80	A=5.2	191	1289	同材
SE26	曲物	45		132	1218		SE248	曲物	83	B=5	148	1300	
SE27	曲物	161		189	1203	同材	SE248	曲物	83	B=1.3	109	1243	
SE27	曲物	161		114	1136		SE257	縦板 東面	84	A=4.2	100	—	
SE31	曲物	50	B=4	126	1300		SE276	曲物	86		128	1133	
SE31	曲物	50	B=4	183	1303		SE291	縦板(組板)	88		150	1287	
SE31	曲物	50	B=4.1	111	—		SE297	曲物	89	B=3.5	259	1317	
SE116	曲物	133		145	1328		SE393	曲物	149	B=4	112	1301	同材
SE127	縦板	58		145	1171		SE393	曲物	149	B=3	125	1295	
SE127	縦板	58	B=4.2	194	1200	同材	SE417	曲物	101	B=3	235	1246	同材
SE127	縦板	58		178	1201		SE417	曲物	101	B=3.3	261	1251	
SE127	縦板	58	B=4.2	172	1153		SE417	縦板	100	A=5.2	104	1285	
SE161	曲物	63		128	—		SE422	縦板	103	A=5.5	95	1324	
SE189	折敷	283	B=3.2	146	1284		SE519	折敷	111	B=4.6	88	—	
SE189	曲物	70		119	—		SE583	曲物	122	B=3	153	1282	
SE205	曲物	72	B=0.7	138	1102		SE587	曲物	23		198	1286	
SE205	曲物	72	B=0.7	173	1248		SE591	曲物	38	B=2.1	197	1236	同材
SE208	曲物	69	A=5.2	155	1302	同材	SE591	曲物	38	B=2.3?	198	1236	
SE208	曲物	69	A=5.1	98	1302								

(cm)

試料の形状タイプ

A：樹皮または最終形成年輪の一部が残存しているもので、その年輪の形成された年がその伐採年にあたる。

B：一部に辺材部を留めているもの。残存している年輪最後の形成年は、その原木の伐採年に近い。

C：辺材部が全て喪失し、心材部のみからなるもの。試料に残存する最外年輪のさらに外に何年分の年輪があったのか直接確定することはできない。

光谷拓実『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』奈良国立文化財研究所 1990(平成2)年

第2節 樹種・種実・葉・昆虫・貝の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

洲崎遺跡では、中世の竪穴状遺構、井戸跡、堀や溝跡などの遺構が検出されている。これらの遺構からは、木材、種実、葉などの植物遺体、昆虫、貝などが出土している。

本報告では、これらの植物遺体、昆虫、貝の同定を行い、周辺の古環境や人間活動に関する資料を得る。

1. 木材の樹種同定

(1) 試料

試料は、SKI244竪穴状遺構およびSE33井戸跡から出土した杭材などの木材5点（試料番号1～5）である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。広葉樹5種類（クマシデ属イヌシデ節・クリ・マンサク・サクラ属・エゴノキ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クマシデ属イヌシデ節 (Carpinus subgen. Euarpinus) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～3細胞幅、1～40細胞高のもの集合放射組織とがある。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～7列、孔圏外に向かって緩やかに管径を減じたのち、火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性で、基本的に単列であるが、まれに2列、1～15細胞高。

・マンサク (Hamamelis japonica) マンサク科マンサク属

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在する。道管の穿孔は、多数のバーを持つ階段穿孔となる。放射組織は異性II型、ほぼ単列で時に2列、1～20細胞高で時に上下に連結する。

・サクラ属 (Prunus) バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

散孔材で、道管は単独または2～4個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階

表1 樹種同定結果

番号	遺構名	用途など	樹種
1	SKI244 (堅穴状遺構)	坑材?	クリ
2	SKI244 (堅穴状遺構)	樹皮付き	マンサク
3	SKI244 (堅穴状遺構)	樹皮付き	クマシデ属シヌシデ節
4	SKI244 (堅穴状遺構)		エゴノキ属
5	SE33 (井戸跡)	樹皮付きの枝	サクラ属

段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

2. 種実・葉の同定

(1) 試料

試料は、SD49堀跡から出土した種実(試料番号6)および葉(試料番号8)、SD666から出土した種実(試料番号7)である。いずれも複数の種実や葉が入っている。

(2) 方法

種実は、軽く洗浄したあと、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定・計数する。葉は、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して泥化させたあと、試料を水浴させながら、表面の葉を注意深く剥がす。この動作を繰り返すことによって、互いに癒着した葉を剥がしていく。葉は水を取り替えながら十分に水浴させてアルカリ分を取り除いたあと、同定可能な葉をすくって濾紙に張り付け、双眼実体顕微鏡等で同定・観察を行う。

同定された種実・葉はそれぞれ種類毎に整理する。種実はホウ酸・ホウ砂水溶液を満した瓶中に保管する。葉は濾紙をアクリル板で挟んで固定し、蒸発を防ぐためホウ酸・ホウ砂水溶液を少量加えポリ袋で密閉した。

(3) 結果

同定結果を表2に示す。以下に検出された種実ならびに葉の形態的特徴を記す。

・ヤナギ属 (*Salix* sp.)

葉の破片が検出された。葉縁は細鋸歯。先端は尖る。破片から推測するに細長い葉であることが推測される。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核が検出された。褐灰色で大きさは3cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。

・クマシデ属 (*Carpinus* sp.) カバノキ科

葉の破片が検出された。推定される大きさは長さ10cm程度。先端はややとがる。側脈は比較的密に分布する。葉縁は、鋭い重鋸歯がある。

・ブナ (*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属

葉の破片と核斗が検出された。葉は、多くの枚数が得られているので、別個体ではあるが、ほぼ全体像を網羅している。推定される大きさは10cm以上。鋭頭、基部は広い楔型。縁は低波状鋸歯。側脈は10対程度。主脈は側脈の分岐部分でやや屈曲する。

表2 種実・葉の同定結果

番号	遺構	出土位置	種類	同定結果	個数
6	SD49 (堀跡)	最下層	種実	オニグルミ	2
				ブナ	3
				トチノキ (種子)	5
				トチノキ (果実)	6
				エゴノキ属	2
7	SD666 (溝跡)		種実	キカラスウリ	68
				モモ	2
8	SD49 (堀跡)	最下層	葉	ヤナギ属	1
				クマシデ属	3
				ブナ	7
				コナラ	1
				イタヤカエデ属	2
				カエデ属	1

核斗は、大きさ2cm程度。先は4裂する。表面は苞が互いに癒着し、疣状の突起のように見える。

・コナラ(*Quercus serrata* Murray)
ブナ科コナラ属

葉の破片が検出された。検出された部分は基部の部分で約半分ほどが残存している。基部は楔形で、縁は鋭鋸歯縁。推定される葉の大きさは8cm程度。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2.5cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・イタヤカエデ類 (*Acer mono* Maxim.) カエデ科カエデ属

葉の破片が検出された。大きさは6cm程度。3裂までは確認されるが、破損しているためこれ以上あるかどうかは不明。裂片は全縁で鋭尖頭。

・カエデ属 (*Acer* sp.) カエデ科

葉の破片が検出された。大きさは4cm程度。基部から掌状の脈が広がる。試料では4本確認され、それ以上あると思われるが破片のため不明。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.) トチノキ科トチノキ属

種子の破片が検出された。大きさは2cm程度。種皮は薄く堅い。表面には黒く艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。果実は幼果で、楕円形。大きさ1.5cm程度。黒褐色で3裂するための筋がある。肉厚で柔らかく、ざらつく。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・キカラスウリ (*Trichosanthes Kirilowii* Maxim. var. *japoica* (Miq.) Kitamura)

ウリ科カラスウリ属

種子が検出された。楕円形で扁平。大きさは1cm程度。縁はやや明瞭。一端に大きなへそがある。種皮は厚くて弾力があり、ざらつく。

3. 昆虫の同定

(1) 試料

試料は、SD49・706堀跡から出土した2点(試料番号9,10)である。このうち、試料番号10は、8本のサンプル瓶(A~H)に分けられている。

(2) 方法

肉眼および実体顕微鏡を用いて、試料の形態的特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

同定結果および特徴などを以下に記す。

・試料番号9 SD706 (堀跡)

ルリゴミムシダマシ? (?*Encyalesthus violaceipennis* Marseul) ゴミムシモドキ科

右上翅が検出された。密な小点刻列を含む条溝を備え、黒色で光沢があり、紫色の金属光沢を帯びている。この特徴から、本種の可能性があるが、断定には至らなかった。

・試料番号10 SD49 (堀跡) 最下層

試料は全てガムシに同定された。

ガムシ (*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky) ガムシ科

体のかかなりの部位が揃っている。黒色で、翅長は平らな状態で31.7mm。胸板には棘状突起があり、第1腹節を越える。棘状突起のある後胸腹板が3個確認できることから、少なくとも3個体含まれていると考えられる。

各サンプル瓶の部位・個数を以下に示す。

A : 左右上翅4個 (2頭分)

B : 後翅の前縁部 (左右2個)

C : 前胸板

D : 中胸腹板+後胸腹板 (2個)

E : 後胸腹板 (1個)、第5腹板

F : 肢の基部 (?前1個、中2個、後4個)、腿節 (前2個、中3個、後4個)

脛節 (9個)

G : 腹板 (6個、うち第1腹板2個)

H : 小楯板 (1個)、後翅の断片 (1個)、基部 (2個)、脛節 (2個)

4. 貝の同定

金子浩昌 (早稲田大学)

(1) 試料

試料は、井戸跡 (SE311) から出土した1点 (試料番号11) で、34個の貝殻が入っていた。

(2) 方法

肉眼およびルーペを用いて、貝殻の形態を観察し、その特徴から種類を同定する。

(3) 結果

貝殻は、全てシジミガイ科のヤマトシジミ (*Corbicula japonica* PRIME) に同定された。貝殻は左が12個、右が20個、左右不明が2個。左の殻長は、最大2.9cm、最小1.6cmで、2.9cm程度のものが4個、1.6cm前後のものが8個。右の殻長は、最大2.5cm、最小1.7cmで、2.5cm程度のものが9個、1.7cm前後のものが11個であった。

5. 考察

(1) 周辺の古環境について

木材では、5種類の落葉広葉樹（イヌシデ節・クリ・マンサク・サクラ属・エゴノキ属）が認められた。また、種実遺体や葉では、10種類の落葉広葉樹（オニグルミ・ヤナギ属・クマシデ属・ブナ・コナラ・モモ・イタヤカエデ類・カエデ類・トチノキ・エゴノキ属）と、草本類1種類（キカラスウリ）が認められた。このうち、エゴノキ属は材と種子、ブナは葉と核斗にそれぞれ認められた。

確認された種類のうち、モモは縄文時代前期頃に渡来した栽培種であり（粉川，1988）、本遺跡周辺での栽培・利用に由来すると考えられる。その他の落葉広葉樹は、主として溪谷などに生育する種類が多く、周辺にこれらの落葉広葉樹が生育する植生が見られたことが推定される。この中には、ブナなど冷温帯落葉樹林の主要構成要素で、本地域周辺の潜在自然植生（宮脇，1987）と一致する種類も多い。このことから、基本的には現在本地域の山地などで見られる植生と同様の植生が見られたことが推定される。また、昆虫同定の結果から、こうした森林内の倒木や朽木にはルリゴミムシが生育していたことが指摘できる。

一方、種子で多く見られたキカラスウリは、人里などによくみられる蔓性草本であり、本遺跡周辺に生育していたことが考えられる。まとめて検出されているところから、果実が埋まり、果実が分解して種子が残った可能性がある。また、昆虫同定では、堀の最下層から水生甲虫のガムシが少なくとも3個体出土している。このことから、周辺の池沼や堀・溝などの水域にガムシが生育していたことが推定される。

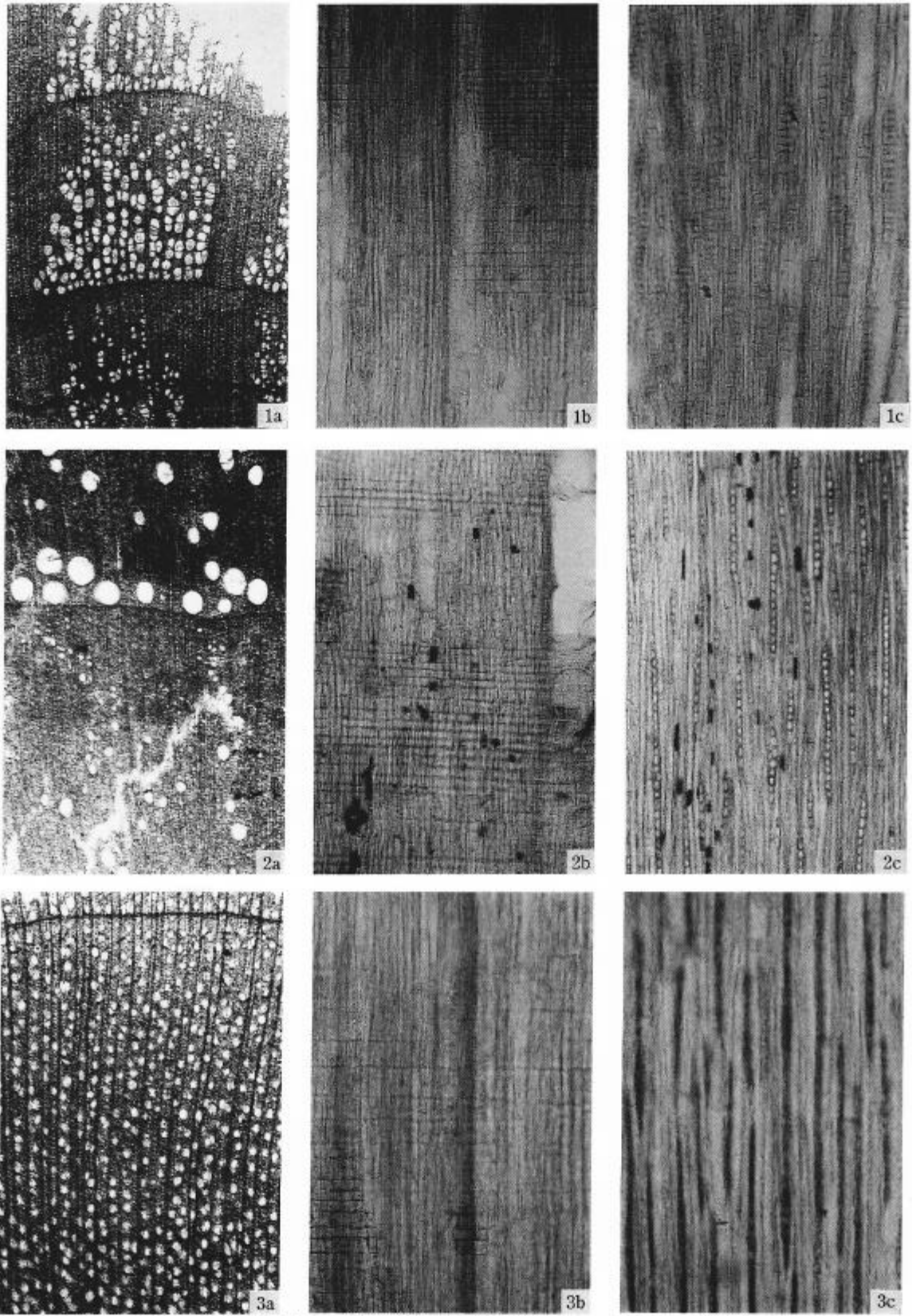
(2) 井戸から出土した貝について

井戸から出土した貝殻は、全てヤマトシジミであった。井戸跡から出土していることから、食後の貝殻が投棄された等の可能性が考えられる。右の貝殻が20個あることから、少なくとも20個体の貝殻が井戸跡内に残存していたことが推定される。ヤマトシジミは淡水生の貝であることから、周辺の河川などに生育していたものを食糧として採集していたことが推定される。

引用文献

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．金関 恕・佐原 眞編「弥生文化の研究2 生業」，p.112-115，雄山閣．

宮脇 昭編（1987）日本植生誌 東北．605p.，至文堂．

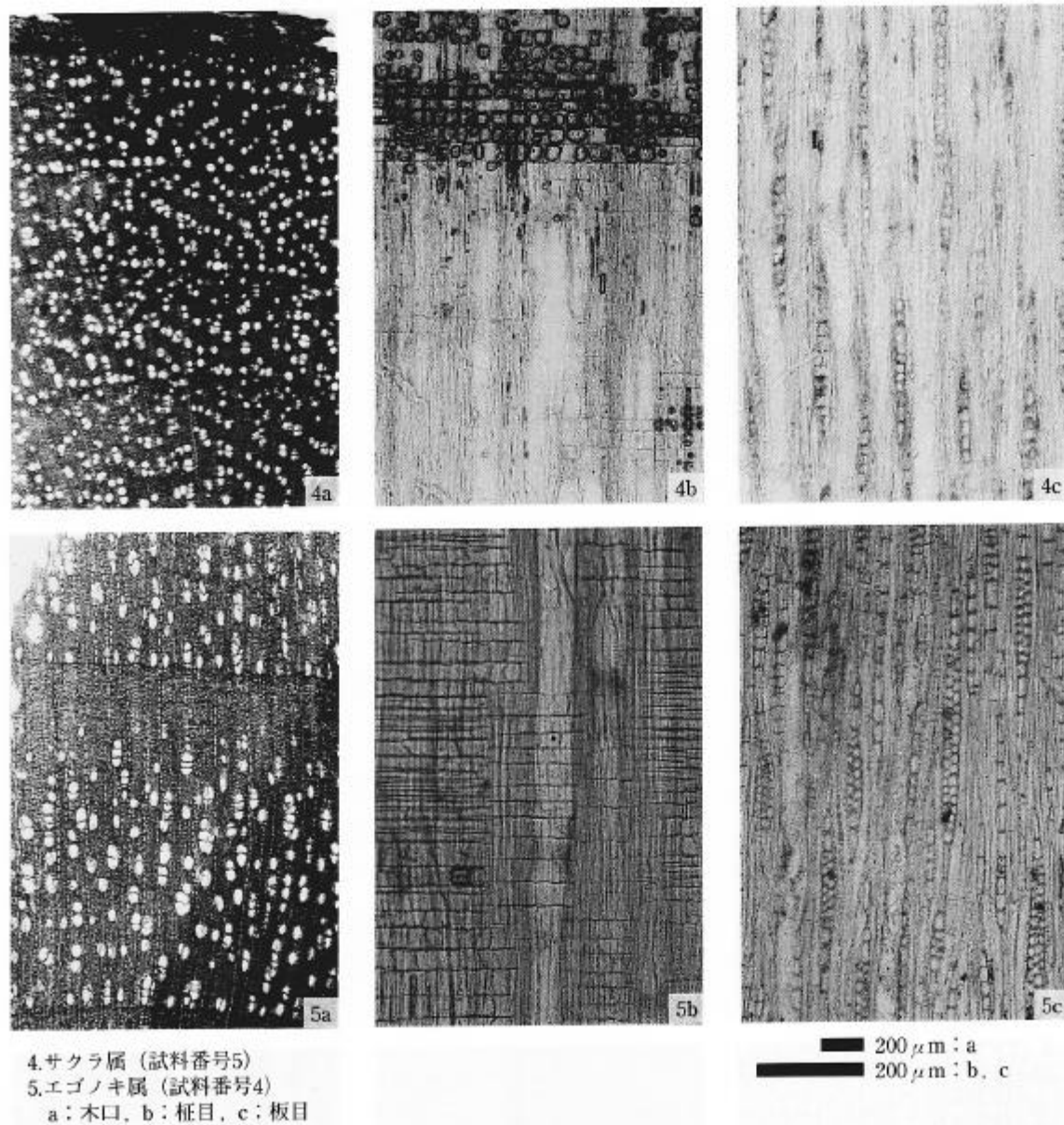


1.クマシデ属イヌシデ節 (試料番号3)
2.クリ (試料番号1)

3.マンサク (試料番号2)
a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第340図 自然科学的分析 (1) 木材 (1)

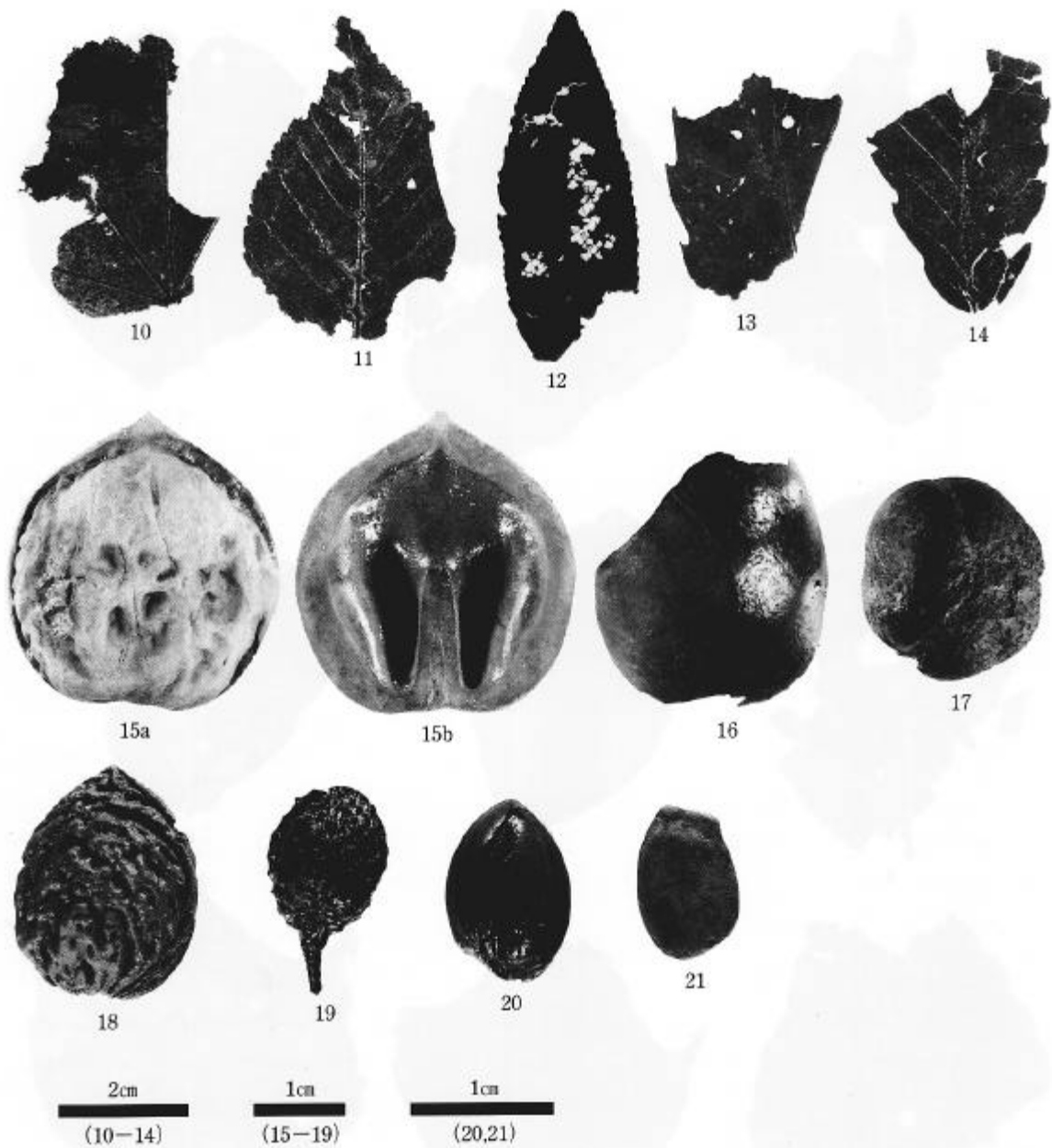


第341図 自然科学的分析(2) 木材(2)



- | | | |
|--------------|-------------------|-------------------|
| 1.ブナ (試料番号8) | 2.ブナ (試料番号8) | 3.ブナ (試料番号8) |
| 4.ブナ (試料番号8) | 5.ブナ (試料番号8) | 6.ブナ (試料番号8) |
| 7.ブナ (試料番号8) | 8.イタヤカエデ類 (試料番号8) | 9.イタヤカエデ類 (試料番号8) |

第342図 自然科学的分析 (3) 種実遺体・葉 (1)



10.カエデ属 (試料番号8)
 13.コナラ (試料番号8)
 16.トチノキ (試料番号6)
 19.ブナ (試料番号6)

11.クマシデ属 (試料番号8)
 14.コナラ (試料番号8)
 17.トチノキ (試料番号6)
 20.エゴノキ属 (試料番号6)

12.ヤナギ属 (試料番号8)
 15.オニグルミ (試料番号6)
 18.モモ (試料番号7)
 21.キカラスウリ (試料番号6)

第343図 自然科学的分析(4) 種実遺体・葉(2)

第5章 まとめ

洲崎遺跡は、冒頭に紹介した菅江真澄の記録を端緒として「寺院跡」と周知されるに至った遺跡である。発掘調査の結果、寺院跡を裏付ける明確な資料(特に遺構)は得られなかった。しかし、銅製の仏具である六器や木製品のなかにも仏教・密教に関連するのではないかと見ることのできる遺物(呪術具等)、さらには墨書板絵「人魚供養札」に描かれた僧侶は、状況としては有力な物証を確認したとも言えよう。一方でこれらの事象を包括し、洲崎遺跡の位置づけを解く鍵は、調査区最東端部で検出した長さ70m程の堀跡(SD49)に隠されているに違いない。SD49の精査を契機として、洲崎遺跡は、中世の一般的な集落(例えば農・漁村集落等か)の枠組みを大きく逸脱する「場」であったことが、次第に明らかになりつつある。

本章では今まで述べてきた遺構・遺物に関する事項のうち、遺跡の位置づけをいくらかでも明確にすべく、堀・溝・道路跡による区画施設の整理・分析を筆頭に、遺構では井戸跡、出土遺物では陶磁器と木製品について大きく3項目をたて、まとめていきたい。

1 区画施設

(1) 東端の堀と西端の堀

調査区最東端で検出したSD49は、遺跡・本集落の東端を画する堀跡である。これを集落の東を区画する施設と予測し得たのは、本調査前年の範囲確認調査の際、井川の旧河川跡とされる箇所(調査区の最西端)をボーリング探査で確認していたことが出発点となっている。旧河川跡は現況では埋め立てられ平坦な水田と化しているが、井川町税務課が平成11年に作成した最新の地積集成図(第344図上)にも長さ約190m、幅30~35mの溝状の筆界が、整然と配されている周囲の水田区画と方向を異にして図示(溜池跡と表記)されている。探査時には「旧河川が本当に存在していたのか」という周辺旧地形の把握という観点で実施したものであり、当時は疑いもなく自然地形(河跡湖)と考えていた。

ところが、精査したSD49堀跡の長軸線方向(N-17°-E)は、その幅は異なるもの旧河川としていたものと全く同一であることが確認された。さらに両者の間隔は約220mであり、2町と区切りのよい数値となる。改めて明治年間の絵図(第344図下、第345図)を見ても、蛇行していた井川ではあるが、旧河川とした辺りまでは及んでないことも判明した。これらのことから、旧河川は実は人工的な堀跡ではないか、そして位置からすれば集落の西を画する堀であったと見ることはできないかと考えるに至ったのである。

では南・北端にも堀が巡り、方2町の区画となるのであろうか。本調査後半時には、このことも念頭においていたが、北端は現井川河川敷まで調査して堀跡らしき落ち込みは確認できなかった。仮にそれ以北に堀が存在していたとしても、八郎潟干拓に伴う河川改修の際に破壊されたのではないかと推定した。一方の南端については、調査区南限までには東西方向の堀跡は検出されず、それ以南については、西端部と同様にボーリング探査を実施した。その結果、堀跡と思われる落ち込みは確認できなかった。仮にそれ以北に堀が存在していたとしても、八郎潟干拓に伴う河川改修の際に破壊されたのではないかと推定した。一方の南端については、調査区南限までには東西方向の堀跡は検出されず、

それ以南については、西端部と同様にボーリング探査を実施した。その結果、堀跡と思われる落ち込みを見つけることはできなかった。このことは南側に堀が存在しなかったか、あるいは現在の調査区南端を東西に走る農道直下にあるからであろう。実際、調査区中央部で東西に走る農道直下にも中世の溝跡が同一方向で認められた（SD666等、第346図下参照）ことから、可能性はないわけではないが、野外調査ではこれが限界であった。ただこのボーリング探査により、少なくとも東端の堀SD49はそのまま南側に延びているものではないことは確かのようなのである。

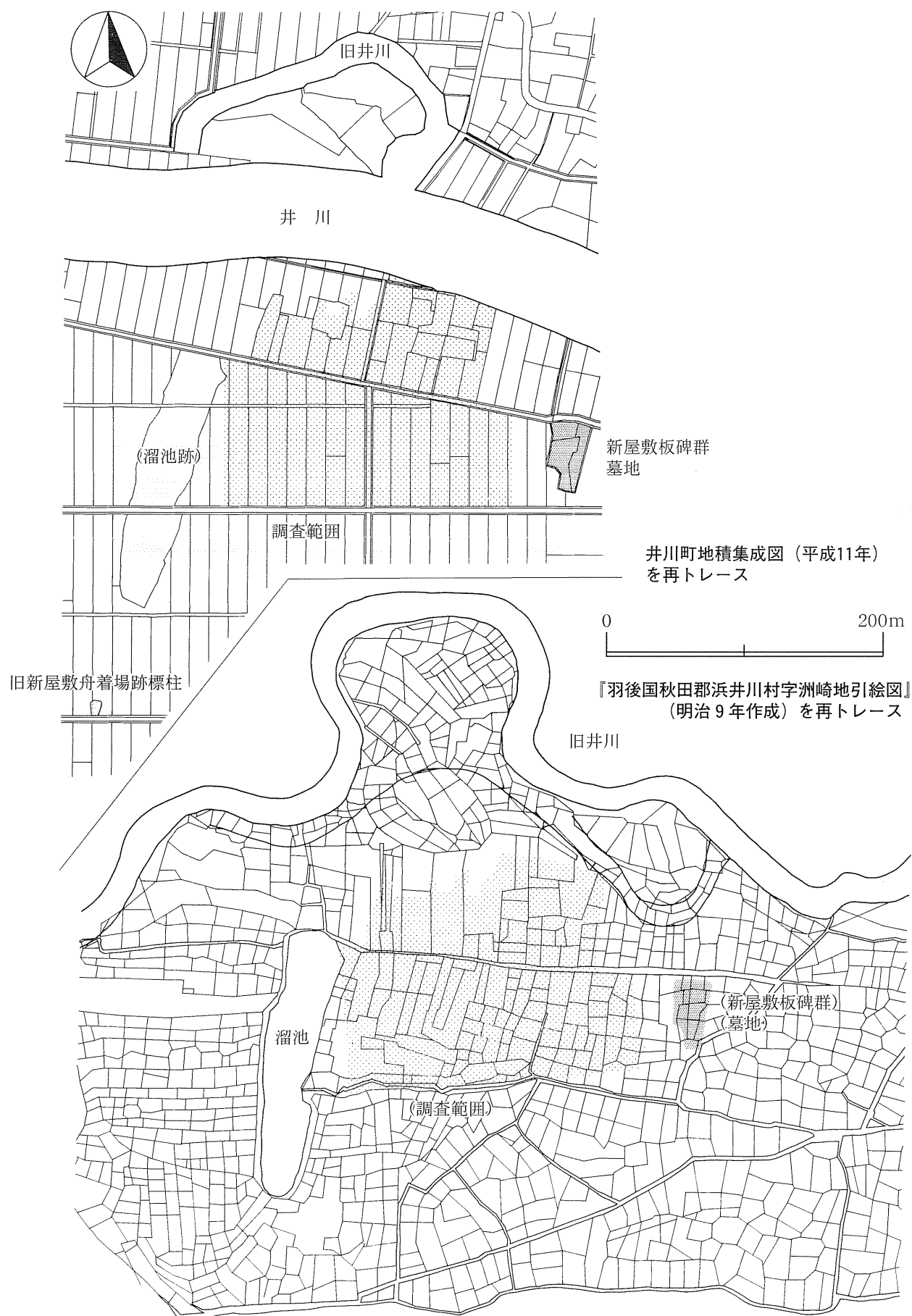
（2）方2町で堀が圍繞

室内整理の段階に入り、遺跡周辺の資料を収集している時に、石川理紀之助の絵図と出会った。『下井川適産調－浜井川部落絵図六－』（第345図：明治34年作成、調査は明治30年7月）である。農聖と称えられる石川翁が行った最大の興村事業である適産調は、基本作業として土壌・土質調査を実施している。その調査結果に基づき、土質区分（同図下の点線が土質区分境）毎に色分けしたものが、『適産調』の絵図なのである。洲崎の地は石川翁の記述に従うと、「赤色礫質砂土」（同図下の洲崎口・苗代堰ハの網点範囲：調査区と重なる部分）が優越する。しかし一箇所だけ、土質の異なる範囲（同洲崎ハ）が東西方向・溝状に記されている。ここの土質註記は、「淡黒色壤質埴土又ハ埴土地深し下層砂土青色」とあり、砂礫の表記はない。その形状と土質は、まさにソイルマーク（土壌痕跡）を示すものであり、集落北端の堀跡であった可能性がでてきた。

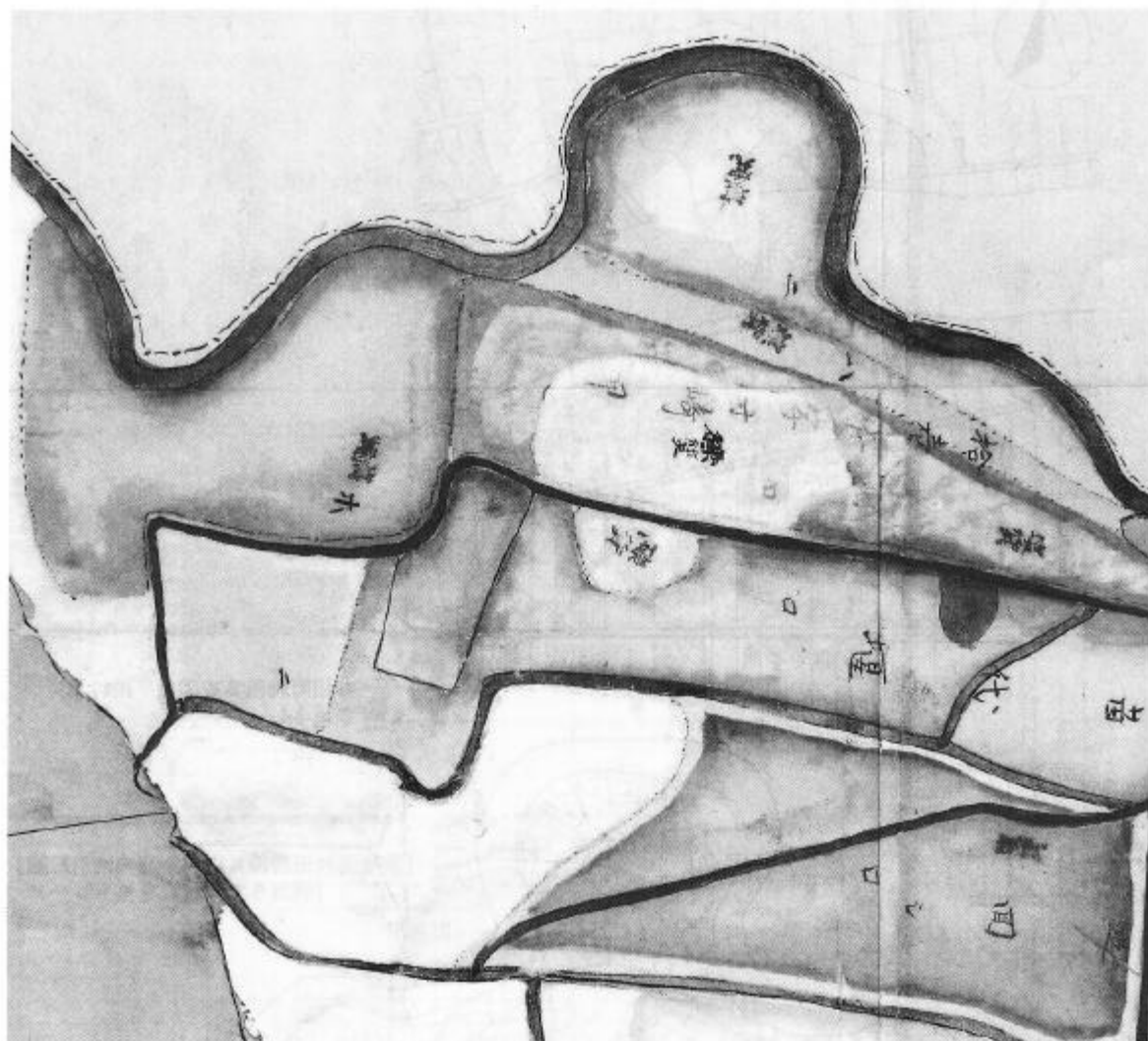
そこで現況の地形図・地積図（第7図・第344図上）に石川翁の絵図（洲崎ハの範囲と溜池・堰部分）及び明治9年作成の『羽後国秋田郡浜井川村字洲崎地引絵図』（第344図下）にある溜池・地境等を合成した図（第346図上）を作成した。縮尺の統一は、各図に共通する溜池と墓地の位置・距離を基準とし調製した。これに前述の東・西端の堀跡間の距離である220m（約2町）を四方とする枠を作成し、図上に重ねると、東・西端堀跡と北側の土質区分界とがぴったりと合うことが判明した（第346図下）。このことは「淡黒色壤質埴土」が、北端堀跡の堆積土層註記でもあったことを示す。さらに多少のブレはあるが、南端は石川翁の絵図にある“堰”とほぼ合致し、この堰が南端の堀であったとも推測できよう。

加えて、合成した図から次の点も読みとることが可能となる。①：北端の堀は井川の河川改修で消失した。②：この堀の両端は旧井川と両端と接続していた可能性がある。③：調査で検出した東端の堀跡SD49は、絵図には登場せず、四方の堀の中で最も早く埋没した。④：西端の堀を南に延長したライン上に旧新屋敷舟着場跡（標柱と石塔のみ残存：第5図下参照）が位置する。図上では同堀は南端で西に折れ八郎潟に至るが、舟着場跡方向に真っ直ぐ延びていた可能性もある。⑤：北・南端の堀はそれぞれ更に東に延び、南北方向の新たな“堰”と合流する。⑥：この“堰”が堀跡であれば、SD49以東に別の区画域が存在していたことになる。⑦：その区画内中央には、新屋敷板碑群・墓地が現存する。

なお図合成に至る4種の図面を時期毎に一覧していくと、次の点も見えてくる。⑧：西端の溜池とされた堀は、明治9年以前に、北端の堀と合流する部分が埋没（埋立て）し、明治30年までには溜池として残された区域の南半分も埋められた。⑨：調査区中央で東西に走る現農道は、明治9年には既に存在していた。⑩：南端の堀は明治30年までは堰として八郎潟に通じていた。



第344図 遺跡周辺の地積図

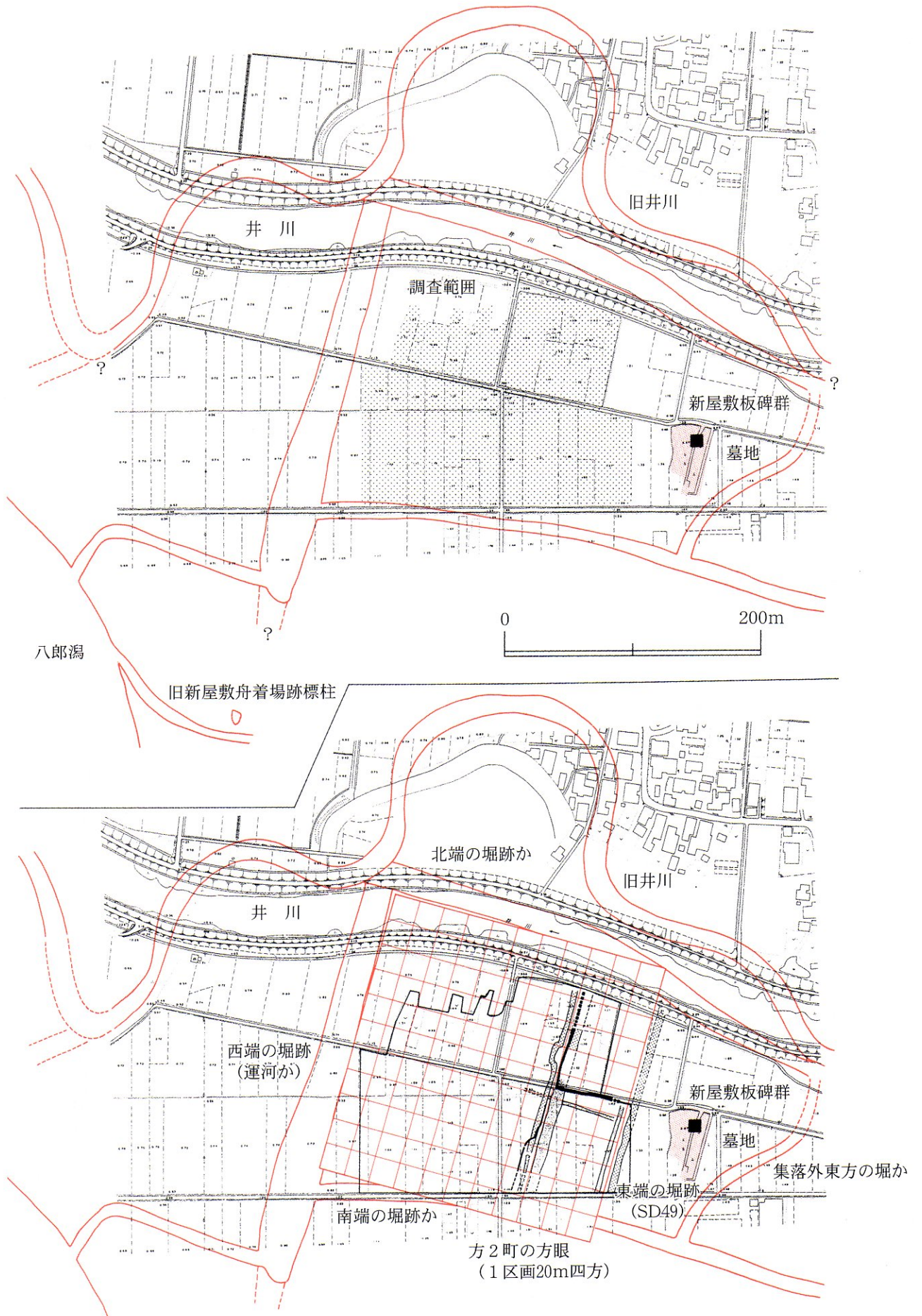


上：石川理紀之助
『下井川遺産調－浜井川部落絵図六－』
(明治34年作成、調査は明治30年7月)
※縮尺は第346図とほぼ同じ

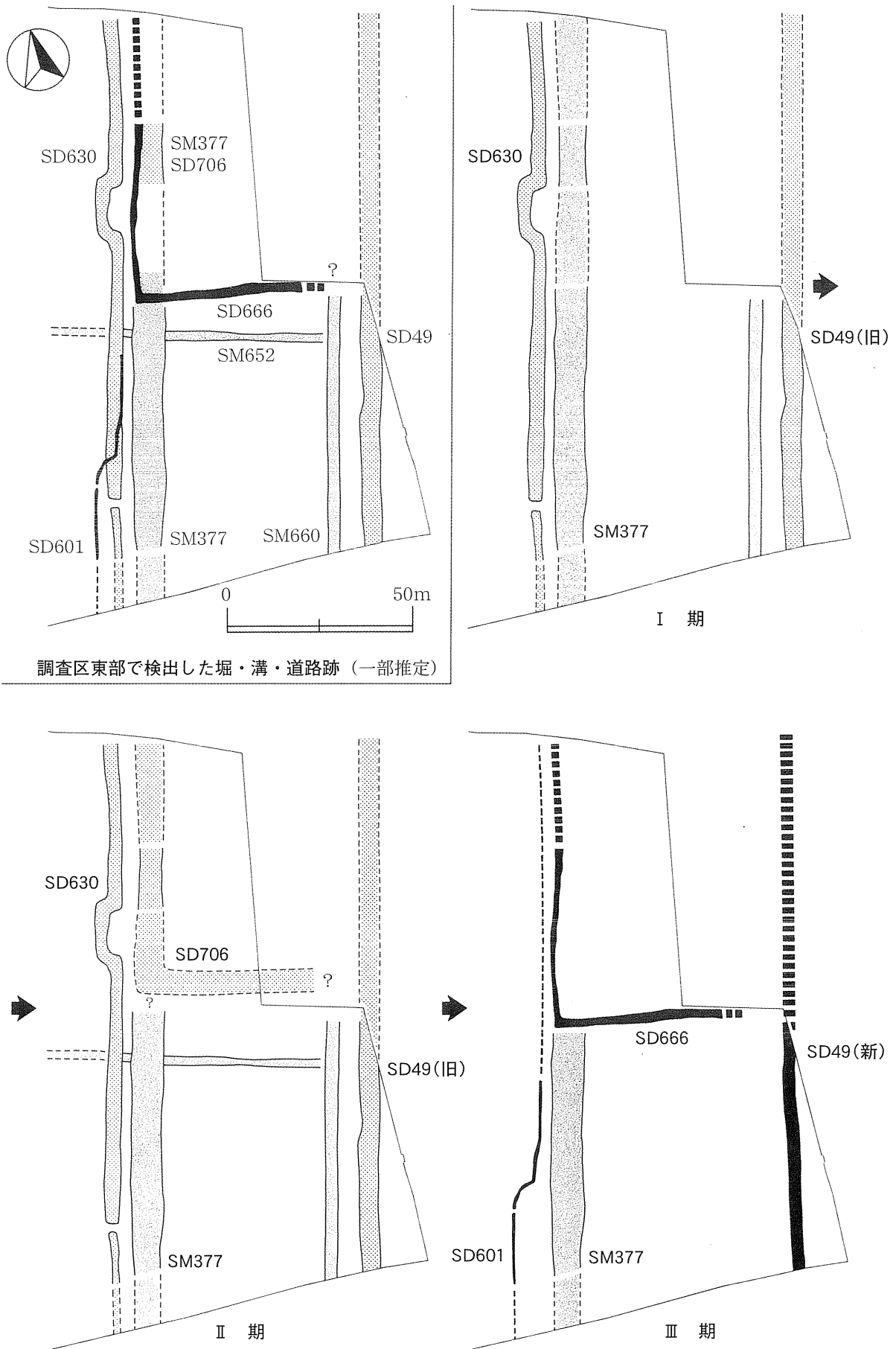
右：上図をトレース
土壌区分は、図幅中では洲崎がイ～ハ、
苗代堰がロ～ニ、追回がロ・ハ。
遺跡調査区は、洲崎口、苗代堰ハ
(網点部分)を中心とする。



第345図 『下井川遺産調』にみる遺跡周辺の土壌図



第346図 地積図・土壤図から推測される堀跡の位置



第347図 調査区東部における堀・溝・道路跡変遷模式図

(3) 調査区東部における道路・堀・溝跡の配置と変遷

SD49を東端の堀とするその区画内には、遺構配置図に観るように、あるいは第3章(第4節5)でふれたように道路・堀・溝跡が縦横かつ整然と配される。これら遺構群は、集落内において主体を占めるであろう掘立柱建物を核とした施設と有機的関係を保ち、互いに計画的に構築されたことは間違いない。これは第348図下に示した掘立柱建物跡の長軸方向グラフにも端的に表れている。大きく2方向にまとまりを示すグラフは、前述のSD49を始めとする区画施設がN-17°-E前後あるいはこれに直交するN-73°-W前後の方向性ともつことと合致する。しかしながら、現状では両者間の繋がり、その実相は明確ではない。それは精査箇所の制限と詳細な検討・分析が未了であることを主因とする。このような状況ではあることを前置きして、本項では調査区東部における区画堀内の道路・堀・溝跡等の配置を通して、集落東部域のあり方を跡付け・試論しておきたい。

第347図左上は、SD601・630以東の主要区画施設を模式的に図示したものである。ここで第1に読みとれる点は、東端のSD49を基準とすると、その長軸線方向が各遺構ともほぼ同一あるいは直交することである。これは第346図下の方眼を重ねた図でも明解である。さらに第2として重複関係から各遺構の新旧を整理しておく。それは旧い方からSM377道路跡→SD706堀跡→SD666溝跡とSD630堀跡→SD601溝跡及び、SD49(旧)堀跡→SD49(新)溝跡である。一方、SM652道路跡とSM377・SD630は重複する位置関係にあるが、その新旧は不明である。以上の点を基本とし、これに他遺構との重複・配置状況を加味して、A～C期の時期変遷を提示する。なお第347図のA・B期に示してあるSM652道路跡(幅2.1~2.2m)とSM660道路跡(幅3.2~3.4m)は、当該期に機能を果たしていたのか、不確実であるため、以下では言及しない。

A期：SM377道路跡が構築される時期である。これにSD630堀跡が伴っていた可能性がある。

SM377はSD49の西60mに位置する幅8mの道路である。その延長は図に従えば、調査区の北端から南端まで少なくとも145mは存在していたことになる。一方SD630は、道路跡の西3mをこれに沿うように南北に延びる上端最大幅4.9mの堀跡である。堀は中央北側では西にクランク状に屈曲し、南側では土橋状の掘り残しが認められる。以上のように、本期は南北を基軸とする堀・道路を幹線とし、東西基軸は未形成であった可能性がある。

B期：SD706堀跡が新規構築される時期である。これにSD630堀跡が伴っていた可能性がある。

SD706は上端最大幅が5mの堀跡であり、東端を区画するSD49(旧)と近似した法量・形状を示す。調査し得た長さは僅か17mに過ぎないが、明らかにSM377を切り込んで北から南に延びる。しかし調査区中央部付近で堀は消失し、SM377は幅員8m道路の全容を現す。このことはSD706が調査区域周辺のみで収斂するか、あるいは東に折れるかであろう。図には点線表記として東に折れるものとしている。これはSD706の次段階となるSD666溝跡が東に屈曲する形態を示すことを根拠としての推測である。なお東に延びるSD666の推定ラインは、第346図下に示した方2町の東西中軸線にあたることも付記しておく。またA期のSM377は、他遺構との重複が極端に少ないことから、その北部は消滅したものの、南半部は本期においても厳然とその威容を放って存続していたと見たい。このことは次のC期でも同じことが言える。

C期：SD601・666溝跡が構築される時期である。SD49も堀(旧)から溝(新)に変質するものの、東端の区画施設としてその役割を担っていたであろう。

S D 601は幅0.7～0.8m、深さ0.1～0.15mの溝跡に過ぎないが、形式的ではあるがS D 630堀同様の途切れ部をもつことから、B期におけるS D 630の後続施設としての位置付けは可能であろう。一方のS D 666は幅2m前後の溝跡である。これもS D 706堀跡の後続施設として、おそらくその西・南外側をL字に延びていたと考えられる。なおS D 49（新）は平面的にその規模を明確におさえられなかったが、断面観察からその幅3m前後、深さは0.35～0.6m程の数値を示す。

以上を要約すれば、A期は南北を指向する道路・堀で構成され、B期に入ると堀がL字形に屈曲し、東西にも基軸が生まれる。C期は基本的にB期の様相を踏襲するものの、その施設は堀から溝に容容する。またS M 377道路跡は、他遺構との係わりから各期を通して存続していたと考えられるが、B期においてその北半部が消滅する前後のあり方には、注目しておく必要がある。それは道路とS D 706堀が全く同位置・同方向に構築されることの意義と、結果的にB期のS D 706とC期のS D 666がそれぞれの屈曲部南側に道路が突き当たる位置関係となることも念頭におきたい。その一方で、この場が道路として永続し得たのか、あるいは全く別の意識下での空間利用も、考慮の選択肢に加えておくべきであろう。

（4）B・C期の堀・溝跡が意味すること

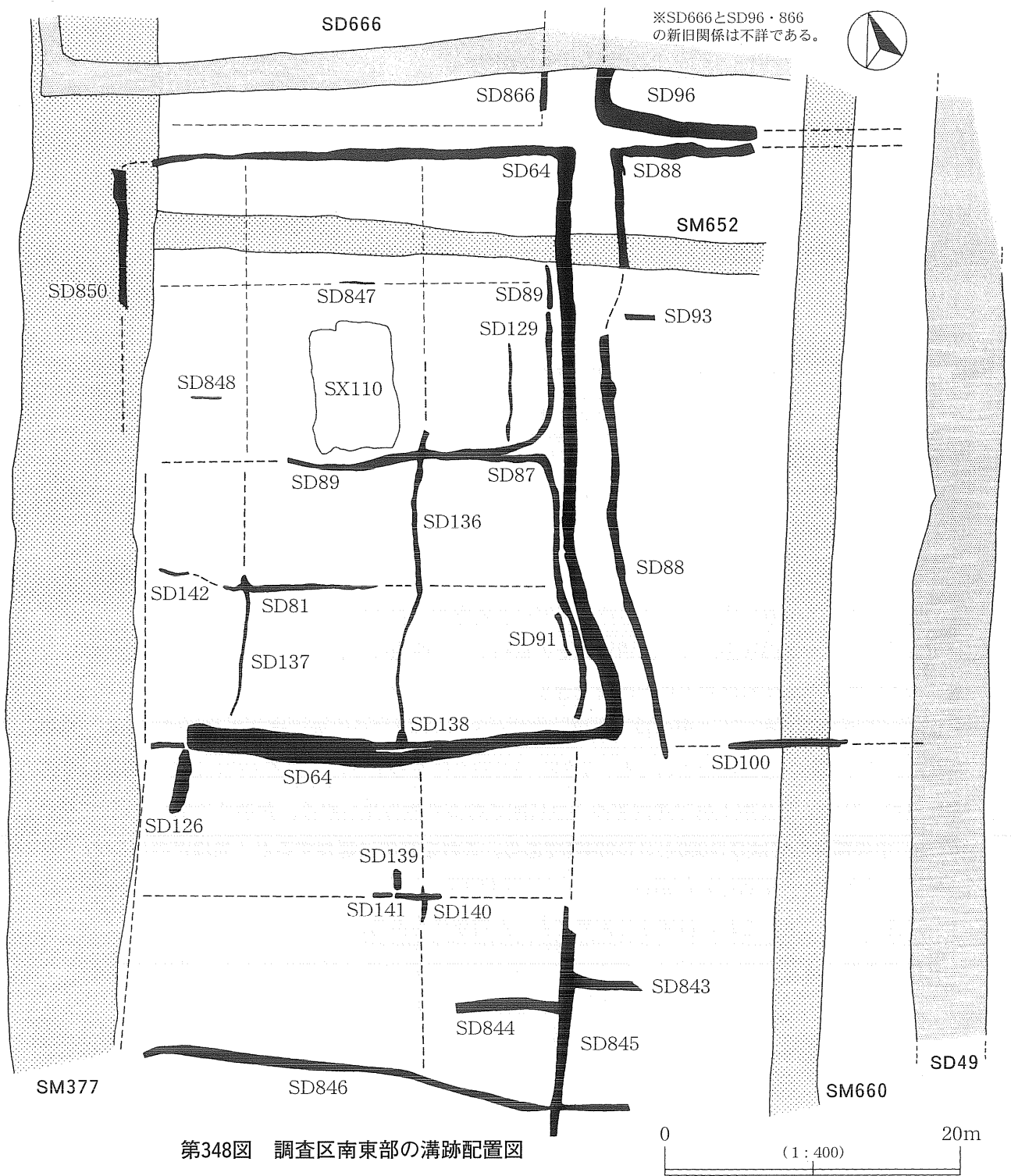
さて、S D 49を東端の堀とする区画内では、その東部という限定された区域ではあるが、少なくとも3時期の変遷を跡付けることができた。しかしながら、推測も交えてもなお判然としない点もある。これには直前に述べた道路のあり方とも関連をもつが、やはりB・C期における堀・溝跡がその北端を基点として見た場合、南に延びそれから東に屈曲することの意味に収束すると見ておきたい。今までの推論は、方2町すなわち約220m四方に堀が巡らされていることを前提としている。これはA期については問題なく理解されるが、B期に入りS D 706が構築される段階では、2つの前提条件を示さなければならないことに気づく。それはS D 706が方2町区画内の北東部をL字形に仕切る堀跡（区画内の推定南北長100m×東西長50m）であったのか、あるいはS D 49（旧）が真っ直ぐ北に延びるのではなく、西に折れてS D 706に接続していた可能性はないのか、ということである。後者は、2条の堀の規模・形状が酷似することと、両者が仮にクランク状の一連の堀と見た場合、第346図下に「集落外東方の堀か」とした板碑群・墓地東側の堰流路と線（左右）対称の形状を示すことを一応の根拠とする。後者に従えば、S D 49（旧）+ S D 706堀は集落（調査区内）の東を画する施設には間違いないが、その形状から意識の上では、板碑群・墓地を含む東方域の西を画する堀跡と解することも可能になる。この両者の関係は、C期のS D 49（新）とS D 666にも当てはまることである。

これらのことは遺跡・集落の評価にも大きな意義を持つことは確かである。ただ現状ではこれ以上の言及はできない。あえてここでふれたことは、今後の検証時における情報提示の意味合いを含んでのことである。

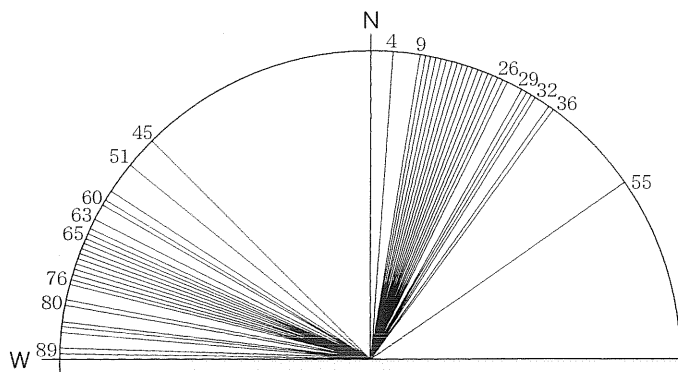
（5）調査区南東部の中・小区画溝跡群

今まで述べてきたことは、主に調査区東部における大区画に係る道路・堀・溝跡についてであった。ところで、調査区南東部では、幅が80cm未満の溝跡（仮に中・小の溝跡とする）も縦横に確認されている。これは第3章（第4節5）282頁に「南東部溝跡」として報告を行っているが、これをまとめると、次のようになる。

S D 49・S M 377・S D 666に挟まれた間に位置するS D 64溝跡は、その幅0.6～0.8m程であり、南



第348図 調査区南東部の溝跡配置図



E 掘立柱建物跡長軸方向グラフ

北方向の長さは40m、東西は西辺をS D850が担っていたとすれば、長さ約30mの長方形プランと推測される。本溝で囲まれた内部に位置する複数の溝跡の幅・深さなどから見て、区画内を南北に半分に分割（南北20m×東西30m）し、さらにこの中区画を10m四方にそれぞれ6分割しているとも推定することができる（第348図参照）。このように見ると、最小の区画は一辺が約10m四方の方形となるようである。S D64と同形態と思われる溝は、これに左右対称で東側にS D88・100が、同じく南側にS D845・846等が、北東側には点対称の形でL字形のS D96が位置する。S D64と東側のS D88は、2～2.5mの間隔において南北に並列するものであり、この間を通路・道路とも推測されよう。

これら中小の区画溝跡群は、先のA～C期のいずれの時期に帰属するものであろうか。各遺構との重複を伴うが、その新旧は判然としない。これは溝の掘り込みが10cm前後と浅いことも一因である。新旧が明確なのは、S D850溝跡がS M377道路を切り込んで構築していることであり、これが前述のようにS D64の一端を占める溝であったとすれば、小区画溝群はS M377より新しい時期となるかもしれない。ただS D850は部分的な検出に過ぎず、その他の状況はS M377の東隣に区画溝群が併存しているようにも見える。このことからC期あるいはそれ以降の可能性もあるが、現状ではどの時期に伴うのか推測できない。

（6）調査区中央から西部の様子

一方、調査区東部域以西の中央から西部における区画施設をどのように扱えばよいのか。この区域では、道路・堀跡の検出はない。溝跡もその様相は、不明瞭の一言に尽きる。しかし断片的ながら、溝跡の方向性に着目すれば次の点を指摘できる。

調査区中央部を東西に走る現農道下には、前述のS D666はじめ中世の溝跡等がほぼ同位置で構築される。その中央から西側についても、第246・247図右にあるように、東西方向に延びる溝跡が多数検出され、なかには2本1組で並列するように配される箇所も見られる。西端部ではS D568とS D571が、中央部付近ではS D880とS D924等である。これを東側に延長すると、先ほどのS D666とS D64間に行き着く。それぞれの溝は3.2～4mの間隔を保って延びていることから、この間を道路、溝の一部については、これに付属する側溝であった可能性もある。

また調査区南西部の南東側では、南北方向に延びる溝がまとまって検出された（第247図左）。中央には幅2～2.5mのS D202があり、その両側に幅のやや狭い（50～80cm）溝がそれぞれ2～3条取り付くように配される。これも中央部の一段下がったS D202を通路・道路、その両脇の溝を道路側溝と推定することはできないだろうか。

（7）区画施設の時期変遷

以上述べてきた、遺跡の区画に係る遺構群は、どの時期に位置づけることができるのであろうか。ここでは堀・溝跡の出土遺物を通して、先のA～C期の時期を類推したい。

集落の東端を画するS D49堀跡では、瀬戸・美濃産陶器（以下“瀬戸美濃”と表記）が16点出土（報告では12点図示）しており、時期の明確なものは古瀬戸中Ⅲ期～後Ⅱ期である。またS D49と同形態を示すS D706堀跡は、古瀬戸後Ⅰ期～後Ⅱ期の瀬戸美濃と珠洲Ⅲ～Ⅳ期（Ⅳ期主体）のロクロ壺・播鉢が出土している。一方、調査区南東部に位置し、堀・道路等で囲まれた内部を中小に細区画するS D64溝跡では、少ないながらも古瀬戸後Ⅳ期、大窯3前期に属する瀬戸美濃が出土している。これらのことを、後述する遺構内出土遺物（陶磁器）全体との比較の上で照らし合わせると、次のような

時期変遷が推測される。

まずA・B期としたS D49・706堀跡は、瀬戸美濃では古瀬戸後Ⅱ期が最も新しい時期を示す。珠洲でも特にⅢ期に遡る可能性のあるロクロ壺は、遺跡内ではS D706でのみ出土している。一方、大窯期の遺物は一切認められない。これらのことから該期は、13世紀後半～14世紀代にまとまる。このことからB期に後続するC期は15世紀代以降と見ることが可能となる。またS D64は、15世紀中葉～16世紀中葉の時期となり、S D64に代表される中・小区画の溝の一部はC期あるいはそれ以降と類推できる。

2 井戸跡

本遺跡において確認された井戸跡は312基に及ぶ。各井戸跡は宇野隆夫氏の『井戸考』^(註11)における型式分類を基本として、第3章第4節1においてA～F型に分類している。^(註12)ここでは、上記分類上から言及できなかった特筆すべき事項をまとめると共に、C・D型井戸跡の細分類、井戸の廃棄時行為・時期等について言及したい。

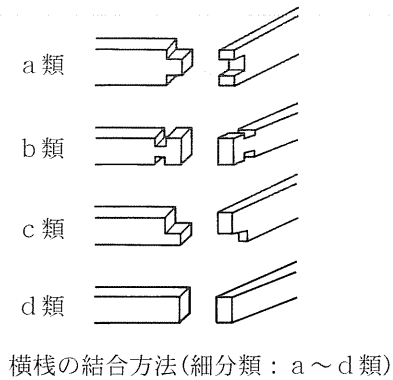
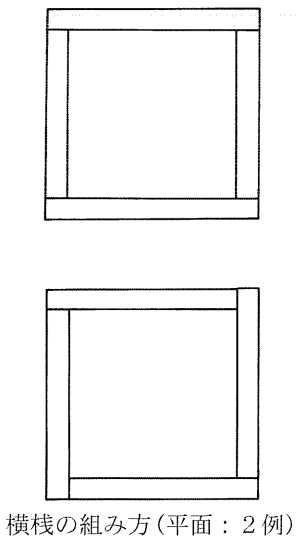
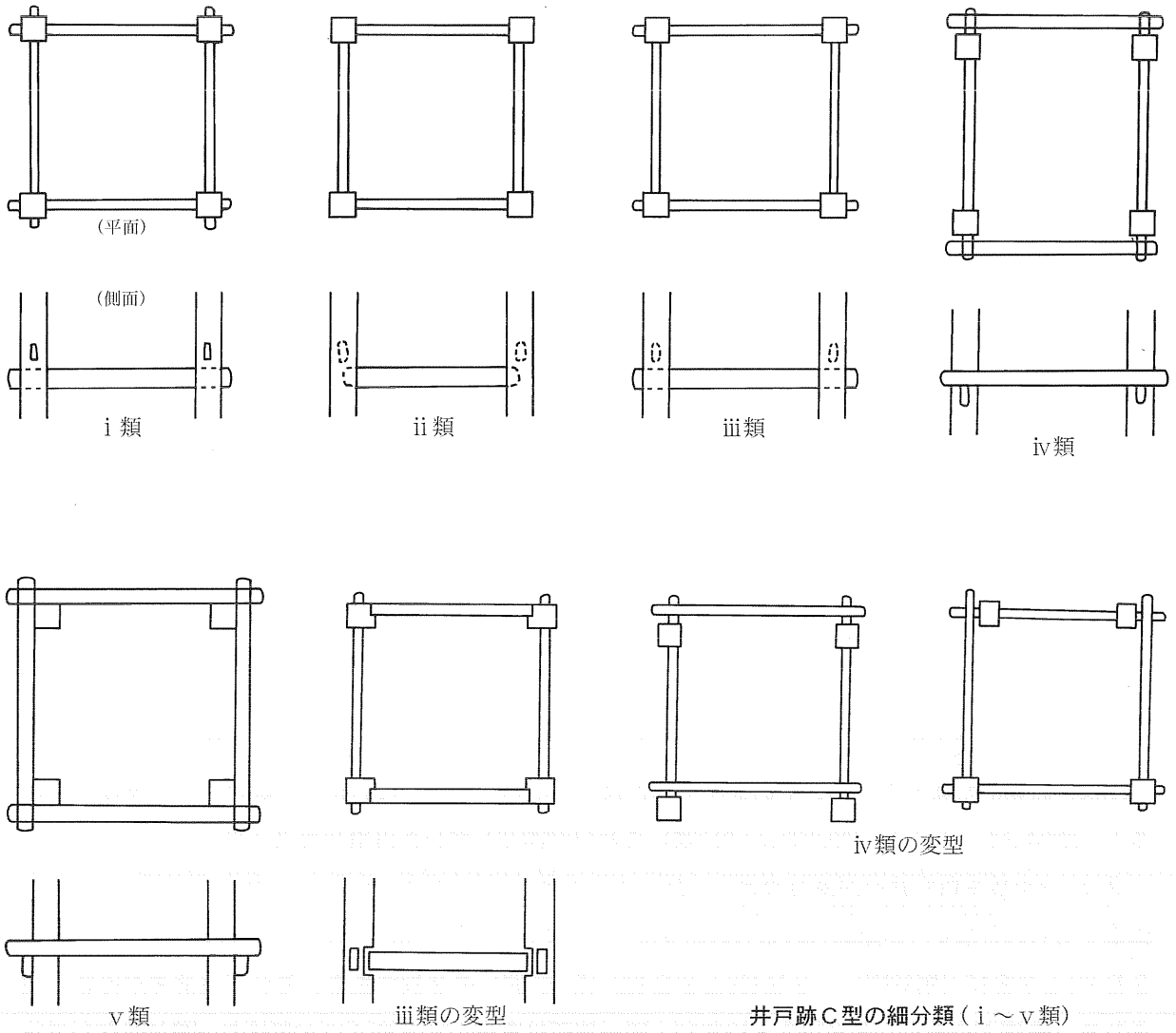
(1) 洲崎遺跡井戸跡の特質

本遺跡の井戸跡については、発掘調査中から感じていたことが3点あった。①：その数が多いこと、②：井戸どおしの重複が極端に少ないこと、③：井戸底面までの掘り込みが浅いこと、である。

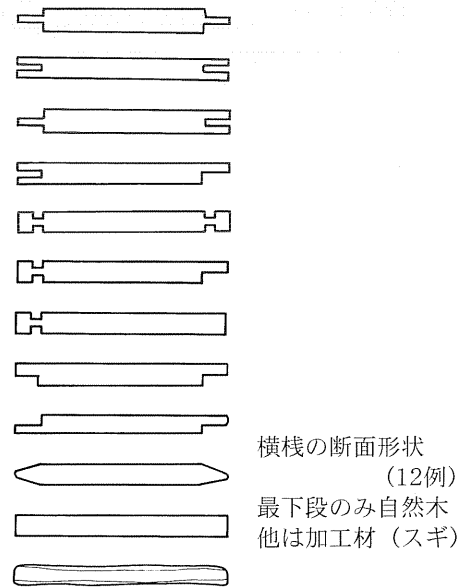
①は、時期的な幅を考えるとその数が多いとは言えないかもしれないが、単純に時期を無視して見ると、約94㎡あたり1基(29,260㎡÷312基)の井戸が存在していた計算になる。

②は、300基を越す井戸がありながら、明らかな重複—ここでは旧井戸側を破壊して新規に井戸を構築するものを指す—が認められるものが少ないことである。これは、S E12AとS E12B(第40図)、S E591とS E15(第38図)、S E438とS E422(第103図)の3例であり、それぞれ前者が後者に切られる(破壊される)。S E12A・12Bは、同一箇所^(註13)に重複しており、12A部材の一部が残存していたことから確認された例である。他2例は、前者の水溜用曲物を破壊するようにして、後者の井戸を構築するものである。実際にはその他にも同様の事例が存在していた可能性はある。ただその数は少ないことは明確のようである。この少なさについては、井戸及びこれと不離の関係をもつであろう掘立柱建物の配置の問題もあろうが、いずれにしろ井戸構築にあたって何らかの規制が働いていた結果と推測することもできよう。

③の井戸の深さは、最浅25cm(S E168)、最深162cm(S E04)であり、平均すると75cm(270基の平均)となる。この深さは井戸跡確認面からの深度を現すもので、井戸構築時の深さと同一とは限らない。本遺跡の現況は、遺構検出箇所が旧水田区域では、一段高く残る畑地より最大で50cm削平されていることが判明している(第3章第2節参照)。この点から試算すると、構築時の深さの平均は125cm未滿と推測できる。井戸という深いイメージがあるが、言うまでもなくこれは地下水位との関係で決まるものであるから、その深浅・数字に意味はないのかもしれない。しかしここから派生し想起されることは、八郎潟にも井川にも近く、なおかつ地下水位の高いこの地に井戸を作ることの意義は何なのか、である。本遺跡の井戸が取水のための施設であったのか、次に述べる「人魚供養札」検出の井戸跡とE型井戸跡の問題を含め、今後の検討課題としておきたい。



井戸跡D型の細分類



第349図 井戸跡 (C・D型) の細分類

(2) 「人魚供養札」検出の井戸跡

人魚供養札は、S E 587井戸跡から出土した墨書・箋書の認められる木製品である。遺物そのものについては後述するが、これが調査後の整理作業過程において存在が確認され、このことを通して本井戸跡のあり方を考えさせる事象も生じた。

S E 587は、丸木舟を転用したA型の井戸跡である。井戸側内には、切断した丸木舟を縦方向内向きに合わせることで長径75cm×短径58cm程の楕円形の空間が作り出される。その中に水溜用の曲物が埋設されるが、これは長径64.4cm×短径52cmの楕円形を呈する。数値の比較で明らかなように、曲物は井戸側内寸法に合わせて製作したようであり、80を越す曲物のうち楕円の形状を示すものは本例だけである。この井戸自体の特異性は発掘時から意識していたことではあるが、整理作業における精査の結果、丸木舟と楕円形の曲物の間から、人魚供養札とした薄い杉板の木製品が出土していたことが判明したことは、その特異性を増幅させるものであった。人魚供養札は、井戸側北西隅部で真ん中から「く」の字に折られた状態で曲物との狭い隙間に横向きに挟みこまれていた。折面の観察により、墨絵と文字は内側（曲物側）に向けられていたようである。第26図下の写真でも明確なように、これは井戸が機能を果たしていた時期に板を挟み込んだとは考えにくい。井戸を構築する際に曲物と板と一緒に埋設したと見る方が妥当と考える。後述のように人魚に関することは、中世においては「凶兆」の証でもある。これを井戸という神聖な場に埋設することは何を意味するのか、井戸の形態等と合わせて考えていかなければならない問題である。

(3) E型井戸跡について

E型に属する曲物のみで構成される井戸跡は、他型と比較して掘形の規模が小さいものが多く、その形状は円形または略円形を呈し、いわゆる方形基調を示すものは認められない。広島県草戸千軒町遺跡では本類に属する井戸跡を「曲物埋設遺構」と分類している。曲物埋設遺構は、最底部が湧水層に達しておらず、そこに粘土が堆積したり内部に細かい礫が詰まっている場合があり、構造に何か（液体が適する）を貯蔵する施設と見て^(註14)いる。本遺跡のE型は基本的に曲物を複数段積み上げる構造をとり、最下段の1つのみ検出されたと考えている。しかし曲物の底面標高がやや高いものや、掘形規模と曲物の径が近似するものも多いことから、前述の曲物埋設遺構の用途（貯蔵施設）として使用していた可能性があるものもある。

(4) 井戸跡C・D型の細分類（第349図）

井戸跡C型は、隅柱と横棧で保持する井戸である。C型に属するのは125基と全分類の中で最も多い。ここではC型井戸跡を隅柱と横棧の組み方によりi～v類に細分する。

i類：各隅柱とも横棧を受けるほぞ穴が全て貫通するもの。ii類：各隅柱のほぞ穴が全て未貫通のもの。iii類：i類とii類の折衷型で、相対する二方向が貫通し、他方は未貫通のもの。iv類：相対する二方向のほぞ穴は貫通し、他方の横棧はその貫通した横棧の上に乗せているもの。v類：隅柱にはほぞ穴を設けず、柱の外側に横棧を方形に組んでいるもの、同類は隅柱と横棧の固定方法が不詳である。明確に釘などで固定したのも未確認である。

また本型の隅柱は、下端部が平らなもの（56基）と杭状のもの（44基）の2種が見られ、前者は井戸底面に置き、後者は底面に突きつけ（打ち込み）によると観察される。ただS E 12A・308の2基は、両形態が混在するものである。その他の23基は、遺存状態等により詳細は不明である。

一方D型井戸跡は、横棧を方形に組んで保持するものである。横棧は角材を用いるものと自然木を用いるものとに分けられる。スギ材の角材にはほぞの加工を施すものが多いが、広葉樹の自然木で組まれたものはほぞを設けずに組まれているようである。ここでは加工がある横棧を使用している井戸についてその結合方法によってa～d類に細分する。

a類：目違いほぞで組むもの。b類：両方に溝状の切り込みをつけて組むもの。c類：相欠きほぞで組むもの。d類：材にほぞを設けずに組んでいるもの、これはC型v類と同様に固定方法が不詳である。

これら横棧の結合は、それぞれ単一類で組んでいるものと、2種の組み合わせの場合も存在する。例えばSE60は、b・c類の組み合わせである。

(5) 井戸の廃棄時行為

本遺跡の井戸跡は人為的に埋め戻された堆積状況を示す場合が多く、その廃棄の際には何らかの行為を行っているものも認められる。以下にその事例を示す。その数は井戸跡312基のうち精査を行った270基中233基であるから、86%に達する。

①：埋め戻し前に部材を一部または全部抜き取る（SE01・03A・12A・15・22など、206基：76%）。
②：井戸側底部に抜き取った横棧を斜め（SE08・21・125・292・309・316・408）、または中央に置く（SE22・106・218・418・583）。SE298は横棧を5本並べ置いていた。③：木製品、陶器、礫などを井戸側底部に残置する。具体例としては水溜曲物内に土錘42個と礫を多量入れる（SE219）、下駄を2足並べ置く（SE16）、水溜曲物の上に板を置く（SE380）、挿鉢を据えその上に曲物容器を入れ置く（SE540）等である。④：礫（火熱を受けているものも多い）、部材、遺物を投入する（SE04・15・23・29など、103基：38%）。SE583は井戸側内から多量の礫・遺物が見つかり、中でも4層上面では小割りにした珠洲挿鉢・甕（10cm角未満が多い）が50点ほど出土している。これは意図的に分割し礫等とともに投入したものである可能性がある。⑤：堆積土中にシジミを充填（SE311）、また曲物内に炭（SE08）・粉（SE422）を充填する。⑥：銭貨入りの柄杓を埋置く（SE154）。⑦：埋め戻し後に礫を置く（SE11・47・161）。またSE47は板を敷きその上に礫を置いた状態で確認されたものである。

以上、本遺跡の廃棄時行為について述べてきたが、このような行為は各地に類例も多い。井戸神＝水神は普通の生活に密着しているだけに擬人化され、また井戸を地中＝異界・黄泉へと続く通路とする見方があり、また古井戸を埋める時にこの祀りを行わないと井戸神がたたる、あるいは身内に不幸があるという言い伝えもある。^(註15) 数々の廃棄時行為から本遺跡においてもこのような精神世界が存在していたことが伺えよう。

(6) 井戸跡出土の銭貨

井戸跡より銭貨が出土したのは、掘り下げを行った273基のうちの8基(2.9%)にすぎない。しかも1基を除いて各1点のみの出土である。銭貨の出土状況は、次の3タイプに類別される。

a：容器の中に銭貨1枚を入れ、容器ごと井戸に埋置するもの（1例：SE154）。b：埋土上層に銭貨を1枚入れるもの（6例：SE29～32・33・239・319・441・491）。c：埋土最下層に複数枚の銭貨を入れるもの（1例：SE683）。aのSE154では、埋土上層(確認面から10cm下)から柄杓が横倒しの状態で出土し、この中に洪武通寶(背：一銭)が1枚入れられていた。銭貨の存在から、本井戸

は14世紀後半代以降に廃棄されたと判断される。bではS E 29～32・33・239・319が元豊通寶、S E 441で永樂通寶、S E 491は判読不能であった。cのS E 683では、6点が一塊状となって井戸底面近くから出土した。その内訳は、開元通寶・皇宋通寶各1枚、元豊通寶・洪武通寶が各2点である。

錢貨の入れられた井戸について、まとめてみる。各井戸とも埋土は人為的堆積を示すものであり、錢貨も偶然の混入ではなく一定の意識の元に埋置・投入されたと解したい。a～cの3タイプのうち、a・bは井戸廃棄後、大部分を埋め戻した後での作為、cは使用時もしくは廃棄直後の行為と見なすことができる。逆に井戸裏込め土内での錢貨は未発見であり、開削(鑿井)時の作為は認められない。またaの事例は類例の有無を知らないが、希有な資料となろう。一方、錢貨同様に意図的に投入されたと見られる礫を伴う井戸跡との関係については、どうやら礫を複数入れた井戸には錢貨が認められず、礫の投入と錢貨のあり方は排他的と見て取れるかもしれない。

(7) 井戸跡の構築・廃棄時期

精査を実施した井戸跡のなかで構築または廃棄の時期を推測できるものは45基存在する。これは部材等の年輪年代測定結果及び出土陶器・錢貨に基づく。

まず年輪年代測定結果を見ると(同材関係をもつものは、最も新しい年代を採用する)、最も古い年代を示すものは、S E 276曲物の1133年であるが、試料の形状タイプがCであり、これをもって12世紀前半代の構築とは断ずることはできない。明らかに樹皮が残るAタイプでの古い年輪年代数値が示されているのは、S E 417南面縦板の1285年とS E 587西面縦板の1286年である。特に後者の試料は、その形状・遺存状態から転用材の可能性は低く、このことから同井戸の構築時期は、13世紀後半～末と判断することができる。この井戸は「人魚供養札」が出土している。逆に最も新しい時期を示す数値は、S E 116曲物の1328年であり、14世紀前半以降の構築となる。

一方出土陶器では、珠洲ではIV・V期、瀬戸美濃では古瀬戸後Ⅱ期～大窯3期までであり、14世紀代から16世紀後半(第3四半期)までとなる。なお瀬戸美濃がまとめて出土したS E 484は全て大窯3期に属している。また出土錢貨を見ると、S E 154・683は洪武通寶(初鑄:1368年)が、S E 441では永樂通寶(初鑄:1408年)が確認されている。これらのことから、錢貨を伴う井戸の廃棄時期は、14世紀後半以降と見ることができる。

以上、井戸跡の構築・廃棄時期は概ね13世紀後半を上限とし、16世紀後半を下限とすることができる。なお年輪年代測定で得られた井戸跡の時期が、13世紀後半から14世紀前半代にまとまることについては、サンプル数の問題もあろうが、それよりも年輪年代測定に適する良質の杉材はこの時期に多く入手でき、それ以降の年代では入手し難かった状況も推測されよう。

この時期を井戸跡の型式分類と照らし合わせてみると、本遺跡で最も多いC型は全時期において存在し、時期による偏りは見られない。しかしA型は13世紀後半から14世紀とやや旧く、B型は15世紀から16世紀と新しい時期に構築されているという傾向が伺える。

次に井戸跡の時期と廃棄時行為との関連について考えてみる。廃棄時に部材を抜き取り・礫・遺物・材を投入しているものは全時期に存在するが、部材を抜き取らず投入しているものは、一部を除き14世紀前半までにはしか見られない。また部材抜き取りの有無に関わらず、廃棄時に主に複数の礫のみを投入しているものは14世紀後半まででそれ以降には存在しない。このことは、前述の錢貨と礫の排他的関係とも時期的に合致する。

3 出土遺物

本項では、陶磁器類及び木製品について若干まとめておく。

(1) 陶磁器

本遺跡で出土した陶磁器類は、遺構数や木製品等の他の遺物量を考えると非常に少ないことがまず第一に挙げられる。その種別は、貿易陶磁と国産陶磁がある。前者は青磁・白磁・染付・朝鮮陶器であり、後者は瀬戸美濃・珠洲・越前・瓷器系・瓦器・土器の中世陶器と近世陶磁器がある。出土量（個体数）については、ほとんどが破片資料であり、一概に比較はできないが、珠洲が最も多く認められ、次いで瀬戸美濃、青磁と続く。その他の種別は極端に少ない。この差を珠洲と越前（瓷器系・瓦器を含む）を例に重量比（%）で見ると、珠洲92.5%/越前7.5%となる。ちなみに珠洲における器種構成にも偏りがあり、搦鉢72%/甕類24%/壺類4%の比となる。

陶磁器類の時期は、国産陶器では瀬戸美濃が古瀬戸前Ⅲ期から大窯3期までである。しかし古瀬戸前Ⅲ期に属するものはS K71土坑出土の灰釉仏花瓶1点（個体）のみであり、他は古瀬戸中期以降のものである。また志野丸皿は大窯期後の登窯第1小期に属するが遺構外の出土である。珠洲はⅢ期からⅥ期までであるが、Ⅳ・Ⅴ期が大半を占め、特にⅣ期が多い。また越前は16世紀代のものであり、この越前の影響を受けたと思われる瓦器搦鉢も1点出土している。貿易陶磁については、白磁（第252図5）が15世紀後半明代のものようである。

(2) 木製品

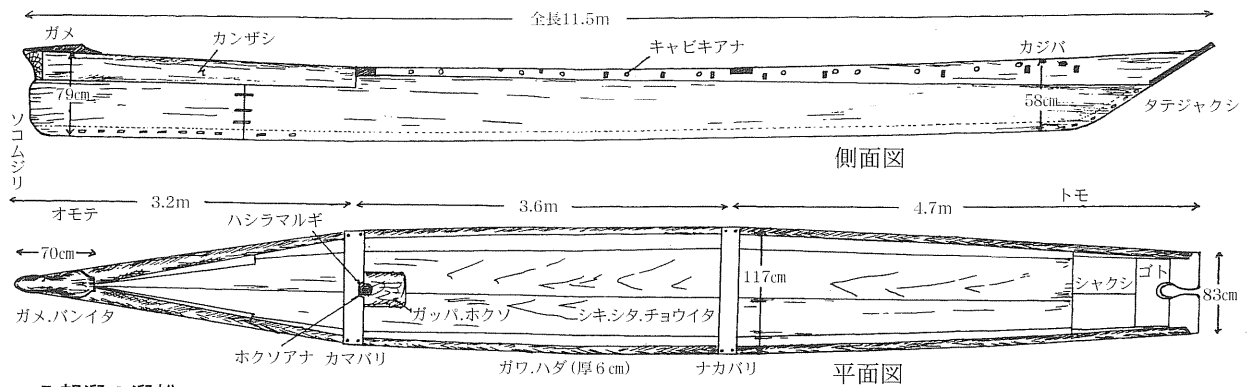
本遺跡で出土した木製品は、第9表に示した分類表に従うと、大項目で20種、名称を付した小項目は67種となった。しかし同項目に集録されない名称・用途不明の木製品が多種・多数存在するのも事実である。本項では、まず丸木舟・曲物・人魚供養札についてふれ、次いで当初「不明木製品」としていた遺物のうち、本調査並びに整理作業の過程において器種名が明らかとなった資料について、若干紹介しておきたい。

①丸木舟（第350図）

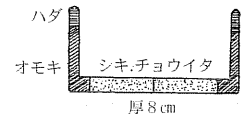
丸木舟は古くから用いられ、漁業と切り離せないものである。100年ともいわれる強い耐久性をもつ丸木舟は、遺跡が位置する八郎潟沿岸地域、男鹿地域をはじめ各地で長い間使用されていた。

本遺跡では4艘の丸木舟が出土している。^(註16)すべて井戸跡からの出土で、4艘とも異なる丸木舟を切断し、縦方向内向きに合わせ、井戸側として転用されていた。この切断面を観察するとS E582は鋸を用いて、他は手斧でそれぞれ切断していることが分かる。舟はいずれも単材からなる刳り抜きの形態を示す。原木を縦に上下に切断し、一方を舟底に他方の切断面を刳って製作している。丸木舟の断面形態はいずれも底面が平らな箱形である。またS E295は2側板上端にU字形の抉りがあることから操具に櫂を用いた丸木舟であると考えられる。

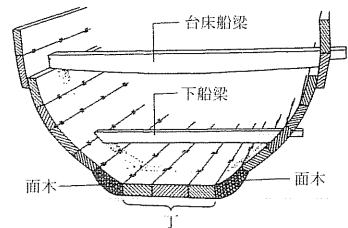
第350図上は、八郎潟で使用されていた平底の湖沼専用の潟舟である。これは単材刳り抜きの丸木舟とは異なるが、作り方は類似している。一方男鹿の丸木舟は単材刳り抜きの舟である。岩礁が多い海域で用いるために非常に頑丈なつくりであり、底面は丸底となる。^(註17)本遺跡の丸木舟は、平底である点では八郎潟の潟舟と、単材刳り抜き舟という点では男鹿のものと共通する。以上のように本遺跡の丸木舟は八郎潟・男鹿の丸木舟と何らかの関連が推測される。またこの地域における単材刳り抜きの舟としては、最古の出土例ともなる。



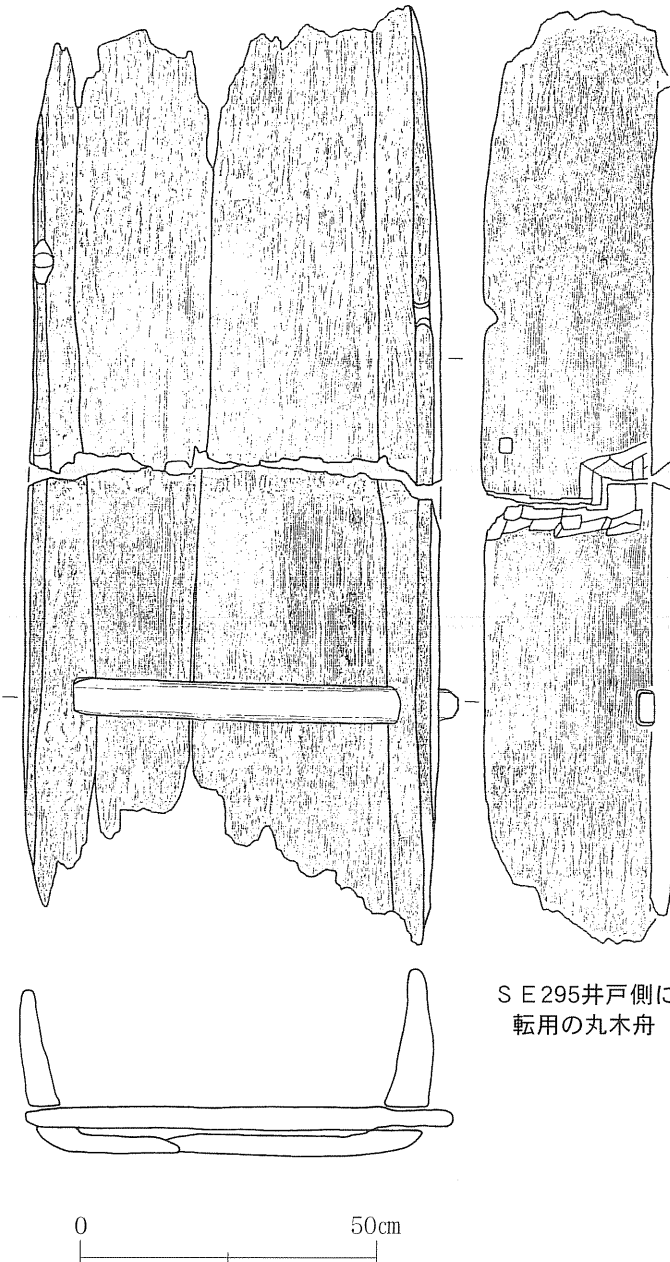
八郎潟の潟船 秋田県教育委員会
『八郎潟漁ろう用具図譜』(1969)より



おもき
面木造り(八郎潟の潟船)



石井謙治 復元日本大観4
『船』(1998)より



S E 295井戸側に
転用の丸木舟

左図は第18図を一部改変したものである。当初、舟底近くにある横棧状の棒は、井戸側に転用する際に新たに付加されたと判断して、丸木舟実測図としての第18図作図時にはこれを除いていた。ところが八郎潟の潟舟を調べていくと、上図のような船梁をもつ例があることを知った。洲崎例がこの船梁にあたるのかは不明であるが、井戸側として検出時には間違いなく、この状態であった(第17図下段写真参照)。

第350図 洲崎遺跡の丸木舟と八郎潟の潟船

男鹿地域では昭和30年代まで丸木舟は主流であった。男鹿の丸木舟は通常、樹齢300年以上の杉材を用い、それは主に地元の真山・本山の北側の杉であった。この真山・本山はただ適する材を産する山というだけではなく「お山」という信仰の山であり、この「お山の木」を用いた舟は大漁をもたらすといわれていた。また丸木舟は漁ばかりでなく、荷物の運搬や、隣村との交通手段に用いられ、日常生活の必需品でもあった。それだけにその素材の入手から製作の過程の節目には儀式などの祭祀行為が厳粛に行われていた。本遺跡出土の丸木舟も、舟としての寿命を終えた後も生活に密着した井戸という形で利用されていた。ここにおいても男鹿地域同様の祭祀行為が行なわれていたのかもしれない。

②曲物

秋田の伝統工芸「大館曲ワッパ」は現在も秋田を代表する特産品であり、県内の曲物の歴史は長い。男鹿市脇本の平安時代初期の埋没家屋から曲物製の柄杓が出土していることからそのことをうかがい知ることができる。

本遺跡では86点の曲物が出土している。その大きさは様々で、用途による作り分けがなされていたようである。本遺跡の曲物は法量によって次のように類別される。柄杓（4点）、小型（径15～30cm程度、8点）、中型（径30～45cm程度、13点）、大型（径45cm以上、43点）の4種類である。また破損し法量の不明なものは17点である。以上は円形のものであり、その他に1例のみであるが、楕円形のものも見られる。底板は柄杓と小型のもののみに残り、小型の曲物は容器として使用されていたようである。細かい用途については推測の域を出ないので言及しないが、加工、製作について以下に特筆すべき点を挙げてみる。

本遺跡出土の曲物は、その大半が井戸側内の水溜として使用されていたものである。水溜の曲物は大型のものが多い。底板を押さえる木釘やその孔が残るものも多く、底板等（あるいは簀子状のものか）を抜いて使用していたようである。これらの曲物は井筒としての目的で製作されたものもあろうが、多くは転用されたものとする。転用されたと推測されるものは、径1cm程度の円形の孔（熱した火箸を押し当てて穿孔か）が上（下）端部に巡るもの、口縁部に一箇所削り込みがあるものである。また内面（一部両面）に黒色の付着物（漆か）が見られるものがある。水溜以外の曲物も大部分が井戸跡からの出土であり、井戸廃棄の際に意図的に投入されたものが多いと思われる。その中には播鉢（珠洲）の上に置かれた曲物容器や（S E 540）、柄杓の中に銭貨を納めたもの（S E 154）などがある。

製作技法を見てみると薄い柾目板を巻き、それを樺（桜の樹皮）で縫い綴じる。また補強と装飾の役割を果たすまわしの側板が中・大型のものに多く見られる。これは現在の「曲ワッパ」とほぼ同様の作りである。大半の曲物の側板内部には縦、または斜め方向の刻みが入れている。この技法は「切り曲げ」といい、白書き（白引き）と呼ばれる小刀で行われる。繊維を分断することで曲物を曲げやすくする効果がある。^(註19) 大型の曲物はほぼ例外なく全体にわたり縦方向の刻みが入っている。また縦と斜めの刻みが交差しているものも一部に見られるが、この菱形状の刻みは縦方向のみの場合よりも歪みや折れる危険性が少ないことが分かっている。^(註20) また側板外面に刻みを施しているものもある。なお、曲物側板の縫い綴じには、樺を使用するのが通例と思われるが、一部で樺には見えない樹皮（未同定、木板を薄く加工したものか）を用いている例もある（S E 161など）。また水溜の曲物の中に径と高さの比が2～6：1程の背の低い曲物が見られるが、これらはまわしの側板を転用して使用していたものとする。また側板に焼印を押すもの（◎印：S E 296）、線刻を施しているものがある。線刻は

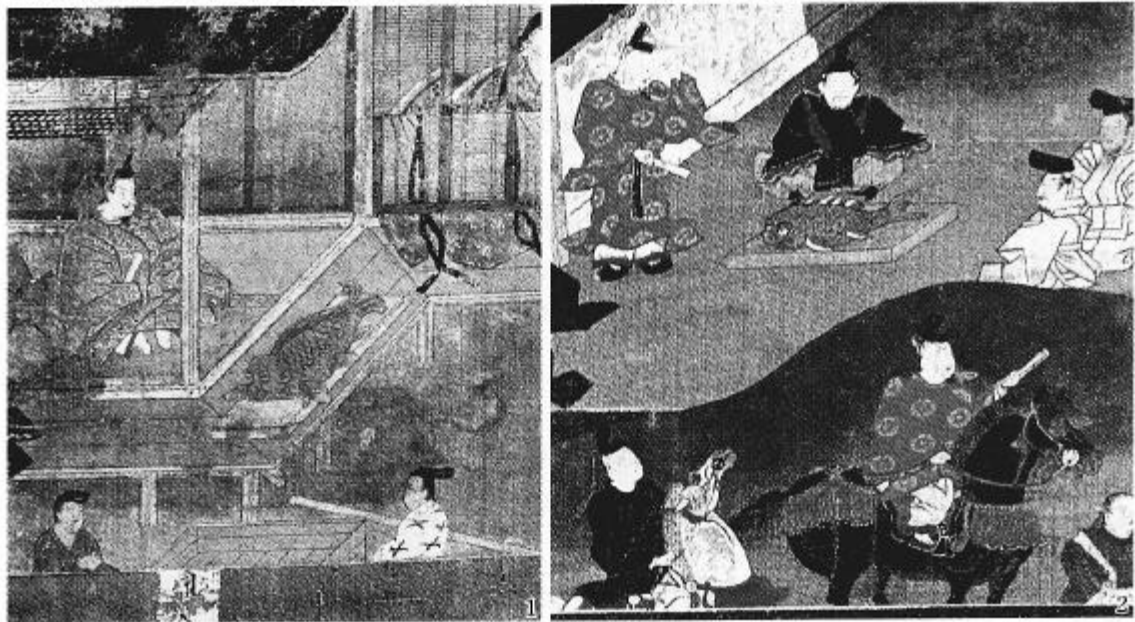
三角屋根の家を模したもの(S E12) や×印のように見えるもの (S E542) などである。

③人魚供養札と人魚絵 (巻頭図版5、第25・26図、第351図)

人魚供養札は調査区中央北部に位置するS E587井戸跡から出土した。この井戸と遺物の出土状況については前述のとおりである。これは薄い杉材を利用し、長さ80.6cm、幅14.5cm、厚さ0.5cmである。文字と絵は上半部にのみ墨書きされ、下半・裏面にはみられない。

絵は上に僧侶、下に人魚が描かれている。人魚の前には供物を載せたと思われる台と椀が描かれている。人魚は2手2足を持ち人面・魚身で顔と足を除く部分には鱗があり、僧侶は袈裟に高下駄姿で長めの数珠を手をしている。人魚の両側には文字があり、釈文は「アラツタナヤ 豆(テ)ウチ テウチ (繰り返し符号) ニトテ候 そわ可」、あるいは「アラツタナヤ ミウチ 人ニトテ候 そわ可」である。この解釈は様々であろうが、前者は「あらかわいそう (だけれども) 殺してしまえ そわ可」、後者は「とてもかわいそう 同じ人間なのにこんなに縛られてしまって そわ可」ともできよう。文末の「そわ可」は梵語で成就を意味し、「・・・ソワカ」とつけ病氣治療や疫病予防などの祈願や呪いの際に唱えられた。また僧侶の右脇には、刀子等の工具で刻まれた文字らしきものが確認できる。また同様に人魚絵を囲うような線と、これを消すような線も確認できる。

人魚といえば「上半身が人間の女、下半身が魚体という想像上の生物」(広辞苑)を思い浮かべる。しかし人魚は想像上の動物であるため、時代によってイメージはさまざまである。なかでも中世期の人魚は不吉なものとして捉えられていたようである。人魚の発見例は古代に遡り、最も古い記録は『日本書紀』推古紀27年(619年)である。11世紀中葉の法隆寺東院絵殿の『聖徳太子絵伝』には「從撰津国所獻人魚御覽之」として、庭に置かれた人面魚身の人魚を屋内から聖徳太子が見ている様子が描かれている。『聖徳太子絵伝』は浄土真宗の聖徳太子信仰に基づき鎌倉～室町時代に40例以上製作されているが、その中には同様の記述が見られるものがある。第351図の写真は1が愛知県安城市本證寺、2が三重県津市上宮寺に伝わる『聖徳太子絵伝』に描かれた人魚絵であり、前者が鎌倉時代後期、後者は室町時代後期の作とされる。またこのころになると『絵伝』の他にもその記録は急増するが、こ



第351図 「聖徳太子絵伝」にみる人魚

れらの人魚はアザラシ、アシカなどの^{ききやくるい}鰭脚類を誤認した可能性が強い。北東北における人魚の発見例は以下の通りである。

①：建仁3年4月(1203年)／津軽浦(北條五代記)／漂着。②：建保元年4月(1213年)／津軽浦(吾妻鏡)／出現。③：建保元年夏(1213年)／秋田浦(北條五代記)／漂着。④：寶治元年3月11日(1247年)／津軽浦(北條五代記)／漂着。⑤：寶治元年3月20日(1247年)／津軽浦(分類本朝年代記)／死体漂着。⑥：元禄元年(1688年)／津軽野内浦(津軽一統志)／捕獲。⑦：元禄期(1688～1704年)／男鹿浜(雲窩亭隨筆)／魚網にかかる。⑧：天明期(1781～1789年)／男鹿郡(六物新志)^(註22)／出現。

また江戸時代に書かれた『北條五代記』(1641年)には「建保元年(1213)の夏、秋田の浦に人魚ながれよる、このよし鎌倉殿に注進す、この義をはかせらにうらなはせ給へば、兵かくのもとひと申すに付きて、御祈祷あり。」との記述がある。地方において人魚を見つけた時には、凶兆であるため、鎌倉幕府に報告することが義務づけられ、報告を受けた幕府は祈祷を行ったと記している。このような背景からこの絵は、僧侶が殺されてしまった人魚に除災の供養をしている様子を描いていたのではないかと推測でき、中世の人々の宗教的色彩の濃い精神状況を垣間見ることができる。

④サバマス(第309図3～7、第352図右上)

サバマス(別名サバザラ)は、八郎瀧周辺に伝わるもので、死人がでた知らせを寺・親戚および近隣に伝える「死シラセ」^(註23)がでた後に玄関口に(第352図右上)、同図右中の忌中札は門口に立てていたものである。本遺跡では集落を区画する堀跡(S D 49・706)から出土している。

また同様のものが内陸南部の雄物川町にも存在し、この地域では「サバ」^(註24)(生飯)と呼ばれる。鬼神や鳥獣などの供養という目的で使用する。さらに高知県には「オサバイ」という苗代や水口でまつられる田の守り神をのせる棚があり、この形状がサバマスに類似するものが存在する。^(註25)

⑤オサ(第315図6・7、第352図)

オサは八郎瀧で伝統的に行われていた漁法である「オシタモ操業」に用いられた道具である。本遺跡で出土したオサは、S E 576井戸跡の横棧に転用されていたものであるが、これよりも1mほど長いオサを使用する「オシダシ操業」も存在していた。「オシタモ操業」は人力で、「オシダシ操業」は舟によって網を押す漁法である(第352図参照)。^(註26)両漁法は近年まで八郎瀧で見られたが、このオサの出土で遅くとも中世(下限時期は16世紀後半)には同類の漁法が確立していた可能性は高いと思われる。

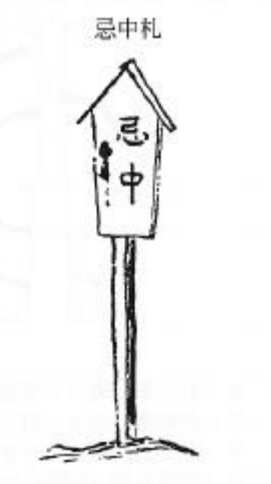
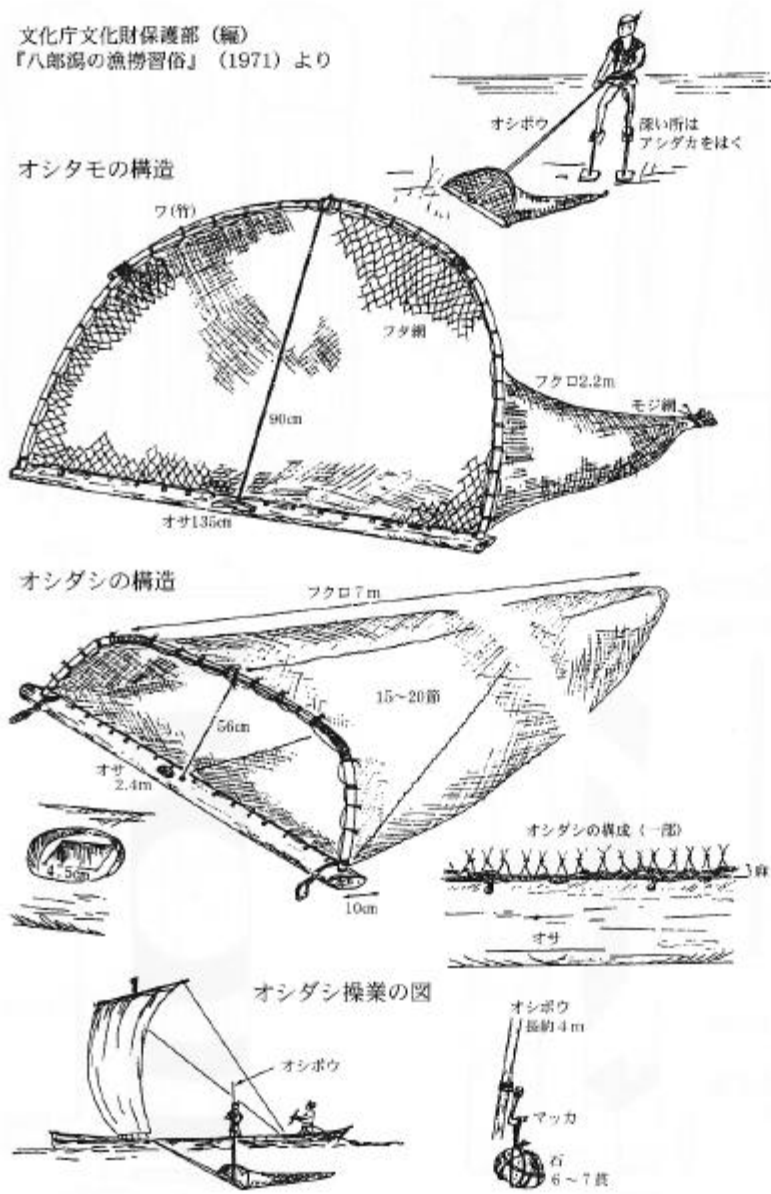
⑥箸とクシ(第352図下段)

また10,000本近く出土した箸については、これは箸ではなく漁具の「クシ」ではないかとの意見も寄せられている。クシは、漁網の一部で複数の網を連結するための箸状の小道具であり、その大きさ・形状とも箸と全く同じである。ただ本遺跡で箸としたものは、全体数もさることながら、数百本単位でまとまって出土する機会が多いことが特徴である(特にS D 706)。一方でクシは網一把(長さ約30m)あたり2本あれば事足りるものようであり、クシが大量にまとまって遺棄されることは考えにくい。なお同図右下写真は、八郎瀧干拓以前まで昭和町野村で使用していた「こあみ」である。これは天王町の天野荘平氏から寄託いただいたもので、写真右端のクシは、長さ24cmの竹製である。

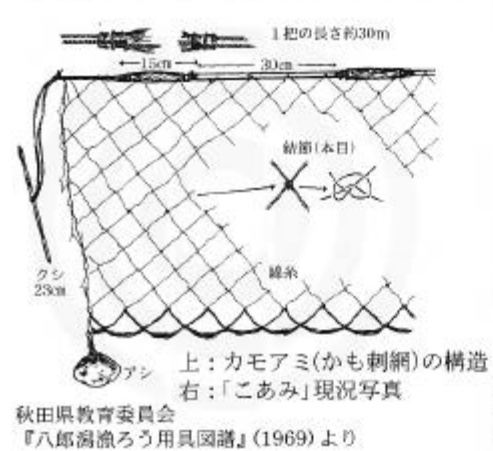
⑦砥石台(第353図1～4)

砥石台の抽出は、汐見一夫氏の指摘によるものである。特に第353図2(本文313-9)の類例は、神奈川県鎌倉市の北条時房・顕時邸遺跡(雪ノ下一丁目265番3地点)において、第3面下から出土し

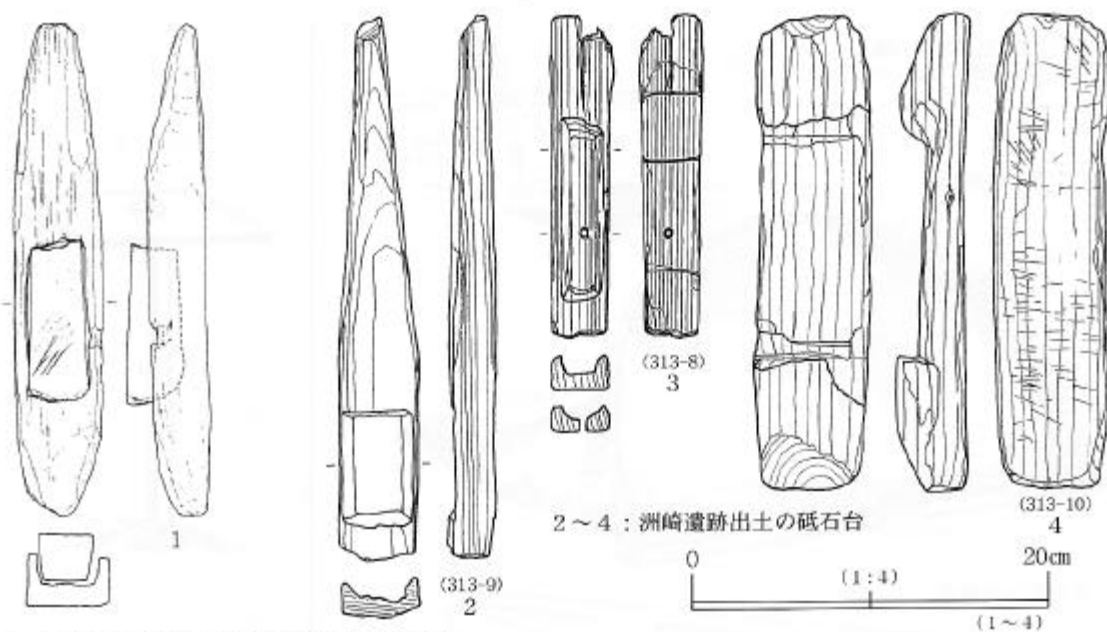
文化庁文化財保護部(編)
『八郎潟の漁撈習俗』(1971)より



中谷雅昭「暮送」
『八郎潟の研究』(1965)より

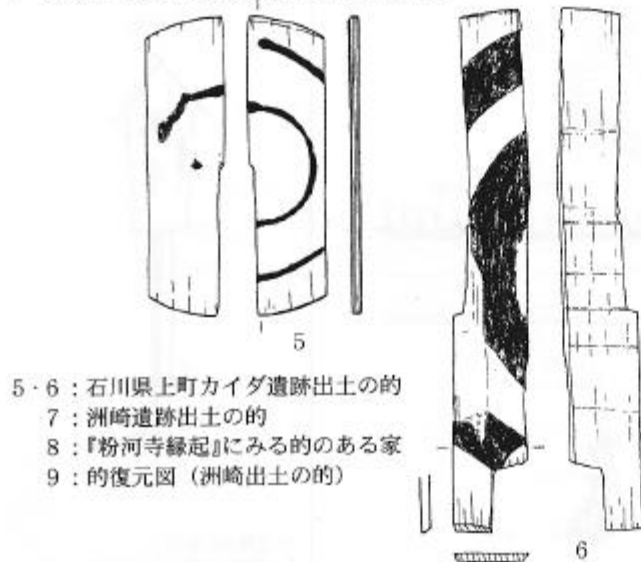


第352図 漁具と呪術具の類例

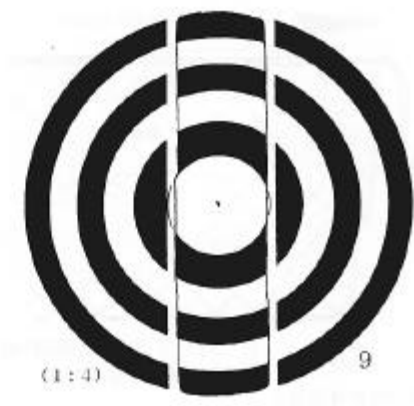
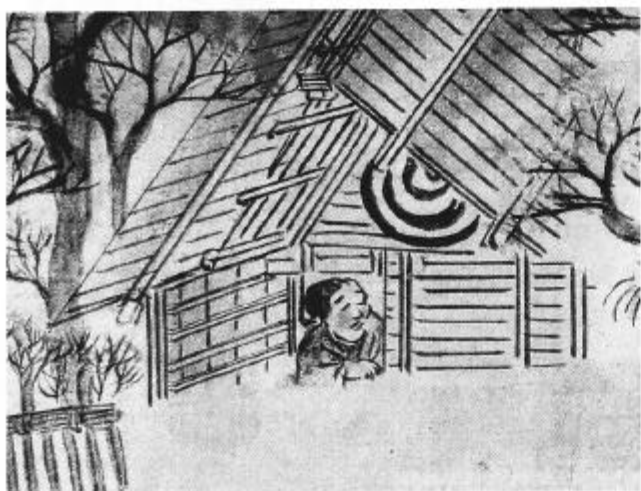
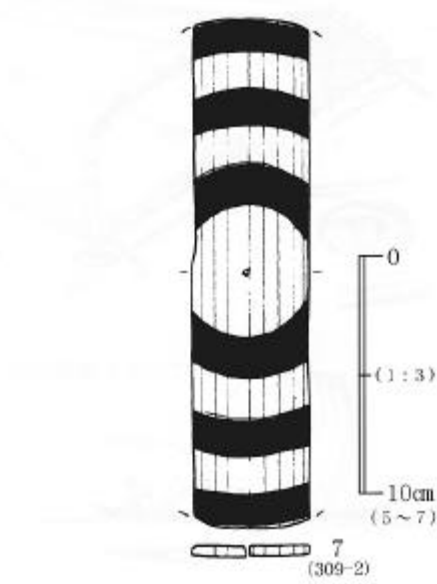


1：鎌倉市北条時房・顕時邸跡出土の砥石台

2～4：洲崎遺跡出土の砥石台



5・6：石川県上町カイダ遺跡出土の的
7：洲崎遺跡出土の的
8：『粉河寺縁起』にみる的のある家
9：的復元図（洲崎出土の的）



第353図 砥石台と的の類例

た砥石台（同1、長27.7cm×幅4.9cm）に酷似する。これには長9.2cm×幅3.1cm×厚2.6cmの砥石がはめ込まれた状態で検出され、明確に砥石台と判断される。同例は時期的には13世紀後半～14世紀初頭のもの^(註27)とされる。

⑧的（第353図5～9）

的については、発掘調査中に来跡された平川南氏が膨大な出土遺物の中から、その存在を指摘されたものである。的としての明確な出土例は確認できないが、石川県中島町の上町カイダ遺跡では曲物の底板・薄い板材に同心円状の墨書模様のある木製品が出土している。同遺跡報告では明言していないが、この2例も的であった可能性がある。これは時期的には13世紀前半のものと考えられる。^(註28)

⑨木簡の釈文と県内地名との比較

第273図1の木簡は、釈文を「□可以さワ」とし、冒頭の□を「こ」とすれば「こかいさわ」となる。ちなみに『角川日本地名大辞典5 秋田県』に集録されている県内の「小字一覧」を照合したところ、「こかいさわ」の字名は三内村（現河辺町）と土淵村（現山内村）に「小貝沢」が存在する。また5文字で「□かいさわ」となる地名は4箇所あり、末広村（現鹿角市）の「場開沢」、^{ほかいさわ}「高井沢」、^{たかいさわ}荒瀬村（現阿仁町）の^{あかいさわ}「赤井沢」、酒蒔村（現湯沢市）の「チカイ沢」である。なお最後の3文字が「□□いさわ」となる地名は28箇所ある。遺跡周辺地域には金川村（現男鹿市）の^{とべいさわ}「戸平沢」が見られるのみである。^(註29)

おわりに

洲崎遺跡は、堀・溝・道路等を区画施設とする大規模な集落であったことは動かしがたい事実となった。その上限時期は不明瞭なところもあるが、遅くとも13世紀後半代には確実視でき、下限は16世紀後半となる。17世紀以降の近世の遺物も出土するものの明確な検出遺構はなく、集落としての終焉は中世末に求めることができる。

遺跡の位置する八郎瀉東岸域は、文献上に登場する「湯河湊」に比定されることがある。『吾妻鏡』延応元年（1239年）11月5日条「出羽国秋田郡湯河湊事」や『新羅之記録』康正2年（1456年）前後に散見する「湯河湊之屋形秋田城介安日堯季」など^(註30)である。これらの記事がそのまま洲崎遺跡に当てはまるかは、現況では言及できない。しかしながら、方2町の堀による区画をもち、さらにその東隣にも堀を伴うであろう区画が存在していた可能性があり、この中心には建武2年（1335年）～貞和3年（1347年）の紀年名を持つ板碑群が存在する事実は、今後の洲崎遺跡のあり方を探る上で、いや当該地域の中世史を語る上で重要な資料を我々の眼前に提示されたものとすることができよう。

註

- (1) 仲田佐和子「絵巻物にみる古代末から中世の下駄」『福島考古』第39号 1998（平成10）年 p100
- (2) 田畑佐和子「小町一丁目107番地点出土の半月状木製品について」『鎌倉考古』24号 1992（平成4）年
- (3) 中央公論社「粉河寺縁起」『日本絵巻大成』第5巻 1977（昭和52）年
- (4) 中谷雅昭「葬送」『八郎瀉の研究』1965（昭和40）年
- (5) 美濃晋平「朝倉氏遺跡出土の竹製品 中世尺八の1つ「一節切」について」『朝倉氏遺跡資料館紀要』1987（昭和62）年
- (6) 広島県立歴史博物館『中世の民衆とまじない』1990（平成2）年 p57

- (7) 渡部景俊『鎌と鍬』秋田文化出版社 1987（昭和62）年 p97
渡部景俊『農を支えて－農具の変遷』秋田文化出版社 1999（平成11）年 p26
- (8) 秋田県教育委員会『八郎潟漁ろう用具図譜』1969（昭和44）年 p66,67
文化庁文化財保護部『八郎潟の漁撈習俗』1971（昭和46）年 p165
- (9) 秋田青年経営者協会『“結び文化”研究報告書』1989（平成元）年 p151
- (10) 関島壽子「編・組の組織構造 分類とその理論」『月刊 染色α』12月号 1984（昭和59）年 p18
- (11) 宇野隆夫「井戸考」『史林』65-5 1982（昭和57）年（『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』1989（平成元）年に所収）
(12) 本遺跡の各型の井戸跡は宇野分類の井戸跡と照合すると以下の通りである。なお本遺跡の井戸はすべて木組井戸であり、宇野氏の分類のB類に属するものである。A型はBⅠ・b類の丸太分割割り抜き井戸に類似、B型は方形のものがBⅡ・b類縦板組無支持井戸、五角形のものBⅡ・b類五角形、楕円形のものBⅡ・a類に類似するものである。またC型は1の縦板組がBⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸、2の葦簾がBⅣ類に類似するもの、3の横板組、4の抜き取り等で確認できずは、ともにBⅣ類に類似するものである。D型は1～4ともにBⅥ類の横板井籠組井戸、E型はBⅧ類の曲物積上げ井戸に相当する。またD型の細分類（a～d）についてはa類が宇野分類b類、b類が宇野分類d類、c類が宇野分類e類に相当する。
- (13) この数値が他遺跡のデータと比較して極端に浅いものかどうかは、未検証のため不明である。ちなみに雄雄物川沿いの標高5m程の微高地にある秋田市下夕野遺跡（13世紀を中心とする時期）における井戸跡の平均的な深さは183cm（50基の平均）であった。秋田市教育委員会『秋田市下夕野遺跡』1979（昭和54）年
- (14) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ 中世瀬戸内の集落遺跡』1996（平成8）年 p144
- (15) 野口雅美「道場Ⅰ遺跡出土の井戸祭祀に関わる遺物」『富山考古学研究』第2号 1999（平成11）年 p124
- (16) S E 159井戸跡の西面縦板に使用された材にもキャビキアナ（第350図上参照）があり丸木舟の側板であった可能性がある。
- (17) 鎌田幸男「男鹿の独木舟」『雪国民俗』第6集 1978（昭和53）年
- (18) 秋田県教育委員会『秋田県の木造船』1995（平成7）年
- (19) 成田壽一郎『木工諸職双書 曲物・籠物』1996（平成8）年
- (20) 岩井宏實『ものと人間の文化史 75・曲物』1994（平成6）年 p227
- (21) 信仰の造形的表現研究委員会『真宗重宝聚英』第7巻 1989（平成元）年
- (22) 吉岡郁夫『人魚の動物民俗誌』1998（平成10）年／原武男『奇話・珍話・秋田巷談』1971（昭和46）年
- (23) 註4参照
- (24) 雄物川町『雄物川町郷土史』1980（昭和55）年 p1098
- (25) 高知県教育委員会『高知県立歴史民俗資料館 常設展示案内図録』1991（平成3）年
- (26) 秋田県教育委員会『八郎潟漁ろう用具図譜』1969（昭和44）年
- (27) 東国歴史考古学研究所『北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目265番3地点』1999（平成11）年 p88・90
- (28) 石川県立埋蔵文化財センター『上町カイダ遺跡』1991（平成3）年 p101
- (29) 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 5 秋田県』1980（昭和55）年
- (30) 加藤民夫「洲崎遺跡と湖東通り－中世秋田の交易史の視点から－」『出羽路』第125号 1999（平成11）年

参考文献

- 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団『神奈川県・鎌倉市 佐助ヶ谷遺跡』1993（平成5）年
- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始編』1993（平成5）年
- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』1985（昭和60）年
- 日本民具学会『日本民具辞典』1997（平成9）年
- 梅田総太郎『木工の伝統技法』理工学社1994（平成6）年
- 珠洲市立珠洲焼資料館『珠洲の名陶』1989（平成元）年
- 世界・焔の博覧会波佐見町運営委員会『波佐見青磁展・くらわんか展』1996（平成8）年
- 吉岡康暢『中世須恵器の研究』1994（平成6）年
- 汐見一夫「砥石について－中世遺跡出土の仕上砥を中心に－」『中世北陸の石文化Ⅰ』北陸中世考古学研究会
1999（平成11）年

報 告 書 抄 録

ふりがな	すぎき							
書名	洲崎遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第303集							
編著者名	高橋 学・渡邊慎一・小山有希・工藤直子							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すぎきいせき 洲崎遺跡	あきたけん 秋田県 みなみあきたぐん 南秋田郡 いかわまち 井川町 はまいかわあざ 浜井川字 すぎき 洲崎304ほか	53366	31-9	39°	140°	19971117	29,260m ²	ほ場整備 事業に係 る事前発 掘調査
				54′	4′	~		
				50″	15″	19971205		
						19980506		
						~		
						19981030		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
洲崎遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 平安時代			縄文土器・弥生 土器・石器 須恵器・土師器		遺構はなし	
	集落跡	中世	堀・溝跡	234条	陶磁器・木製品 ・金属製品・石 製品・土製品 井戸部材	大小の堀・溝跡、 道路跡で区画され た中世の集落跡 大量の木製品が出 土		
道路跡	3条							
井戸跡	312基							
土坑	297基							
竪穴状遺構	18基							
掘立柱建物	115棟							
その他	柱穴など							

あとがき

洲崎遺跡発掘調査からわずか1年、ここに調査報告書刊行の運びとなりました。中世の集落跡という今まで関わったことのない分野の発掘・整理作業であり、しかも数え切れないほどの井戸や調査区を縦横無尽にはしる溝、さらに膨大な量の遺物が出土し、悪戦苦闘する毎日でありました。整理作業にかけられる時間や紙数等に限られた中で、できるだけ情報を詰め込もうと努力し、今年度内に刊行することができました。発掘調査と整理作業は多くの方々の助言や協力があってはじめて成し得たものであります。最後になりますが、洲崎遺跡に関わったすべての方々に感謝の意を表したいと思います。(小山有希)

洲崎遺跡の発掘調査が半年、整理作業が1年半。本当に内容の濃い期間でした。これからは井戸や木製品の夢をみなくてもいいのかと思うと心の底からほっとします。今この報告書を前にして感じていることは、洲崎遺跡はたくさんのことを語ってくれていた遺跡だということです。中世から現在まで歴史はつながっているという当たり前のことを感じる瞬間がとでも多かった気がします。この遺跡の「語り」をどこまで伝えることができたのか、心配であり、また楽しみなところでもあります。整理作業では猛暑の中、カビのアレルギーでくしゃみをしながら井戸側の復元計測をしたり、試行錯誤しながら丸木舟を何度も組み立てたりなど、普通の整理作業ではできないことをたくさんの方々と一緒に経験することができました。まさに皆で作りに上げた報告書だと思っています。最後に御教示いただいた方々、発掘調査に参加された皆さん、そして埋蔵文化財センターで整理作業を担当された皆さんに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。(工藤直子)

【整理作業担当・協力者】小塚裕姫子 斉藤浩志 黒澤幸子

粟津ひろみ 池田キミ 泉谷昭子 伊藤百合子 今川弥生 越後谷晴美 大西英子 檜尾智恵子 木元信子 草彌清美
草彌美香 国安恵美子 熊谷裕子 後藤由美子 小西文子 小柳 都 斎藤克予 斎藤美江子 佐々木薫 佐々木昌子
佐々木多恵子 佐藤節子 佐藤睦子 佐藤蘭子 品川優美子 渋谷りん子 杉澤聖子 鈴木孝子 鈴木春美 高橋宏子
高橋フサ子 高橋文字 高橋まき子 竹村和子 出原たか子 富樫厚子 富田寿美子 長沢代美子 奈良美沙都 新田ひとみ
藤田悦子 藤田睦子 細井洋子 町田京子 茂木悦子 森川宏美 森本てる子 柳田良子 山崎敬子 (敬称略)

秋田県文化財調査報告書第303集

洲崎遺跡

一県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一

印刷・発行	平成12年3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330
発 行	秋田県教育委員会 〒018-8580 秋田市山王3丁目1番1号 電話(018)860-3193
印 刷	株式会社 松本印刷



付図1 遺構配置図(全体図)



付図2 調査区北西部(右)・北東部東側(左上)遺構配置図



付図3 調査区中央南部遺構配置図

0 5m
1:100

秋田県文化財調査報告書第303集
洲崎遺跡
2000年3月
秋田県教育委員会